ISSN 0916－2631

愛知学院大学論叢

愛知学院大学

教養部紀要

第62巻　第３号

論　文

堀　田　敏　幸：ベケット、不在への挑戦……（ 1 ）

文　嬉　眞・金　美　淑：日本の大学機関における「韓国語学習」
——愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関する
アンケート結果とその分析(2)——……（ 19 ）

清　水　義　和：夏目漱石のラファエロ前派と
村上春樹訳 R. チャンドラー作『ロング・グッドバイ』の迷路……（ 45 ）

Jane LIGHTBURN：Hayao Miyazaki's *The Wind Rises*:
Oneiric Aspects of Character Development through Narrative Dream Sequence……（ 73 ）

資　料

川　口　高　風：名古屋の寺院に関する木版資料について㈲……（168）

川　口　高　風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（九・完）
——明治三十三年五月～明治三十三年六月——……（130）

2015

愛知学院大学教養部

ベケット、不在への挑戦

堀　田　敏　幸

一、愛する者の不在

　ベケットは作家になる前の四年間を、教育者、研究者として過ごしている。彼はダブリンのトリニティ・カレッジを卒業すると、二十二歳になる一九二八年にパリ師範学校の英語教師として赴任した。パリではこの地に在住のアイルランド人作家ジェイムズ・ジョイスの知遇を得て、執筆の手伝いをしながら、彼も評論『プルースト』を世に問うこととなった。マルセル・プルーストとはベケットの一世代前の作家で、長編『失われた時を求めて』の第一編『スワン家の方へ』を一九一三年に発表している。その後、続編として『花咲く乙女たちのかげに』など第四編まで出版して、この小説家は一九二二年に他界した。作品は遺稿として更に第七編の『見出された時』まで出版され、一九二七年に大作『失われた時を求めて』は完結した。ベケットがパリへ赴任したのはこの翌年であり、まだプルーストの評判が衰えぬ時期であったろう。しかし、こうした大作家をベケットが論じたのは、その人気の為ばかりではない。彼は同国人のジョイスを師と仰ぎながらも、二人の作風は正反対であって、彼が文学的共感を寄せているのはプルーストの方であった。

　パリ師範学校での二年間の任期を終えると、ベケットは母校のトリニティ・カレッジで近代語を教える講師として採用された。しかし、学生に向かって自分の知識を振りまくことに耐えられなかった彼は、旅先から突然電報を打って、わずか一年余りで教職を辞任してしまった。そうして初めて書いた長編が『並には勝る女たちの夢』である。この小説は主人公のベラックワが女性に恋をしては失恋してしまう話で、物語としては独断的で飛躍が激しいので、プルーストの長文を凝らした文体とは異質の様相を呈している。しかし、恋人の女性に対する接し方

は共通する点がある。

> 「ある男が自分の神に誓って、女の人を完全かつ本当に自分のものにするのは、彼女を…えーと…腕の中に抱きしめる時でもないし、離れていて、言わば彼女の気持ちを分かちあい、彼女の良いところを感じる時でもないんだ。それはただ、ほとんど沈黙して一人で座りこみ、彼女のもつ力強さを思い描くか、彼女への詩を作るか、いずれにしろ彼の精神の地下埋葬所で、何となく彼女が気をもんでいる事実を感じとる時だけなんだ。だから、もし君がそういう考え方に同意してくれるなら、僕が一日か二日のうちに君から去るのは、三日か四日後か来月かに、僕の神に誓って、君を自分のものにする為なんだ、と言えるかと思うんだよ。」[1)]

小説の主人公ベラックワは、彼の恋人スメラルディーナ=リーマに愛情を打ち明けようとしている。しかし、彼の愛し方は通常の方法とは異なっている。普通なら恋人たちは一緒にいて愛を告白し、肉体を共にし、その一体感を強めようとするであろう。ところが、ベラックワは愛を確かなものにする為には、何日間か二人が離れていた方が良いと言う。しかも、離れるにしても、相手の「気持ちを分かちあい、良いところを感じとる」為ではないと主張する。それでは何の為に別れている必要があるのかというと、彼の説くところでは、「彼の精神の地下埋葬所で、彼女が気をもんでいる事実を感じとる」為だと続ける。一体、恋人の「気持ちや良いところ」を感じずして、反対に「気をもんでいる事実」、つまり相手の苦しんでいるところを知る為だという主張が、愛の喜びに包まれようと願っている女性に通用するであろうか。しかも、ベラックワは恋人の状態を思い描くのに、「精神の地下埋葬所」で行うと言う。なぜこれから生命の躍動に向かって突き進もうとするはずの若者が、死者の葬られた「地下埋葬所」のような所で瞑想しなければならないのか。スメラルディーナ=リーマの反応は、理解不能の言葉以外にはない。

> 「私を自分のものにする為に去っていくって、一体どういうことなの？　私ならここ、あなたの目の前にいるじゃない。そんなこと言うなんて、ひどいわ！」 彼女は激昂した、「アナタ気デモ狂ッタノ？」[2)]

スメラルディーナ=リーマはこの言葉の最後「アナタ気デモ狂ッタノ？」を、激昂しているにも係わらずドイツ語で言ってのけた。彼女は音楽を目指して、ウイーンでの勉学を志している女性である。それゆえにドイツ語が堪能（たんのう）という訳だが、それにしてもこうした激しい感情表

現の場面で外国語を使用するというのも、作家ベケットの反俗精神の一面を物語っているのであろう。それはともかくとして、ベラックワは愛する女性を自分のものとして実感するのは、恋人同士が一緒に居て愛の言葉をささやき、肉体を共有する時ではないと考える。二人が離れていて、思慕の中で相手の「気をもんでいるところを感じとる」時にこそ、相手を我が身の中に半身として迎え入れることが出来ると主張する。しかも普通なら、こうした個人的な思いは相手の恋人に隠すものであろうが、ベラックワはスメラルディーナ=リーマがドイツ語で彼を非難した以上の衝撃をもって恋人に伝えたのである。

小説を書く前に単行本として上梓（じょうし）した評論『プルースト』（一九三一年）の中で、ベケットはプルーストの愛の形態について語っている。それは、「プルーストが強調しているように、愛は嫉妬から生まれようが、その前の段階である欲望から生まれようが、満たされない状態とのみ共存しうる[3]」というものである。プルーストの小説『失われた時を求めて』では、主人公のマルセルは恋人のアルベルチーヌが自分の目の前から不在の時にこそ、思う存分に彼女を愛することができ、恋愛の喜びを味わうことが可能だと実感する。彼女が自分の横に存在する時には、彼女の過去や現在の振る舞いに対する嫉妬や憎悪、苦悩や憐憫（れんびん）などが入り交じって、純粋に愛することが彼には困難になる。だから、恋人の女性が彼の元から不在の時の方が、彼の愛を全面的に投与できるという認識に達するのである。第二編の『花咲く乙女たちのかげに』の中で、プルーストは愛の実情を語っている。

> かつて私がシャン・ゼリゼで気づき、それ以来ますます実感したことは、ある女の人に恋をするとき、我々は単にその人の中に我々の魂の一状態を投影しているに過ぎないということ、その結果、重要なことはその女の人の価値ではなく、我々の魂の深い状態であるということであった。[4]

恋は一般的に恋する者をして、自分の人格を破壊してでも、相手へ自分の存在を捧げようとする情熱であるだろう。ところが、プルーストはそうした自己の解体される陶酔を恋愛に求めていない。彼はあくまでも相手に自分自身の「魂の一状態を投影」することを、恋の信条として理解している。自分の心の状況を第一に重視しようとする人間が、自己の解体を願うはずがない。彼は恋の相手に対して、自分の恋する気持ちの深まりを読み取ろうとする。従って、彼の方が女性に対し恋をしているという実感を持つことが優先するのであって、女性の方が彼の行動を制約し、彼の魂に動揺をもたらすことを避けようとする。プルーストはどうしたら恋の二面性を克服できるのか。それは女性が恋人でありながら、同時に彼の存在から切り離されている状態、つまり恋人の不在のとき、彼の恋愛はその心髄に迫ることが可能となる。

プルーストは不在の恋人に自分の魂を投影して、恋愛感情を湧きあがらせる。ベケットも同様に恋人が彼の眼前に存在することを好まない。プルースト論を書くベケットは、この恋の在り方に共感を覚えたことであろう。しかし、不在の恋人の価値を高く評価しながらも、プルーストとベケットではその不在に対する要望は同じという訳ではない。ベケットは自分の魂を相手に投与して、自己の拡充を図ろうという意図は持ち合わせていない。しかも、彼が恋人と離れていて相手を自分と一体であると思うのは、女性の「気持ちを分かちあい、彼女の良いところを感じる時でもない」と告白する。彼の「精神の地下埋葬所で、彼女が気をもんでいる事実を感じる時だけ」と主張するのである。自分自身の「精神」を問題にしているところは、プルーストが彼の「魂の投影」を目的としたことと一致する部分ではある。両者とも恋の相手よりも、自分の領分を大事にしている。しかし、ベケットはその精神の中で思考する対象を、自分のことよりも相手の状況、つまり相手が「気をもんでいる事実」に関心を向けている。この「気をもむ」fidgeting とは、恋における苦悩と理解して差し支えなかろう。恋に悩む女性を「精神の地下埋葬所で感じとる」とは、一体何を意味しているのだろうか。

『並には勝る女たちの夢』の主人公ベラックワは、ダンテが『神曲』で描いているような怠け者であるばかりでなく、作者のベケットのように博識でもある。恋人を唖然とさせるような荒唐無稽な言葉を発したかと思うと、その後でその説明を加えることができる。恋人スメラルディーナ=リーマに面と向かって恋人の不在論を説いた彼は、地上の恋について知人の手紙の中の言葉だと断りを付けながら、それに賛同を示す。

> 繊細な恋人たちがどんな生き方をしようと、それは零落と降伏でしか有り得ない。なぜなら、繊細な愛は定義するに、生の利害を超越しているからだ。[5)]

地上の恋は「降伏」でしかないとベラックワは言う。なぜなのか。それは、「愛が生の利害を超越しているからだ」と理由付ける。勿論ここで、彼は地上のすべての愛が失敗に帰すると説いてはいない。彼は条件を付けて、「繊細な愛」sensitive love と断っている。しかし、多くの地上の人間にとって、ベラックワが定義付けるような純粋な愛は困難を極めるものではあるだろう。そうであるからこそ、小説作品の英雄は「繊細な愛」を渇望して止まないのであるが、彼はその方法として、恋人同士が離れて過ごすことを提案するのである。離別の状態にある恋人であれば、相手のことを思って、彼女が今日の生活費に困らなかったか、他人ともめ事を起こさないで楽しく暮らしているか、というような心配を起こさないで済むであろう。ベラックワは「生の利害」、つまり生活の利害が恋人たちの純正さを穢（けが）すことに嫌悪を覚える。現実世界にあって生の利害を取り除くには、どのような方法があるのか。それは不在者となっ

て、衣食住に拘泥しないことであろう。しかし、ベラックワ自身も認識しているように、「どんな生き方をしようと、それは零落と降伏でしか有り得ない」とすれば、彼自身が実践しようとしている不在者の形態は、どこかに矛盾が生じることは必然であろう。

ベラックワが恋人のスメラルディーナ=リーマに、彼女を「自分のものにする為に去る」と語った途端に返された返事は、「アナタ気デモ狂ッタノ？」という侮蔑の言葉であった。この恋愛論を彼が信条にするとはいえ、直接面と向かって恋人に告げるのは、あまりに女性にとって衝撃が大きすぎるであろう。しかし、この告白が一般の常識を欠いているとしても、そして唐突すぎるとしても、ベケットの小説の主人公の方法として似つかわしいと言う他ない。ベラックワにとって常識に囚われないで生きるというのが、彼のもう一つの信条でもあるからだ。

「繊細な愛は生の利害を超越している」。確かに理想としては、この境地をベラックワならずとも目指したいところであろう。誰もが心の中では、一度は思い描くことに違いない。ベラックワが小説の主人公として偉大であるとすれば、それは誰もが密かに思いながらも実行できないことを明言し、それを更に実行に移そうとする大胆さにある。ベケットはダンテから借用したこのベラックワの他にもう一人、地上の愛の世俗性に対して反旗を掲げた人物を小説で描いている。それはマーフィーである。彼は無職の生活を続けていたが、恋人セリアと出会い結婚を申し込む。彼は恋人に言うだろう、「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう[6)]」と。ベラックワの愛に対する信条は、確かにマーフィーにも受け継がれている。そして、恋人で妻となったセリアにも、この考えは一度は彼女の心引くものに思われた。ところが、生きるための生活は毎日続く。一人でなら赤貧も耐えられるところを、二人の生活となると、忍耐だけで遣り過ごせるものではない。彼女は夫のマーフィーが働かないなら、自分の方が前の仕事に戻ると言う。やむを得ずマーフィーは精神病院での雑役係として、住み込みの仕事に就く。しかし、彼は自分の部屋のガス漏れの事故で死に至り、セリアとの生活も終わりを告げる。

人間の生活とは何であるのか。生活するために労働に従事することは、生の根源を破壊してしまうのか。労働は人間の生活に意欲を与え、生存することへの希望をもたらすとする思考は、多くの人の間で受け入れられている。ところが、ベケットはこの考えを真っ向から否定してみせる。なぜ労働に従事することで、愛情生活がすべて破壊されてしまうのであろうか。何も一日二十四時間働き続ける訳ではないし、毎日が過酷な重労働という訳でもないであろう。恋人たちにとって「繊細な愛」の時間を持つことは、十分に可能である。また、ベケットの小説には世俗的な愛の場面が多く描かれるとはいえ、彼の要求する愛とは「生の利害を超越」したものであって、これを地上の生身の人間が実行することには限界がある。だから、作中人物のベラックワは数日間、恋人と離れていて、その間に彼女が愛について思案するところを実感したいと願う。数日間だけの離別で、愛の純粋性を本当に獲得できるかどうか疑問に思える

が、とにかくベラックワは、恋人の不在が愛の「繊細さ」を高揚させると信じている。少なくとも恋人の不在は彼にとって、愛が人間の日常生活からの脱却であることを確信させてくれるのであろう。生きることの金銭的利害や社会的利害、これらの弊害から愛の純粋さを守る為には、生活から身を遠ざけるところの不在の状態が必要となる。不在は現実の意味を抽象化し、愛を生活から分離させるであろう。

二、物語ることの不在

不在を必要とするのは、恋人たちの愛の場合だけではない。不在は自分の過去を語ろうとする時にも必要となる。小説『マロウンは死ぬ』（一九五一年）は、すでに老人となっているマロウンが自分に物語を語って聞かせながら、死を迎えようとする話である。彼はすでに脚が悪く、松葉杖を用いないと歩けない状態であり、ベッドに横たわったまま鉛筆で物語を書き留めようとしている。そもそも彼は今いる自分の部屋に、どうやって来たのかも確かではない。そんな人間が自分の物語を語るとしても、その過去の記憶はまったく曖昧なものでしかないだろう。だから、彼は自分の経験を語るというよりも、他人を主人公にした物語を作り上げようとする。勿論そうした登場人物たちはマロウンの生き方や心情を反映することになる訳だが、彼は物語を書こうとする人間でありながらも、なぜか過去のことを創作ノートにメモするとか、日記を付けるとかという習慣は持ち合わせていない。彼は要するにプロの小説家を目指す人間ではなく、単に自分の死に際して、過去の自分を清算しようと願う老人ということになる。

> やっと私も気がついたのだが、私の記録には書き記しておくべき対象をすべて消えて無くしてしまうという奇妙な偏（かたよ）りがある。[7)]

マロウンは一体、物語を書くために何かの「記録」を取っていたのか。創作を志すほどの資料集めをしたとは到底思えない。多少の予定や出来事を自分のメモ帳に記しておく程度のことは、実行していたであろう。彼は持ち物として二本の鉛筆、メモ帳、杖だけは自分のものだと断っている。しかしながら、確かにメモ帳が存在したとして、果たしてその記録なるものにどの程度の内容が書き込まれていたかとなると、「書き記しておくべき対象をすべて消えて無くしてしまう」というように、肝心の重要な用件の方はなぜか忘れられてしまう。それは恐らく、一般的には重要だと思われるような出来事が、マロウンにとっては価値を持たない事柄としか認識されないところに起因しているのであろう。「彼はどうしても自分の行動を自分で制御できない、何かを行っている間に自分がしていることを忘れてしまい、何かをやり終えた途

端に自分の行ったことを忘れてしまう、というような具合に全てがなってしまうのだ[8]」と言う。

マロウンは歩くのに不自由する人間とはいえ、これまで確かに生きてきたし生活してきた。自分の衣食住の面倒を見てきた人間が、「自分の行動を自分で制御できない」とはどうしたことであろうか。勿論、何とか生存していくだけの最低限のことは行うことが出来たという意味であろうが、それにしても彼の意識の中では、彼の意志通りに物事が進まないと言いたいのであろう。一体、彼が生存している世界は、彼にとって生きるだけの価値を有しているのか。鉛筆とメモ帳と杖しか自分のものとして所有していないと言うマロウンにとって、生きていく生存の目的は何であるのか。彼は何を食べるというのであろうか。この小説の前作に登場するモロイのように小食で、ビールを一度飲むとその後一週間、何も飲まないで過ごしたり、空腹を感じれば、小石をしゃぶって紛らすというのであろうか。また『ワット』の中の有閑人ノット氏のように、一度作ったごった煮の雑炊のようなものを、少量ずつ一週間かかって食べるというのであろうか。マロウンは今では年老いているが、彼の若い時においても、自分の行っていることの意味が分からなくなるような人物であったのか。多分、そうなのであろう。マロウンは、前作のモロイが更に年取っただけのような人物像として描かれているからだ。

「この私というか俺というか、この私の生存の断片的な物語をいくら続けても無駄である。というのも私の考えでは、それには意味がないからだ[9]」と、モロイは言う。「生存の断片的な物語」とは一体、何か。食物を取り、働き眠る。そして母を探し、放浪をし、殺人を犯すというようなことが、生存の断片なのであろうか。確かに人間なら、生きる為にこれらのことが誰にでも課された行為であろうし、また誰しもがこれらへの潜在的な欲望を抱いている。こういう人間の基本的なことを書いたところで、それは単なる日常的な行為の、また人間の生命的な欲求の反復にしか過ぎないとは判断できるであろう。しかし、こういう人間の生活の基本を描かないで、人間の隠された本質が語れるとベケットは考えるのであろうか。人間は貝の殻の部分は食べないが、中の身は喜んで食す。柔らかい身を摂取する人間は平凡で、石のように固い殻を口にする人間は物語に描くだけの価値があると、ベケットは主張したいのであろうか。恐らくこのように単純に二分割できる話ではなく、ベケットが訴えたいことは、ただ単に生活の光景を人間の必要性に応じて描くだけでは不十分だということなのだ。人間の生活の中から、生存の意義を問い直すような問題意識を捉えようとするところに、彼の創作の意味がある。

物語を語ることは、生活の実情を単に描いてみせることではない。生活は人間という物語の基本ではあるが、その基本が単に生活の快適さや欲望の充足にだけあるとするならば、苦労して物語を作り上げるのは徒労に終わる。物語という想像上のものを欲するのであれば、生活の日常性を超えたところにある人間の野生や多様性を追求する必要がある。その多様性とは何

か。ベケットは『並には勝る女たちの夢』では、「生の利害を超越」した愛を求めようとして、不在の恋人に意義を見出そうとした。『マーフィー』では、愛する者たちにとって労働が「生の実質」を失わせることを訴えようとした。こうした日常性からの脱却は一見、人間性の無視であり破壊であるようにも見えるが、その極端とも思えるような人間存在の在り方こそが、ベケットという特異な作家の偉大な試みではあろう。作家が日常の基本に従っていては、人間の可能性を広げることは困難である。一見無謀と思えるような状況の中においてこそ、人間性の新しい飛躍は起こるであろう。

生活の単なる記録は捨ててしまえ、これが小説『マロウンは死ぬ』の主人公が採用する鉄則である。しかしそうであれば、物語を書こうとする人間は、どのようにして物語の構想を立てることが可能なのであろうか。マロウンは彼の話そうとする物語の中で、このような考えを言う。「思い出の一致とはもっと後になって、忘却と連れ立ってしかやって来ないものだ[10]」。これはランバート夫人とその娘が抱いている、サポスカットという少年に対する思い出を問題にしている文で、サポスカットの思い出が親子の間で一致するのは、「忘却」を待ってからになると述べている。ここでは親子の思い出の一致を問題にしているが、これをマロウン自身に適用してみるなら、彼の「記録」に対する確信は忘却と連れ立ってしかやって来ない、というように置き換えられるだろう。マロウンは彼の記録を忘れてしまうと言う。しかし、彼が物語を語ろうとする時には、この記録の復活が必要となる。どのようにして、失われた記録を取り出すのであろうか。それは記録が「忘却」の中から、浮上してくるのを待つしかないであろう。

忘却は単なる喪失ではない。一見、見捨てられ忘れ去られたかに見える過去の記憶は、完全に消失したことを意味するものではない。人は忘れてしまった記憶を、後になって思い出そうと試みるであろう。しかし、どんなに意識して努力してみたところで、一度無価値なものとして捨てられてしまった記憶は容易に姿を現さない。プルーストの『失われた時を求めて』は、過去の忘れ去られた記憶を自分の意志で呼び戻そうとしても叶わず、ふとした偶然の切っ掛けで思い出すという構造を基本に据えている。例えばマルセルがマドレーヌ菓子を浸したお茶を飲もうとした瞬間に、彼は少年時代にレオニー叔母が出してくれた菩提樹花のお茶を思い出し、当時の感情が湧き上がってきたと語る。忘却の中に沈んでいた記憶を、偶然の出来事から思い出す。これはベケットにとっても重要性を持っている。マロウンは過去の記録を書き留めないで、忘れてしまうと言う。しかし、この忘却の中から再度浮上してくるものこそが、彼にとって人間性の本質を明かすものとなる。

ベケットは忘却の中に置かれた事象の不在を重視する。彼はしかし、プルーストが偶然の作用から過去の喜びに満ちた時間を思い出すというような、個人的な経験の復活からは隔たっている。ベケットは「何かを行っている間に、自分がしていることを忘れてしまう」というよう

な状況に、彼の作中人物を置いている。今行っている何気ないことを忘れてしまう訳であるから、プルーストのような歓喜の復活という事態にはならないであろう。ベケットは人間の生における不必要なもの、人間の生活における義務としての悪習を放棄したいと願っている。労働は純粋な愛を穢(けが)すというような、生の条件を超えたところにある人間の根源を追求しようとする。彼は人間によって穢されていない始原の状態を希求するゆえに、現実の状況を捨象しようとする。この切り捨てられた生活の現場こそは、彼が書き留めるに値しないと判断したものである。しかし、この不在の中から、ベケットは新たな人間の状況を模索するのである。

現実の不在の中から新しい人間性を作り出す。これに対してマロウンの語る物語の登場人物マックマンは言うだろう、「すべては何事も起こらなかったかのようであり、また何事も起こることは決してないかのようだった[11]」と。しかし、この「何も起こらない」という不在の中にこそ、人間の条件を超越した新たな世界の誕生が期待されるのではないか。物語の中で偉大な何かが起こるのか、それとも何も起こらないのか。虚構の中で新しい人間性を生み出すために、リアリティを持たせることは難しい。小説『ワット』の中で、ノット邸でのワットの前任者であったアルセーヌは、仕事の先輩らしく訳知り顔でこう説いてみせる。

> 私たちの知っていることがかなりの部分、あの語りえぬとか、口にすべきでないとか言われているものの支配下に置かれているのです。それゆえ、それを語ろうとしたり、口に出して言おうとするすべての試みは、失敗すべく定められているのですし、失敗以外にはないのです。[12]

「私たちの知っていることは、語りえぬものの支配下に置かれている」。確かに私たちが日常の世界で知りうることは限定されていて、人間を取り囲む全世界はその神秘の世界を無限に有している。しかし、人間の理知は、その大世界に人間の知り得ぬことが無限にあることも自覚している。そうした未知の世界をすべて解明しようとする試みは、人間を敗北へと導くであろうが、一つずつ知識を増やすことで、人間は生物界の頂点に立っている。ベケットが小説『ワット』を書いた時期は第二次世界大戦の最中であり、人間は同胞を殺害し、築きあげた文明を破壊の中へと押し込んだ。人間の愚かな欲望は知性を悪徳の方へと向け、世界は不条理の混乱の中へと落ち入った。私たちの知っている確かなことも、「語りえぬ」未知のものの前ではその有効性を喪失してしまったのである。このようにベケットの時代の戦争体験を持ち出せば、人間の無知は甚だしいという結論に至る。ただし、ベケットは戦争の惨禍の中にありながら、戦争状況を具体的に作品に描くことは避けていた。彼の主人公たちはマロウンを始めとして、松葉杖を用いないと歩行も不可能なほどの条件に置かれている。なぜか彼はこれの理由を

語ることを忌避している。

語り得ぬことは無数にある。しかし、これを一件ずつ解明していくのが人間であり、創作家の使命であろう。ベケットは「生存の断片的な物語には意味がない」と説く。慣習の中で生活の惰性に埋もれている人間を描いたところで、新しい人間の形態は創造されないであろう。彼は人間の手足をもぎ取ってでも、彼が思い描く空想の世界にリアリティを与えようとする。体が自由に動かせなければ、人は想像の世界をたくましくするであろう。想像力は作家に新しい人間像を提供する。なぜ人間は働く必要があるのか、純粋な愛は生の利害を超越できるのか。マロウンは自分の今行っていることを、忘れてしまうと言う。今行っていることは単に生活上のための労働であって、それには意識して記録するだけの価値がないと考えるのであろう。生きるとは何か、生きるに値する人間のすべき行為は何か、これをベケットは問おうとしている。生活のために必要なだけのものは、不在の中へと放り込んでおくことが肝要である。不在により生まれた自由の中からは、作家の探している本質的な生き方が見出せるであろう。

三、不在への挑戦

マロウンは自分が今行っていることも忘れてしまう、と言う。老いると人は今しようとしていたことを何かの弾みで思い出せないことがあるし、よく知っていたはずのことも度忘れしてその言葉が出てこない。これは加齢による脳の機能低下ということで、生命体の宿命であるが、マロウンの場合はそれが頻繁に起こって彼を悩ませる。彼はしかしながら、そうした忘却による不在の中から生活の本質を探（さぐ）ろうとする。不在が生活の不純物を濾過して、彼に人間の根源的なものを開示することを期待するのである。一方、『マロウンは死ぬ』の前作『モロイ』（一九五一年）の主人公もまたマロウンの兄貴格として、物事の忘却にかけては引けを取らない。彼は自分の名前さえ忘れ去っている。そして、自分が誰であるか分からず、まるで他人のように自分自身の前を歩くことになると嘆く。モロイはこんな状態のとき、「他人の光の中に滑りこんでいる[13]」ようだと実感する。

> そこから引き返そうとする時の苦しみ、どこに引き返すのか言えない、それは出来ないことだ、恐らく不在へだろう、どうしても引き返さねばならない、私の知っていることはそれだけだ。〔…〕[13]

モロイは自分が誰か分からない。まるで他人という「光」の中に、入り込んでしまっているかのような錯覚を覚える。そこからどのようにして自分に復帰するのか、彼にはその確かな手

段がない。光の中の自分は他人であって、本来の自分を取り戻そうとしても、そもそも本来の自分というものの理解が曖昧である。彼は離人症に掛かっているかのように見える。自分で自分の実感が湧かないのである。モロイはどこへ戻ったらよいのか。自分に戻ることは可能であるのか。もし現実の自分に戻れないとすれば、彼に残された最後の着地点は、「不在」という自分であるしかない。不在の自分とは一体、誰であるのか。本当に自分であるのか、それとも他人であるのか。過去には存在していたが、今となっては光の中に消えてしまった自分であるのか。自分が他人であるよりは、たとえ不在であっても、自分という名目の方が居心地が良いというのであろうか。自分が誰であるか実感できなくなってしまった以上、自分という存在を支えてくれるものは、自分という呼び名であるのかもしれない。たとえ不在であるとしても、いずれ自分という現実に帰還するには、他人であるよりは不在の自分の方がより有利であると思えるのであろう。

人が不在になるとはどういうことなのか。マロウンはこんな風に不在の在り方を例える。

> この二日間があったために、マロウン（今ではこう私は呼ばれている）ともう一人の人物のことについてすべて解決でき、うまく方（かた）が付いたという訳だ、後のことは私に関係のないことだからね。それは言い難いことだが、細かい砂か、または多分、塵（ちり）か灰の積もった小さな山が二つ崩れるのに似ている、その二つの山は大きさが違うとはいえ、いわば同じような調子で小さくなっていって、それぞれが自分の場所で、不在という貴重なものを残すことになる。[14)]

「砂の小さな山が二つ崩れる」。そして、次第にその山は形を失ってしまい、後には平らになった砂が残る。それがマロウンの言う「不在」であるのだろう。この譬え話は理解しやすい。なぜなら、最初にあった砂の山は形を失ってはしまったが、その山を作っていた砂は地面に残っているからである。平らになってしまった形骸を見て、それが山の不在を表していると指摘することは、失われた山をその材料である砂が保証していることになる。山は不在だが、砂がそこに山の存在したことを証拠立てている。この砂の話では、実体である山が砂と化した存在として暗示されているという点で、不在の正体が明瞭である。それでは、この二つの砂の山の譬えと、マロウン及びもう一人の人物との係わりはどうなっているのであろうか。この引用の箇所だけでは「もう一人の人物」が何者なのか分からないために、説明が必要となる。

「もう一人の人物」とは誰なのか。マロウンは自分の過去の経歴を正しく話そうとする訳ではないし、むしろ自分が空想した人物に勝手に名前を付けて、断片的な話を語っている。従って、マロウンの言う「もう一人の人物」が彼の作り話の中の少年サポなのか、老人のマックマ

ンなのか、それとも直前に登場したジャクソンという人物なのか判然としない。恐らくこれらの人物ではなく、もう一人の人物とは死んだはずのマロウン自身ではないか。マロウンは話をしている自分自身でさえも確信がなく、引用の箇所でも「(今ではこう私は呼ばれている)」と括弧を付けて、自分の存在を規定している。今の自分が不確定であるうえに、更に彼は死んだはずの自分を持ち出す。「私は今やもう死んでいる、そして、何事も死んでいなかった過去とほとんど同じように続いているのかもしれない、という可能性が残っている[15)]」というように、数ページ前のところで言う。彼は死が森の中で起こったのか、それとももっと以前かもしれない、というように思い出そうとするが、生きて話をしようとする彼がいる以上、勿論死んだことが事実かどうか断言を避けることになる。

マロウンはもう死んだ、しかし今も生きている。このどちらに真実があるのか。彼は死んだ状態で生きている、これが矛盾する二つの様態を統一できる解決案ではあろう。死者か生者か、マロウンはこの難問に一応の決着を付けたと言う。これが、「砂でできた小さな二つの山」の譬えで表現されていることになる。二つの砂の山はお互いが同じような調子で崩れていって、平らな状態になってしまう。これをマロウンは「不在」と認識したのであるが、人間に当てはめてみるなら、生きているマロウンと死んだマロウン、二人は山が両方とも砂で出来ているように、元になる物質は同じである。二人の人物は人間である。すると、同じ物体から出来ているものが同じように崩壊して、元の形態を消失してしまうという場合、人間が形態を失うのは砂の場合とは条件が違うであろう。人間が火葬で灰になってしまうというのであれば、砂と同じように理解できる、すなわち灰は二人の人間の不在を表していると。しかし、マロウンの場合、一方は生者でもう一方は死者であって、どちらの人間が物語を話しているのか、判断がつかないという状況に置かれているに過ぎない。

ベケットは、マロウンという人間の何が不在だと言いたいのか。生きて物語るマロウンはもしかしたら、すでに死んでいるはずのマロウンかもしれない。生者のマロウンは実際のところ、存在するかどうか確証はない。だから、ここで「不在」だという場合、不在なのは生者のマロウンではないのかと憶測しているのである。死者のマロウンが仮に物語を語っているとすれば、死者は幻影として姿を現しているのであって、元々不在なる人物として認識されている。だから、作者のベケットがマロウンに対し不在だと表現する場合、彼は崩れて同じ砂に変化してしまった二つの山が不在になっているように、生者のマロウンも死者のマロウンと同様な不在者となって、二人のマロウンは区別ができない人物になってしまったと、訴えているのである。生者のマロウンは同時に死者のマロウンであって、そこに居ると同時に居ないという不在なる人物を形成している。

しかしながら、マロウンは実際のところまだ死んではいない。彼は近いうちに死を迎えるだ

ろうとは予感している。それまでの間、自分で作った物語を自分に話して聞かせようと思いつく。しかし、自分の物語を作ることは単なる時間つぶしどころか、そこには大きな危険が待ち構えていることを、彼はまた自覚している。「またしても物を考え始めたら、私は自分の臨終を台なしにしてしまうだろう[16]」と言う。なぜ彼は自分の過去を振り返ることで自分の死に際が危うくなる、つまり死ぬことに失敗してしまうと思うのであろうか。マロウンは死が近いことを知っているだけでなく、彼はこのような思いさえ抱く、「私は死の中へ生まれようとしている[17]」と。死は彼にとって人生の終焉（しゅうえん）ではなく、むしろ新たな生への開始であるのか。新しい生を望む人間にとっては、死の門を一度はくぐり抜ける必要がある。死が新たな生への入り口であるとするならば、その死を失敗に帰することは許されない。マロウンは自分の死を実りある物にするために、それを害するような行為は慎まなければならない。人生を考え直すことは、自分の「臨終」にとって良い結果をもたらすであろうか。人生を振り返れば、きっと善行よりも悪業（あくごう）の方が多かろう。悪業が多いばかりか、それに対して良からぬ奸策（かんさく）を巡らして、自分の話を改竄（かいざん）してしまうのではないか。そして、これ以上に恐れなければならないのは、人生を振り返ることで、自分の人生に決着が付けられなくなってしまう事態である。自分の死に納得がいかなければ、未来を開くはずの死は訪れない。

人生を振り返る。しかし、今いる部屋へどのようにしてやって来たのかも思い出せない人物が、自分の過去の生き様をうまく描き出せるだろうか。だから、マロウンは自分の経験よりも、思いつきで浮かんだ他人の物語を語ろうとする。その他人とはマロウンの呼び名を変えただけの人物であるのか、過去に交友を持った知人のことなのか、それとも彼自身がその場で思いついた架空の人物なのか。恐らくこのどれもが重複して、彼の物語の登場人物を形成するのであろう。マロウンは自分の行っていることさえも、その場で忘れてしまう。こうした人物が語りうることは、過去の行動や時間や場所を正確に記録することではない。彼は自分の行為の根源にある、生きることの意味を確かめようとする。人は何ゆえに生きるのか。これを理解しなければ、どんなに生活が豊かであろうと生の意味は完結しない。人生の本質を探ろうとする者は、自分の心の奥深くに秘められている生の謎を覗いてみようと欲するであろう。なぜなら、人は毎日の生活の糧（かて）を得るための労働に疲弊（ひへい）し、社会の規範を守るために精神を閉ざしているからである。マロウンは自分の心底から湧き起こる声に耳を傾ける。

> 私は遠くの方でしゃべっている自分の声を、はるか彼方にある心を聞きとるだろう、ルイ一家のことを話し、私自身のことを話し、この場所からは遠い彼方で、おのれの廃墟にまみれて、さ迷っている自分の心を聞きとるだろう。[18]

「自分からは遠い彼方にある心、廃墟にまみれてさ迷っている心」を、マロウンは聴取しようとする。なぜ遠い心なのか、なぜさ迷える心なのか。それは、現在の自己が本当の自己だと信じることが不可能だからである。自分は何かを語りながら存在している。しかし、自分とは誰なのか。マロウンなのか、マックマンなのか、レミュエルなのか。一体誰なのか、自分でも確証はおぼつかない。語っている自分は生きているマロウンなのか、もう死んだはずのマロウンなのか。自分の物語を語ろうとしているのに、自分の存在は希薄になり、他の人物が主体をなす。なぜ、精神病院に入居している人物が登場するのか。そこでの看護人レミュエルは、なぜ二人も斧で殺害するのか。こうした物語は死に至るまでの暇つぶしに行った、単なる架空の出来事なのか。物語の人物が変わっていくように、マロウンの存在意識も生から死へと流れていく。

マロウンは死んだのだろう。次のベケットの小説『名づけえぬもの』（一九五三年）では、語り手の前をマロウンが通っていくと言う。この語り手は名前を明かさない。彼はマロウンが行ったのと同様、意識の中で何人かの名前を曖昧なまま挙げながら、物語らしいことを話し続ける。この人物はもしかしたら、死の世界に入り込んだマロウンであるとも見なせよう。マロウンは死の到来までの空白の時間を、物語を話すことで充足させた。『名づけえぬもの』の語り手はもはや名前を忘れるどころか、それさえも持たない。彼はただ語ることにおいてのみ、その存在が与えられている。語るだけの人間は、個人的な名前の明示を必要としないのであろう。『名づけえぬもの』の話者は、個人的な自我意識のすでに崩壊した時点で語っている。だから、語ることによって自己の真実を探ろうとするのだが、彼は特定の名前を持った人物、それもこの地上においてすでに何らかの経験を積み、社会的責任を果たしている特定の人物として、自分を規定することからは逃れている。小説の冒頭はこう始まる。

> さて、どこだ？　さて、いつだ？　さて、誰だ？　そんなことは聞かないでくれ。俺、と言えばいい。〔…〕
> 俺はしゃべっているようだが、それは俺じゃない、俺のことをしゃべっているようだが、それは俺のことじゃない。[19)]

「俺はしゃべっているようだが、それは俺じゃない」。では一体、一人称の「俺」とは誰であるのか。ベケットはこれに対し、「そんなことは聞かないでくれ」と先手を打つ。「俺、と言えばいい」と言いながら、その「俺」さえもすぐ後では否定してしまう。否定された「俺」とは一体全体、誰であるのか。勿論、何かの物語を語ろうとしている人物であることは確かである。しかし、語ることによって、彼の存在が確定されるのであろうか。それは断定できない。

なぜなら、語っている人物はその物語の中で様々な人物、つまりバジル、マフード、ワームといった別名となって姿を現すからである。語っている人間の主体は何であるのか。語り手とはその場にいて、物語を話すだけの存在と化した非人称体であるのか。人称を持たないことによって、彼はかえって物語の中を自在に彷徨する。ベケットと同世代に当たる小説家モーリス・ブランショは、ベケットの非人称性について述べている。

> 作品は、それを書く人間が、作品のために自分を犠牲にして別のものになることを要求する。或る一人の他人となるのではなく、その者が生きているとはいえ、義務や満足や利害をもつ作家となるのでもなく、むしろ誰でもない者に、作品の呼びかけが鳴り響く、空虚にして生気に満ちた場になることを要求する。[20)]

物語作品を書く人間は「誰でもない者」であり、「作品の呼びかけが鳴り響く空虚な場」になるとブランショは言う。作者が作品のための「場」になるということは、作者自身が不在となって、そこに個人の存在を超えた真実を見出すことを意味する。彼の想像力は作者自身であることを超越し、別の人格として物語を形成しようとする。物語を書く人間は自分を創作の入り口として捉えるが、一歩その中に入ってしまうやいなや作者を取り巻く想像力の渦は、彼を混乱の場でしか有り得ないものに変えてしまうであろう。ベケットの主人公モロイもマロウンも、そして『名づけえぬもの』の話者も自分の物語を語り、それを書き留めようとする。彼らは物語を書こうとする前から自分が誰であり、どこに居るのかも分からない非人称的な人物として、人格を形成していた。こうした人物が自分の存在理由を探そうとして、過去の経緯を想起しようとするほど、彼は書く現場で不在の意識を強めることになる。書く人間は個人の真実を求めようとするが、一旦書き始めるや、彼はその個人を超えて「誰でもない者」、人間の真実をになった非人称の存在として作品の現場に臨むのである。

ブランショは作家が書くことによって、非人称の「誰でもない者」になっていくと言う。しかし、ベケットの作品に登場する語り手たちにとって、彼らが誰でもない者と認識するのは、語り始める以前から起こっていることであり、彼らは現実世界においてすでに不在の人物を目指している。なぜベケットの登場人物は、物語の書き手になる以前から不在者になろうとするのか。それは彼らがこの現世での生活において、自分が何者であるのか確証が持てず、自分の存在を特定の人格に結びつけることが不可能なためである。自分が誰であるのか、自分がどのような人物であるのか、自分が何を生きがいにしているのか。どれ一つとして満足を与えてくれるような解答が得られないためである。そして更に言えることは、何者であるか認識できないこと以上に、彼らが地上の何者でもない状態をむしろ歓迎しようとしている点にある。彼ら

は労働による人生の意義を疑っているし、人の愛情が生活によって傷つけられることを嫌悪している。彼らは怠惰に身を任せて、世界を放浪することに愛着を抱いている。こうした人間は自分自身を社会的に何者であるのか、地上のどこに住まい、人生の何時(いつ)に活動したのかというような規範からは、逃避したいと考えるであろう。ベケットの主人公たちは既存の社会に組み込まれることに、強い拒否反応を示すのである。『名づけえぬもの』の話者はこのような慷慨をもらす。

> 自分がどこに居るのか、ずっとどこに居るのか知りながら、そこに居ないというのは何とよく出来た話じゃないか！　あとは静かに四つ裂きの刑にされるだけのことだ、自分が永久に誰でもないことが分かるという至福のうちに。21)

「どこに居るのか知りながら、そこに居ない」、存在していながら、そこには居ない、居ると同時にどこにも居ない。これはどのような存在形態であるのか。このような有り様が現実の人間に許されるのであろうか。『名づけえぬもの』の語り手は、これが作り話ではないと自嘲してみせるが、彼はこの存在様式に強い欲求を抱いている。存在すると同時に存在しない、この在り方とは彼が不在者として存在することではないのか。不在者とは一定の場所に居ない者のことである。そこには居ないが、どこか別のところに存在している。現に居るはずの人物と、そこに姿のない不在者とは勿論、同一人物でなければ、これは完全な詐欺(さぎ)と理解される。居るはずの人物と不在者とは同一人物である。このトリックを成立させるために、ベケットはその人物が「誰でもない」personne と条件づける。誰でもない人物とは何者なのか。その人物が人間としての名前を持たないということか。確かに『名づけえぬもの』の話者は名前が不明だ。しかし、これだけでは不十分であろう。その者が「誰でもない者」になる為には、この地上において生活の為に生きる者であってはならない。彼は労働を拒否するであろうし、安住の地に身を置くことを避けるであろう。彼は家庭を持つことを断念し、世界を放浪の混沌の中へと投げ入れるであろう。地上の生に疑心を覚える者だけが、「誰でもない者」として不在者の権利を得られるであろう。

誰でもないことは、「四つ裂きの刑」と同時に「至福」である。なぜなら、誰でもなくどこにも居ないということは、第一に地上の存在者として許されざることであり、刑に値することだからである。現世に生存する以上、人間は誰か一人の人物であり、どこか一定の地に身をさらさなければならない。それを拒絶するのであれば、その者に与えられる条件は死への「刑」でしか有り得ない。しかしながら、同時にその者が死の条件を意識の中で許容するとなれば、彼には死の向こう側に見える誰でもないという不在者が誕生する。本当に死ぬことなしに、不

在者になれるのか。この有り様を証明するには、奇跡を待つしかないであろう。そうであれば、『名づけえぬもの』の話者は不在者の可能性を、こんな風に考えてみようとする。

> ひかえず率直に、自分を何らかの仕方で存在している者であると見なすこと、どんな仕方かは問題じゃない、細かいことは抜きさ、この物語がふと自分の物語になろうとした、その当の人物であると自分を見なすこと。[22)]

物語の世界に存在を移す。これであれば、物語を語っている人物は、語り手としてその場に存在している。と同時に語り手は物語の登場人物として、その物語の中に存在を移している。彼は声を出す語り手としてその場に在りながら、同時に架空の物語の中に存在を移行させるのである。この時、この人物は語り手として現実世界に存在する以上に物語の人物として、つまり不在者として架空の世界に生を得ている。ただし、物語の中で語られた人物の誰もが、不在者として生きられる訳ではない。ベケットの場合、そうは単純に事は運ばない。語り手はそもそも地上の生活の拒絶者であって、自分の存在意義に疑問を抱いている。そうした苦悩する人物であってこそ、語りの世界に不在者としての別人を持てるのである。

物語の中の人物、それは語り手自身の反映である。しかし、彼はこの物語自体が、本当に価値あることなのか疑っている。その不確実な世界に身を寄せようとしている人物は、本当に不在者として現実の生の価値を代弁できるのか。それさえも不安に思いながら、自分の存在を物語の中に移してみようとする。その物語行為の中に賭けようとした、真実としての自己こそが問題なのである。現実世界の中で生活することに真実を奪われている自己を、新たな生へと復活させなければならない。ベケットはこの語りの中にある不在者に、真実の自己を捉えようとする。ただし、物語の中の人物は、語りの続いている時間の中だけに存在するものなのか。『名づけえぬもの』の話者は、話を切り上げることが出来ない。彼はまるで呪文を唱える者のように、現実の災いを避けようとしている。真実の自己とは永遠に続くものではなく、語りの瞬間ごとに垣間見られる危うい存在ではあるのだろう。ベケットにおいて誰でもない不在者とは、現実の苦悩する人物と一体となった自己なのである。

注

1）サミュエル・ベケット、『並には勝る女たちの夢』、Samuel Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p. 25

2）前掲書、p. 26

3）『プルースト』、Beckett, *Proust*, Les Éditions de Minuit, 1990, p. 66

４）マルセル・プルースト、『花咲く乙女たちのかげに』、Marcel Proust, *A l'ombre des jeunes filles en fleurs, A la recherche du temps perdu*, I, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1954, p. 833
５）『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, p. 27
６）『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 64
７）『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 143
８）前掲書、p. 117
９）『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 84
10）『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, p. 71
11）前掲書、p. 176
12）『ワット』、Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 64
13）『モロイ』、Beckett, *Molloy*, pp. 62–63
14）『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, p. 79
15）前掲書、pp. 74–75
16）前掲書、p. 12
17）前掲書、p. 183
18）前掲書、p. 69
19）『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, Les Éditions de Minuit, 1953, p. 7
20）モーリス・ブランショ、『来るべき書物』、Maurice Blanchot, *Le livre à venir*, Gallimard, Collection Idées, 1959, p. 316
21）『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, p. 87
22）前掲書、p. 174

日本の大学機関における「韓国語学習」

——愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析(2)——

文　嬉眞・金　美淑

1．はじめに

本稿は、「日本の大学機関における「韓国語学習」」の現況とその現状分析を中心テーマとする論稿である。したがって、本稿は本学で実施したアンケートの結果を分析した前稿[1)]に引き続く、言わば「続号」に値するものでもある。本稿の主な構成は、本学の第 2 外国語となる「韓国語」選択必修科目の受講者を対象に設問調査を実施し、それを分析する内容となっている。具体的に言えば、韓国語を学習していく過程の中で、最初の第 2 外国語を選択した時に抱いた韓国と韓国語に対するイメージ（認識）と語学学習の目標とが学期終了の時点で如何に変化するのかに関する追跡調査を行ったのが本稿である。

本稿の目的は、「第 2 外国語」、特に韓国語の授業に関する到達度または満足度を設問調査の対象とし、学習開始時と各学期終了の直前の 2 回にわたる調査結果を計量的な方法を用いて分析する点である。その折に本稿の調査対象となるのは、以下の二つの学部学生である。厳密にいえば、本学の第 2 外国語として韓国語を選択した全ての受講者ではなく、「文学部・心理学科」と「商学部」の 1 年次に限定しての受講者である。さらに言えば、第 2 外国語としての本学における「韓国語」の学習現況を綿密に分析した後に、その分析結果を基に今後の第 2 外国語の授業改善の作業に反映するのも、一つの狙いとしている。

２．文・心理・商学部の「韓国語Ⅰ・Ⅱ」学習者に対するアンケート調査（第２回目・第３回目）の結果と分析

2.1.　アンケート調査の目的

本調査の目的は、第2外国語としての韓国語の受講者に対する1回目の調査結果を基に2回目・3回目の調査結果と合わせて分析することである。その際に、彼らの受講動機や、受講者自身が設定する到達目標とその学習上の要望レベル、韓国語の習得後の活用度をも考察する。その上で究極的には韓国と韓国語に対するイメージなどが学習の進展とともに、どのように変化するかを把握することである。それを基に、本学の韓国語教育の方向設定やカリキュラムの改善への取り組みおよびシラバスの作成の際に活用するための基礎資料の収集をも目的に据える調査の実施となる。

2.2.　アンケート調査の概要

本調査の概要は、以下のとおりである。

1）実施時期　：第2回目2013年7月9日または10日
　　　　　　　第3回目2013年12月17日または18日
2）調査方式　：無記名による選択回答や記述形式
3）調査対象　：「文・心理・商学部」（KA・KB クラス）
　　　　　　　1年次の受講者
4）回答者数：　①文学部・心理学科
　　　　　　　　第2回目66名（男：32名／女：34名）
　　　　　　　　第3回目60名（男：27名／女：33名）
　　　　　　　②商学部
　　　　　　　　第2回目74名（男：39名／女：35名）
　　　　　　　　第3回目76名（男：41名／女：35名）

2.3.　第２回目アンケートの調査内容と回答結果

2.3.1.　韓国語の学習目標の実現状況

本節の課題は、春学期が終わる直前（約4か月間の学習期間）に韓国語を受講している学生に対する韓国語の修得状況に関する現状を分析することである。それと関わって、本節は学生自身による自己評価を調べる目的で、アンケート調査を実施し、その現状をまとめている。その結果、現時点で受講者自らが韓国語能力をどう自己評価するのかの項目に関しては、以下の

ような回答が得られている。まず上記の項目に関する回答では、〈表１〉のように文学部・心理学科と商学部の両学部ともに、「⑤「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が最も多くなっている。その次には「④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める」が続く。

次に本学の春学期終了時に受講者による韓国語学習の到達点の一般目標として筆者（教員側）は、学習能力の達成度を測定する際に、「⑤「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字が読める」を基本的な目安と設定している。その結果、春学期の最終授業の直前（14回目の授業）時に行われるアンケートを勘案すると次のような解釈も可能である。すなわち、学習能力の「④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める」と回答した受講者も、概ね学習目標を達成したとみなすのも可能となると判断される点である。

上記のような設定目標を念頭におき、次には春学期が終わる直前に文学部・心理学科と商学部の受講者を対象とした調査結果を調べてみると、以下のようになる。そこには、後者の受講者よりも前者の受講者のほうが、「⑤「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」と回答した学生が18.2％（10名）多いことが示されている。それは韓国語を受講する際に、受講者らによるその学習目標の実現状況の差から現れるものであると考えられる。その

〈表１〉学習目標の実現状況（２回目）

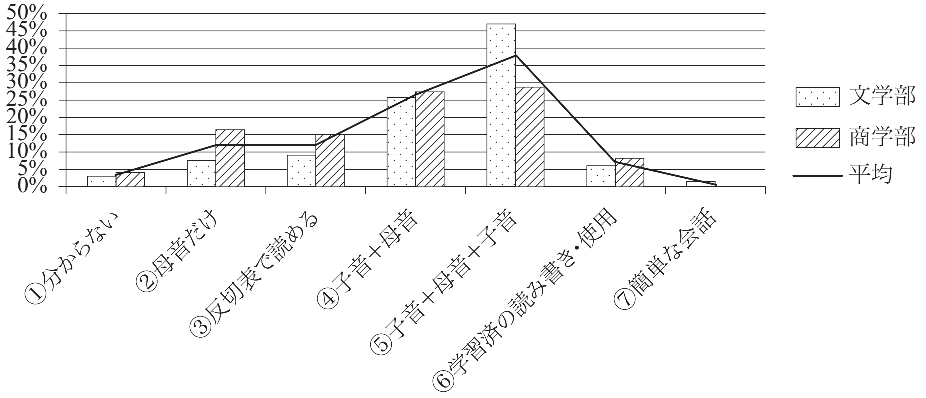
「文学部」　単位：名

学習目標の実現状況	全体	男性	女性
①子音と母音が全く分からない	2（3.0％）	2	0
②母音だけなら読める	5（7.6％）	4	1
③韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	6（9.1％）	5	1
④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める	17（25.8％）	7	10
⑤「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める	31（47.0％）	13	18
⑥学習した単語なら読み書き及び使用することができる	4（6.1％）	0	4
⑦簡単な会話ならできる	1（1.5％）	1	0

「商学部」　単位：名

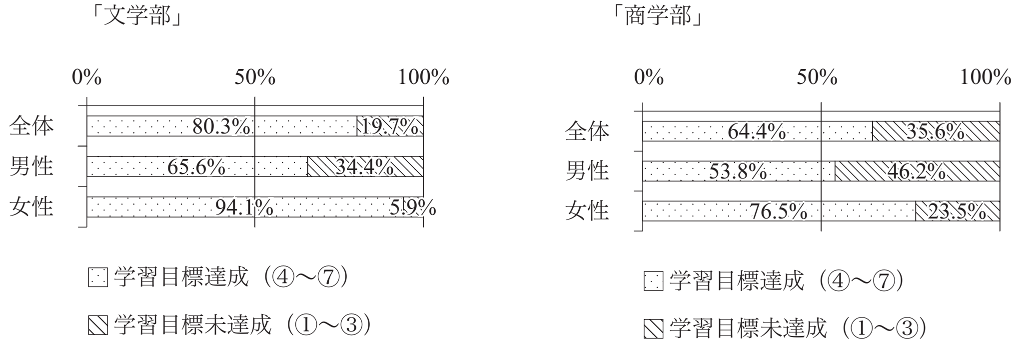
学習目標の実現状況	全体	男性	女性
①子音と母音が全く分からない	3（4.1％）	2	1
②母音だけなら読める	12（16.4％）	8	4
③韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	11（15.1％）	8	3
④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める	20（27.4％）	7	13
⑤「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める	21（28.8％）	11	10
⑥学習した単語なら読み書き及び使用することができる	6（8.2％）	3	3
⑦簡単な会話ならできる	0（0％）	0	0

中で、本学の学習設定の目標より上のレベルで自己評価を下した受講者が15.8％（11名）も存在する点は、注目に値する。



〈図１〉学習目標の実現状況（２回目）

以上の調査結果を踏まえて、次にはまず４か月間にわたっての授業が終了した後に、受講者が最初に設定した学習目標とその達成度との相関関係を調べてみると、後述のような結果が得られる。それを検証するために、第一にその目標に到達していると思われる韓国語能力の④〜⑦までを回答に選んだ受講者の回答内容に対する分析を行なった。第二に、その学習目標のレベルまでには到達していないと思われる①〜③までを回答に選んだ受講者の回答内容に対する分析を行なった。その両者に関する分析結果は概ね以下のとおりである。



〈図２〉学習目標達成度（２回目）

まず文学部の受講者は、４か月間の学習目標の達成値の目安となる「④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める」という回答をもとに分析すると、以下のような達成率を示している。すなわち④を始めとし、それ以上の⑤・⑥・⑦を選んだ受講者は、全体の80.3％に達

した結果となる。さらに男女別に分けてみると、男子学生は男子全体の65.6％が学習目標を達成している。それに比べて、女子学生は女子全体の94.1％である。そこには、男子学生に比べて女子学生が非常に高い割合で学習目標を達成したことが示されている。

次に商学部の受講者は、4か月間の学習目標の目安である「④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める」からそれ以上の⑤・⑥・⑦の中で後者を選んだ受講者は、全体の64.4％に達している。そこから考えれば、残りの35.6％に当たる受講者は学習目標が未達成の状況のままであるという意味となる。さらに男女別に分けてみると、男子学生は男子全体の53.8％が学習目標を達成している。その反面に、ほぼ半分にあたる46.2％の男子学生は、学習目標が達成できないままの状態に留まっている。それに対して女子学生の場合、女子全体の76.5％が学習目標を達成していることを示している。

以上をまとめると、文学部の受講者の場合、学習目標は全体の80.3％の到達率を示している。それを第2外国語の学習開始から4か月間が終了した（2回目の調査）時点で商学部と比較すると、前者の方が高い数値の達成度を示している。言い換えれば、前者の受講者は後者の受講者よりその満足度が高くなっている。さらに両学部を男女別に比較する場合、両学部ともに女子学生の達成度が高くなっている。特に女子学生の場合、その達成度が94.1％にも上るのは、受講者のほとんどが学習目標を達成する数字である点、しかも女子学生の単位未修得者は皆無である点で注目に値する。

2.3.2.　韓国語学習の到達目標

以下は、韓国語の受講者に対する学習意欲とその到達目標を調べる目的で、「大学在学の期間中にどのレベルまで韓国語を学習したいと思いますか」という質問項目を設け、その回答を求めたものである。

すなわち次の〈表2〉は、その調査結果を簡潔に表すために表にまとめたものである。その韓国語学習の到達目標を測る項目に対する回答内容は、以下のとおりである。まず男子学生の場合、「②簡単な会話が成り立つまで」が29名と最も多くなっている。さらに「①簡単なあいさつができるまで」が28名であって、その次に「③一人で韓国での旅行ができるまで」が10名と続く。上述の結果を分析すると、その到達目標の項目が6つもある中で、①～③までの項目を設定する点は、男子学生の場合、その設定目標が低いことを示している。

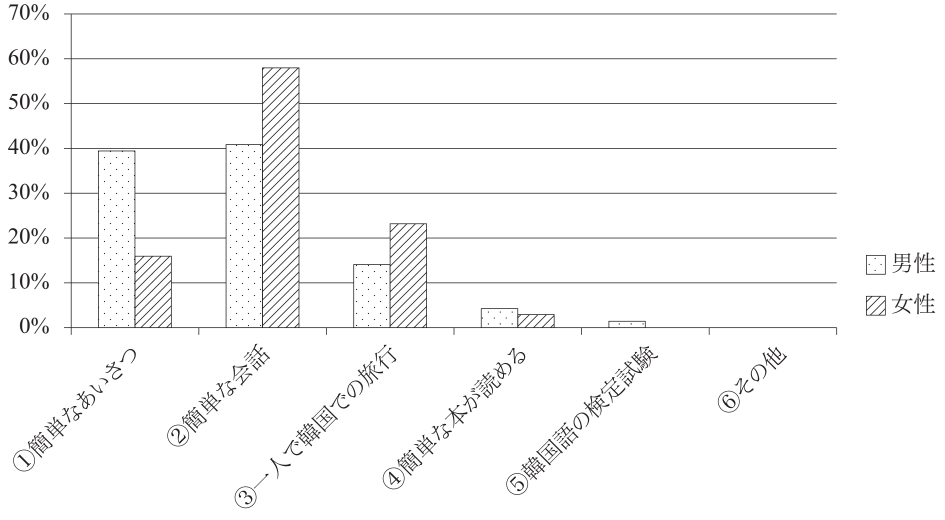
その一方で、女子学生の場合、「②簡単な会話が成り立つまで」が40名と最も多くなっている。それは、男子学生の数値と同様である。その次に「③一人で韓国旅行ができるまで」が16名と続き、その外に「①簡単なあいさつができるまで」が11名と続く。〈図3〉は、その割合を男女別に分けてグラフに表したものである。以上の調査結果から分析すると、性別によっ

て到達度が異なる点を示しているのが特徴的である。そこには、女子学生は男子学生に比べて韓国語学習の到達目標を高く設定していることが示唆されている。

〈表2〉学習到達目標（2回目）

単位：名

到達目標	全体		文学部		商学部	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
①簡単なあいさつができるまで	28	11	17	5	11	6
②簡単な会話が成り立つまで	29	40	10	19	19	21
③一人で韓国での旅行ができるまで	10	16	2	10	8	6
④簡単な本が読めるまで	3	2	2	0	1	2
⑤韓国語の検定試験に受かるまで	1	0	1	0	0	0
⑥その他	0	0	0	0	0	0



〈図3〉学習到達目標（男女別）

2.3.3.　韓国語を選択してよかったのか

次に2回目のアンケート調査では、第2外国語として韓国語選択に対しての満足度を調べる目的で、以下のような設問項目を設定した。その設問項目の内容は、4か月間にわたって韓国語を学習した後に、最初の動機付与の観点がどのように変わったかを調べるためのものである。その具体的な内容は、第2外国語の「選択必修科目として韓国語を選択してよかったと思うか」という設問である。その設問に対して、女子学生の場合、両学部の受講者はともに全員が第2外国語として韓国語を選択してよかったという回答が得られている。

上述のような女子学生の一致した回答内容に対して、男子学生の回答内容が若干異なる結果を見せている。すなわち男子学生の場合、文学部では 8 名、商学部では 5 名が韓国語を選択してよかったとは思わないと回答している。そこには両学部の男子学生の中の若干名は、女子学生に比べて幾分動機付与の観点が下がったことを示している。

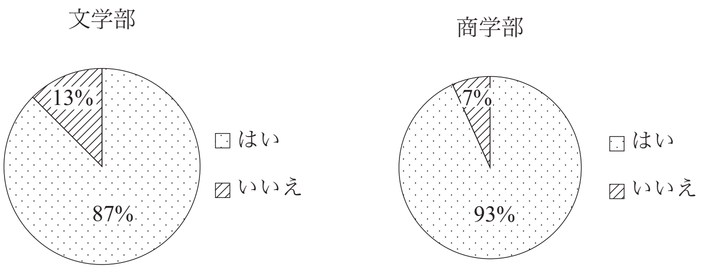
〈表 3〉韓国語選択の満足の可否（ 2 回目）

「文学部」　単位：名

	はい	いいえ
男性	23	8
女性	33	0
全体	56	8

「商学部」　単位：名

	はい	いいえ
男性	34	5
女性	35	0
全体	69	5



〈図 4 〉韓国語選択の満足の可否の比率（ 2 回目）

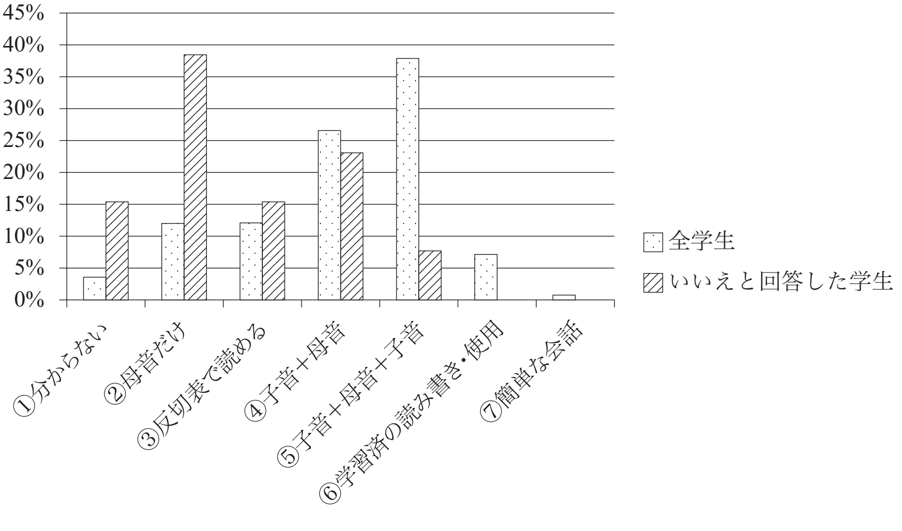
〈表 4 〉韓国語の選択に満足している理由（ 2 回目）

男子学生		女子学生	
(他の) 外国語より簡単	6 名	楽しい	7 名
分かりやすい	4 名	(他の) 外国語より簡単	5 名
日本語と似ていて簡単	3 名	言葉が理解できる	4 名
授業が楽しい	3 名	将来役に立つ	4 名
韓国語への興味	2 名	韓国やアイドルに興味	4 名
		分かりやすい	3 名
		基礎からなので出来そう	3 名
授業が楽しい	10名	楽しい	12名
(他の) 外国語より簡単	9 名	将来役に立つ	5 名
分かりやすい	6 名	韓国や韓国ドラマに興味	4 名
韓国で使用したい	3 名	言葉が理解できる	3 名
街やドラマで理解可	3 名	韓国のドラマの字幕などが分かるようになった	3 名
将来役に立つかも	1 名	分かりやすい	1 名
友達ができた	1 名	友達ができた	1 名

上記のような設問項目と連動する形で「韓国語を選んでよかった」を回答として選んだ学生に対して、その具体的な理由を聞いた結果、〈表4〉のような回答内容が挙げられている。

〈表5〉韓国語の選択に満足していない理由（2回目）

	男子学生		女子学生
文学部	難しい	5名	
	つまらない	2名	
	覚える単語の数が多い	1名	
商学部	（とても）難しい	3名	
	文字が複雑で難しい	1名	
	つまらない	1名	



〈図5〉学習目標の実現度（韓国語選択の満足の可否別）

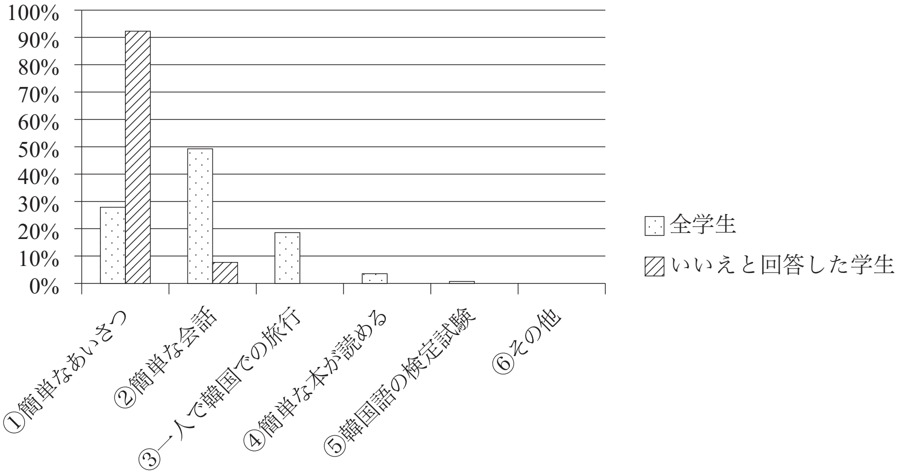
上記のような回答の中で「韓国語を選択してよかったとは思わない」と回答した13名の学習状況の中身を具体的に調べてみると、文学部の中の8名の場合、その分布はまず「①子音と母音が全く分からない」が2名、「②母音だけなら読める」が2名である。そして、「③韓国語の反切表を見ながらなら文字が読める」が1名、「④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める」が2名、「⑤「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が1名となっている。商学部5名の場合、その分布は「②母音だけなら読める」が3名、「③韓国語の反切表を見ながらなら文字が読める」が1名、「④「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める」が1名と分かれている。これを学生平均と比べると、〈図5〉のように学習

目標の実現度が明らかに低いことが示されている。

そこで問題となるのは、受講者の習得度（達成度）が低くなる原因が不明確な点である。その低下の原因が学習意欲から来るものなのか、学習能力の問題なのか、または別の原因があるのか今回の回答内容だけでは非常に曖昧である。その一つの要因は、最初に第 2 外国語を受講する際に、その習得（達成）目標を低く設定する傾向と関連していると考えられる。その傍ら、少なくとも学生が第 2 外国語としての韓国語を選択した場合、その満足度を高めるために学習実現度を精査し、今後何らかの対策を講じるのも必要となると判断される。

その反面、第 2 外国語としての「韓国語を選んでよかったと思わない」という受講者の回答の中で、その具体的な理由として挙げられるのは、〈表 5 〉のような内容が記されている。その回答内容を詳しく調べてみると、まず「難しい」が 8 名、「つまらない」が 3 名、「文字が複雑で難しい」が 1 名、「覚える単語の数が多いと思う」が 1 名となっている。上記の13名の受講者の中で最初の段階における韓国語学習の到達目標は、文学部の 8 名全員が「①簡単なあいさつができるまで」、商学部は 5 名中 4 名が「①簡単なあいさつができるまで」、残りの 1 名が「②簡単な会話が成り立つまで」となっている。

以上を上記の二つの学部における第 2 外国としての韓国語を学習する全受講者の平均値と比較すると、その学習能力を高めるための設定目標が相当低く設定されている状況が〈図 6 〉で示されている。そこには「韓国語を選んでよかったと思わない」と回答した学生の場合、最初の段階から第 2 外国語の学習到達の目標設定が低く、その設定意識が学期終了時まで続いている点が示されている。



〈図 6 〉学習到達目標（韓国語選択の満足の可否別）（ 2 回目）

2.4.　第3回目アンケートの調査内容と回答結果

2.4.1.　韓国語の学習目標と実現状況

秋学期が終わる直前に、約8か月間にわたって韓国語を学習した受講者を対象として、現時点での韓国語能力に対する学生自身による自己評価を問うてみた。その結果、文学部と商学部との両学部の受講者の間では、以下のような学習実現の状況上の差が現れている。それを表で現したのが、以下の〈表6〉と〈図7〉である。

まず文学部の受講者の場合、その現況を調べてみれば、「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」という回答が最も多く見られる。その次には「④「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が続く。

その一方で、商学部における韓国語の受講者の場合、「④「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が最も多い回答として挙げられる。その次には「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」が続く。上記のような調査の結果は、韓国語を選択する際に、受講者が学習目標を低く設定する場合、その学習実現度もそれに連動する形で低

〈表6〉学習目標の実現状況（3回目）

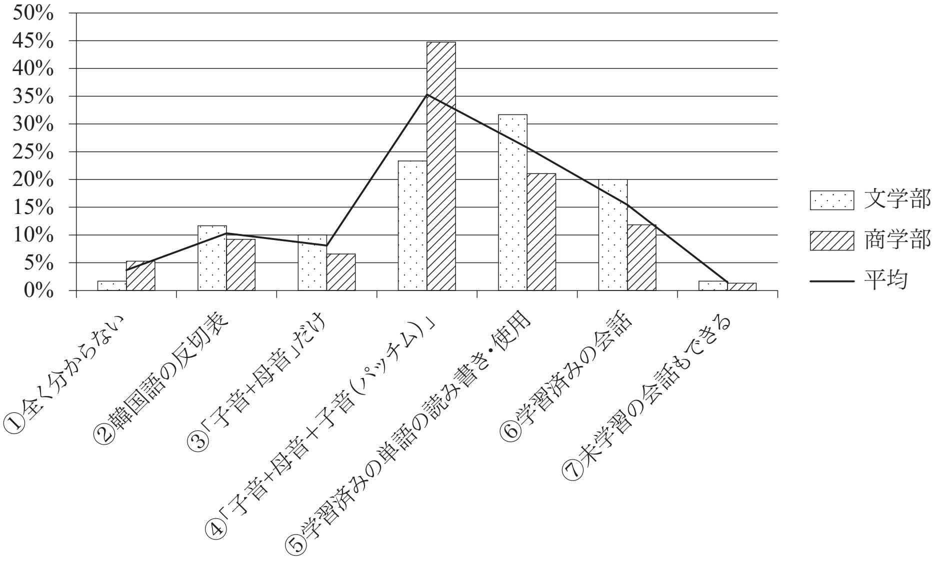
「文学部」　　単位：名

学習目標の実現状況	全体	男性	女性
①子音と母音が全く分からない	1（1.7%）	0	1
②韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	7（11.7%）	6	1
③「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める	6（10%）	3	3
④「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める	14（23.3%）	7	7
⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる	19（31.7%）	9	10
⑥学習済みの会話ならできる	12（20%）	2	10
⑦まだ学習していない会話もできる	1（1.7%）	0	1
⑧手紙が書ける	0（0%）	0	0

「商学部」　　単位：名

学習目標の実現状況	全体	男性	女性
①子音と母音が全く分からない	4（5.3%）	3	1
②韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	7（9.2%）	6	1
③「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める	5（6.6%）	4	1
④「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める	34（44.7%）	16	18
⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる	16（21.1%）	9	7
⑥学習済みの会話ならできる	9（11.8%）	3	6
⑦まだ学習していない会話もできる	1（1.3%）	0	1
⑧手紙が書ける	0（0%）	0	0

くなる傾向を示唆している。



〈図７〉学習目標の実現状況（３回目）

次に上記の設定項目に関わって、受講者による自己評価に対して性別に分けて調べてみると、以下のような評価内容となる。まず商学部の受講者の場合、男女による自己評価の差はほとんど見られず、性差にあまり関係なく、ほぼ同等の結果が得られている。その一方で、文学部の受講者の場合、商学部の受講者による自己評価と違ってくる。すなわち文学部の学生は、次のように男女別の差によってその回答上にある程度の変化が見られる点で特徴的である。

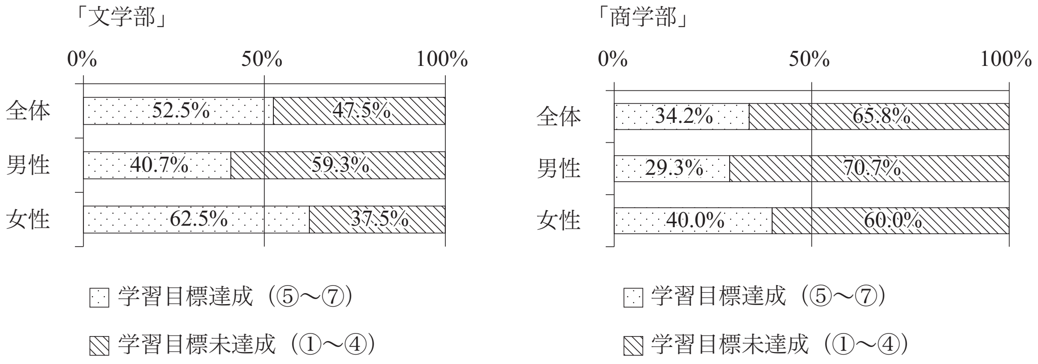
特に文学部の女子学生の場合、現時点における学生自身による韓国語能力に対する自己評価は、「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」と、「⑥学習済みの会話ならできる」とが全く同人数で最も多くを占めている。それに対して、文学部の男子学生の場合、「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」が最も数多く見られる。その次の自己評価には、「④「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が続く。

以上のように、文学部の受講者の場合、男子学生に比べて女子学生の方が高い学習目標に達したことを示している。その理由は、最初の学習目標を設定する段階から、男子学生と比較して高い目標を目指しているためであると考えられる。その目標の設定は、学期終了時までに揺るがずに続けられ、一定の成果を納める結果につながると考えられる。

本学の韓国語選択必修の授業では、秋学期までの学習目標を、その学習能力の到達値の目安と絡めて「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」と設定している。した

がって、３回目のアンケート調査の実施時においては、回答内容が「⑤」以上であれば、概ね学習目標の実現済みと認められる。その点を評価基準に据えて、〈図８〉を分析して見ると、以下のような結果が得られている。すなわち文学部の女子学生は、同学部の男子学生や商学部の男女学生に比べても韓国語の学習目標の実現度が多少高いことを示している。

以下では、８か月間にわたる韓国語の学習を行った後に、まずその学習目標まで到達済みと認められる上記の評価基準に沿って検討した。その際に、韓国語能力の⑤〜⑦までを回答した学生の回答内容を計量的に分析した。それを基準に、その学習目標には到達していない回答に対する分析も行った。すなわち、①〜④までを回答した学生の回答内容も計量的に分析し、その両者を比較する作業を行った。その結果は、以下のとおりとなっている。



〈図８〉学習目標達成度（３回目）

文学部の受講者は、約８か月間にわたる韓国語の学習後の到達目標の目安となる「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」を一つの標準的な到達目標としての設定から韓国語の学習を始めている。その結果⑤を始めとし、それ以上の⑥・⑦を選んだ学生は男女受講者全体の52.5％にも上っている。さらに男女別の差でみると、男子学生は男子全体の40.7％が学習目標を達成している。その一方で、女子学生は女子全体の62.5％が学習目標に到達した結果となる。その事実から、文学部では男子受講者に比べ女子受講者のほうが学習目標を達成する割合が高いことを示している。

商学部の受講者は、８か月間の学習目標の目安となる「⑤学習した単語なら読み書き及び使用することができる」から韓国語の学習を開始している。その時に⑤を含むとともに、それ以上の⑥・⑦を選んだ学生は全体の34.2％となっている。さらに男女別の差でみると、男子学生は男子全体の29.3％が学習目標に到達している。その反面に、女子学生は女子全体の40.0％が学習目標を達成した結果となる。その事実から、商学部でも文学部の受講者と同様に、男子受講者に比べ女子受講者は学習目標の達成率が高い割合を示している。

そこには、文学部と商学部の学生を比較すると、文学部の受講者の場合、その学習目標の達成率が高くなっている。その反面、商学部の受講者の場合、学習目標の到達済みと認められる学生の割合は、18.3%低くなっている。文学部の受講者の場合、男子学生に比べて女子学生は学習目標より21.8%高い達成率を示している。上述の両学部の差と男女学生の差は、最初の段階で学習目標を低く設定する点から生じるものと推察される。後述のように、その結果は最初の学習目標の設定レベルがそのまま到達目標に反映される形で現れている。

2.4.2. 韓国語学習の到達目標

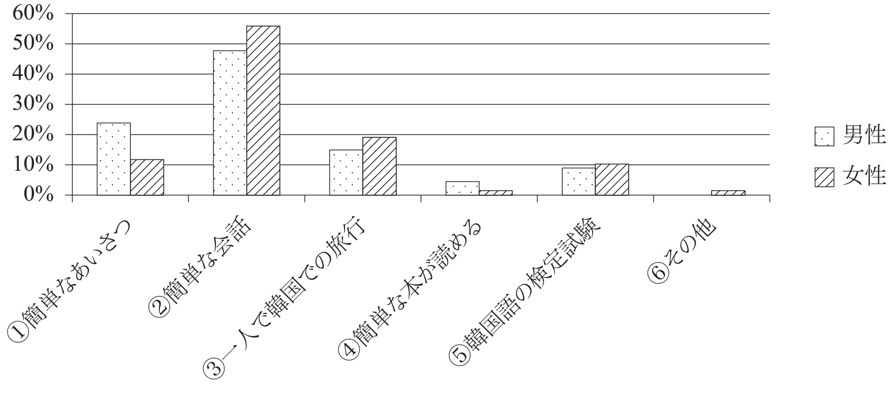
上述のような設問内容と関わって、韓国語の受講者に対する初期段階から成る学習意欲とその到達目標との因果関係を調べるために、以下のような設問項目を設けた。すなわち、「大学在学の期間中にどのレベルまで韓国語を学習したいと思いますか」という項目である。

次の〈表 7〉と〈図 9〉は、上述のような質問項目に対する調査結果をまとめたものであ

〈表 7〉学習到達目標（3 回目）

単位：名

	全体		文学部		商学部	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
①簡単なあいさつができるまで	16	8	7	4	9	4
②簡単な会話が成り立つまで	32	38	13	16	19	22
③一人で韓国での旅行ができるまで	10	13	4	8	6	5
④簡単な本が読めるまで	3	1	2	0	1	1
⑤韓国語の検定試験に受かるまで	6	7	1	4	5	3
⑥その他	0	1	0	1	0	0



〈図 9〉学習到達目標（男女別）（3 回目）

る。韓国語を学習する際の到達目標を測る項目に対する回答には、男子学生は「②簡単な会話が成り立つまで」が最も多く、次に「①簡単なあいさつができるまで」と続く。そして「③一人で韓国での旅行ができるまで」である。その一方、女子学生は「②簡単な会話が成り立つまで」が男子学生と同様に最も多くなっている。その次に「③一人で韓国旅行ができるまで」の回答が続く。そして「①簡単なあいさつができるまで」の回答となっている。

既述のように上記のような調査結果は、女子学生の場合、韓国語を学習する最初の段階からすでに男子学生に比べて韓国語学習の到達目標を高く設定する傾向を示している。その点は、男子学生と比べて女子学生の方が学習意欲の面でも若干高いことを示唆している。

2.4.3.　韓国語選択に対する満足度

次には、第2外国語としての韓国語を選択した際に、その学習目標と絡めた形で、韓国語選択に対する満足度の問題に関する受講者自身の自己評価を問うてみた。そのために、約8ヵ月間にわたる韓国語の学習を行った後、選択必修科目として韓国語を選択してよかったと思うのかどうかの設問項目を設けた。その結果、文学部では4名（男子3名／女子1名)、商学部では7名（全員男子）の受講者から「韓国語を選択してよかったとは思わない」という回答が得られている。それに対する分析は、さらに後述する。

その反面に、「韓国語を選んでよかった」を回答として選んだ学生に対してその具体的な理由を聞いた結果、以下の〈表9〉のような内容が挙げられている。

〈表8〉韓国語選択の満足の可否（3回目）

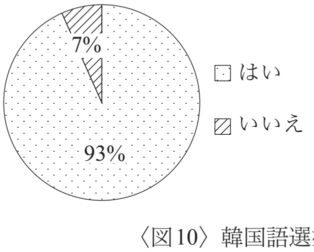
「文学部」　単位：名

	はい	いいえ
男性	24	3
女性	32	1
全体	56	4

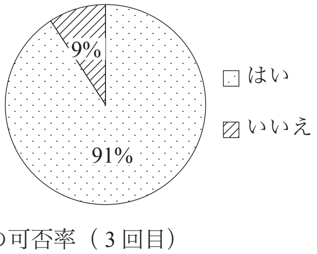
「商学部」　単位：名

	はい	いいえ
男性	34	7
女性	35	0
全体	69	7

文学部



商学部



〈図10〉韓国語選択の満足の可否率（3回目）

〈表９〉韓国語の選択に満足している理由（３回目）

単位：名

	男子学生		女子学生	
文学部	分かりやすい	5名	楽しい	6名
	授業が楽しい	4名	言葉が理解できるようになった	5名
	韓国語への興味	3名	(他の）外国語より簡単	1名
	日本語と似ていて簡単	3名	分かりやすい	1名
	(他の）外国語より簡単	1名	基礎からなので出来そう	1名
	言語の知識が広くなった	1名	将来役に立つ	1名
			韓国や韓国のアイドルに興味がある	1名
商学部	街やドラマで理解可	5名	言葉が理解できるようになった	11名
	(他の）外国語より簡単	4名	楽しい	6名
	分かりやすい	3名	韓国のドラマの字幕などが分かるようになった	3名
	授業が楽しい	3名	分かりやすい	2名
	韓国で使用したい	2名	英語より分かりやすい	2名
	英語以外の話せる言語	2名	韓国で使用したい	2名
	将来役に立つかも	1名	友達ができた	1名
			他の外国語より楽	1名
			日本語と似ている	1名
			母親も好き	1名

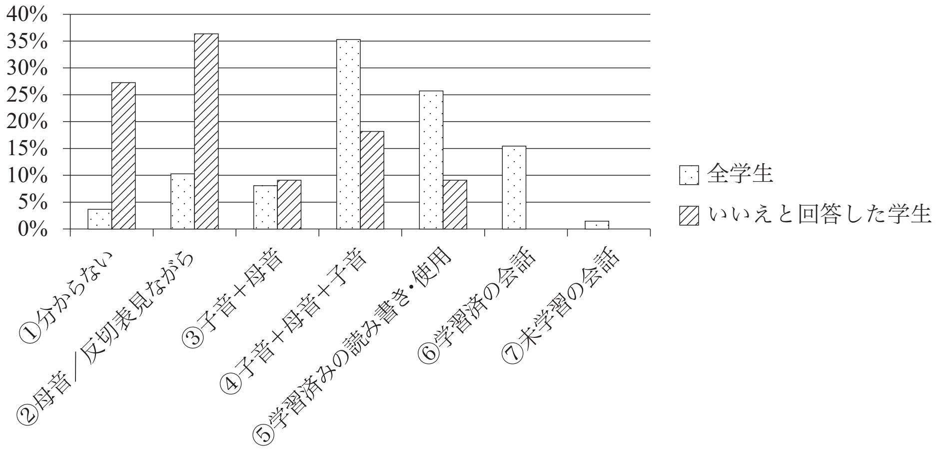
〈表10〉韓国語の選択に満足していない理由（３回目）

単位：名

	男子学生		女子学生	
文学部	英語がちっとも分からないので他のことなんて分からない	1名	難しい	1名
商学部	難しい	2名		
	思っていたよりかなり難しかった	1名		
	文字を書くのが難しい	1名		
	よく分からない	1名		

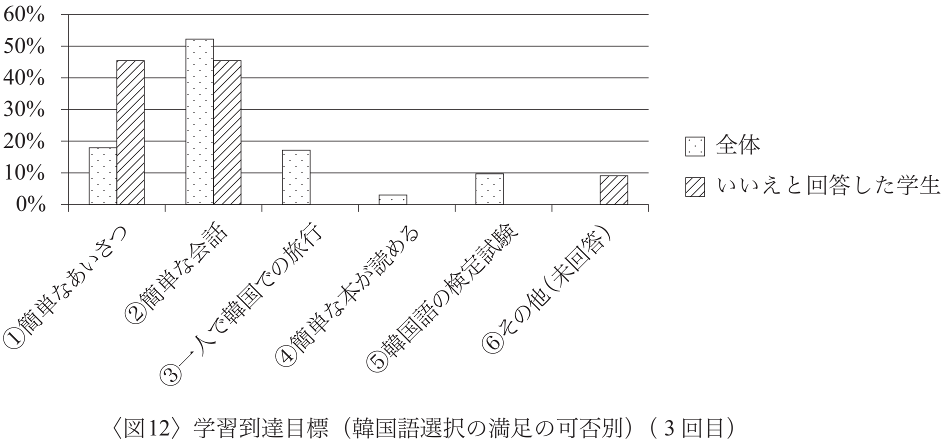
※文学部の男子学生２名無記入、商学部の男子学生２名無記入

上記のような設問項目に対して、「韓国語を選択してよかったとは思わない」と回答した11名の学習内容の最終的な実現状況を調べてみると、概ね〈表10〉のようになっている。まず文学部の受講者の場合、その受講者の内４名は、第２外国語としての韓国語の選択に対して積極性を欠く、非常に消極的な回答内容となっている。その詳細な内訳は、「①」が１名、「②」が２名、「③」が１名である。また彼らの学習目標は、「①」が３名、「②」が１名となっている。



〈図11〉学習目標の実現度（韓国語選択の満足の可否別）

次に商学部の受講者の場合、文学部と同様の回答内容が7名となっている。その学習の実現状況を調べてみると、「①」が2名、「②」が2名、「④」が2名、「⑤」が1名である。その学生らの学習目標は「①」が2名、「②」が4名、無記入が1名である。以上をまとめると、概ね次のような分析結果が得られる。すなわち、韓国語受講の開始段階でその学習目標を低く設定する学生の場合、その学習実現度もその学習目標に連動する形で低くなる傾向を示している。



〈図12〉学習到達目標（韓国語選択の満足の可否別）（3回目）

加えて言えば、「韓国語を選んでよかった」と思わないと回答した学生によって学習開始時に設定されている習得目標と、その実現状況は、韓国語を選んでよかったと思うと回答した学生よりも韓国語の習得とその使用可能な韓国語の範囲も狭く、習得済みの韓国語を使っての会

話が可能なレベルも低いことが示唆されている。

上記のような設問に関する回答内容を綿密に調べてみると、「韓国語を選んでよかったと思わない」理由は、以下の内容となる。すなわち、「難しい」が5名、「分からない」が1名、「英語すらまともに分からないので他のことなんてわからない」が1名である。上記のような回答は、その内容が「具体性」を欠く。例えば「英語すら」云々の行は実証性を欠く曖昧な内容である。すなわち、英語が上手くできれば、韓国語も自然に習得できる意味なのか、英語が上手くなければ、韓国語も下手になる意味なのかが不鮮明なのである。

3．文・心理・商学部の「韓国語Ⅰ・Ⅱ」学習者に対するアンケート調査（1回目・2回目・3回目）の結果分析

3.1.　韓国語学習目標の実現状況

本節は、約4か月間の学習期間終了後に行った2回目のアンケートと約10か月間の学習期間終了後の3回目のアンケートで行った結果を分析している。〈表11〉は、上記の2回にわたる調査をもとに学習目標に対する受講者自身による学習目標の実現状況に関する調査結果を比較分析したものである。

〈表11〉学習目標の実現状況（2回目・3回目）

単位：名

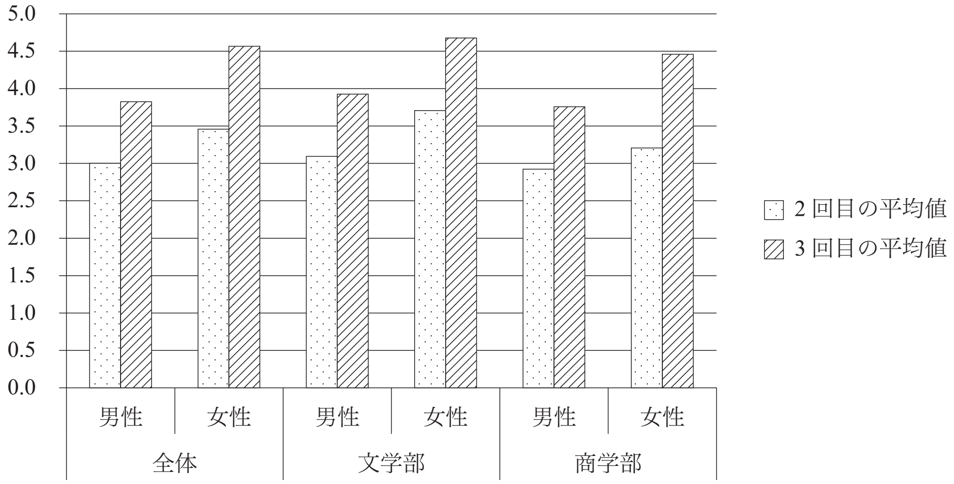
学習能力	全体				文学部				商学部			
	男子		女子		男子		女子		男子		女子	
	2回	3回	2回	3回	2回	3回	2回	3回	2回	3回	2回	3回
①	4	3	1	2	2	0	0	1	2	3	1	1
②	25	12	9	3	9	6	2	2	16	6	7	1
③	14	7	23	4	7	3	10	3	7	4	13	1
④	24	23	28	25	13	7	18	7	11	16	10	18
⑤	3	18	7	17	0	9	4	10	3	9	3	7
⑥	1	5	0	16	1	2	0	10	0	3	0	6
⑦	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	1
平均値	3	3.8	3.5	4.6	3.1	3.9	3.7	4.7	2.9	3.8	3.2	4.5
伸び率		0.8		1.1		0.8		1		0.8		1.3

※平均値とは、①〜⑦の項目をそれぞれ1〜7に数値化したときの平均値。
※増減差とは、2回目のアンケート結果の平均値に対する増減差。

上の〈表11〉は、2回目のアンケートでの選択項目として「②母音だけなら読める」と「③

韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める」と区別したものである。だが、 3 回目のアンケートでは「②韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める」に一本化したため、上記の集計表では 2 回目の②と③の回答合計を②として集計したことを予め断わっておく。その理由として 2 回目の②の選択項目は、約10か月間の学習期間の経過を前提にしたときの 3 回目のアンケートの③の選択項目にその内容が十分含まれていると判断したためである。

さて、学習目標の実現度の回答番号①～⑦を各々 1 ～ 7 の数値として平均値を算出した結果、学部別や男女別を問わず、 2 回目のアンケートではおおよそ③のレベルが平均値の回答となっている。それが 3 回目のアンケートでは④に近くなり、平均的には 1 段階上にレベル・アップされたと認定できる傾向が読み取れる。その伸び率は、両学部ともに男性に比べて女性のほうが若干高い傾向を示している。



〈図13〉学習目標の実現状況（伸び率）

3.2.　韓国語学習の到達目標

本節は、韓国語の受講者自身の学習意欲とその時間的な経過に伴って、以前の到達目標を設定し直したのかを調べた結果である。 1 回目から 3 回目までの調査結果を比較してみると、以下の〈表12〉のようになる。

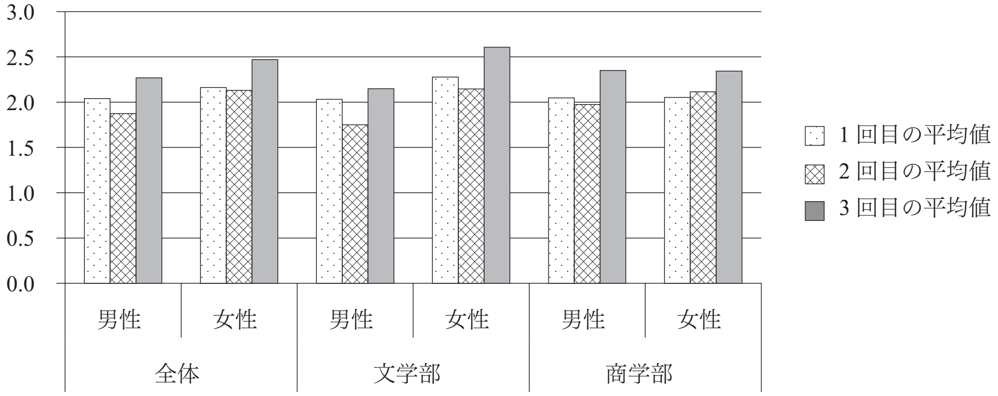
韓国語学習の到達目標を検討した結果、 1 回目のアンケートと 2 回目のアンケートでは変化が見られる。その到達目標の平均値は男女ともに若干下がる傾向が見られる。それが 3 回目のアンケートになると、平均値は男女ともに上がっている。その原因は、到達目標として最も低い設定である「①簡単なあいさつができるまで」を選んだ学生の回答の変化である、と推察される。すなわち、その受講者らの場合、学習の進展や語学力の上達に伴う 3 回目のアンケート

〈表12〉学習到達目標（1回目・2回目・3回目）

単位：名

学習能力	全体						文学部						商学部					
	男子			女子			男子			女子			男子			女子		
	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回
①	19	28	16	17	11	8	11	17	7	7	5	4	8	11	9	10	6	4
②	39	29	32	36	40	38	12	10	13	17	19	16	27	19	19	19	21	22
③	11	10	10	16	16	13	5	2	4	9	10	8	6	8	6	7	6	5
④	4	3	3	2	2	1	2	2	2	1	0	0	2	1	1	1	2	1
⑤	1	1	6	3	0	7	1	1	1	2	0	4	0	0	5	1	0	3
⑥	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
平均値	2	1.9	2.3	2.2	2.1	2.5	2	1.8	2.1	2.3	2.1	2.6	2	2	2.4	2.1	2.1	2.3
増減差		−0.2	0.2		0	0.3		−0.3	0.1		−0.1	0.3		−0.1	0.3		0.1	0.3

※平均値とは、①～⑥の項目をそれぞれ1～6に数値化したときの平均値。
※増減差とは、1回目のアンケート結果の平均値に対する増減差。



〈図14〉学習到達目標（増減差）

では①の回答数が減っている。その一方で、一部の受講者は到達目標として高い設定となる「⑤韓国語検定試験に受かるまで」に変えていることが示されている。

上述の傾向と関わって、韓国語履修申請の段階で、到達目標として一番低いレベル①「簡単なあいさつができるまで」の項目に注目すると、韓国語の学習開始前では36名となっている。それが学習開始から約4か月後には39名となって以前に比べて3名増えたものの、学習開始から約8か月後には①が24名となっている。そこには、学習進行と語学力の習得に伴って学習開始時の低い目標設定が顕著に減っている傾向が示されている。すなわち、約8か月間の韓国語の学習を通じて次第に韓国語を習得するにつれ、大学での学習目標とその到達目標を以前

よりも高く設定し直した点を示している。

その到達目標について言えば、②、③、④までの回答に関してはその受講者の数の変動やその目標も無変化である。一方、高い到達目標となる「⑤韓国語の検定試験に受かる」は、韓国語の学習を開始する前は４名となっている。それが学習開始の４か月後には１名に減ったものの、学習開始の８か月後には13名へと増加する。これは、８か月間の韓国語の学習を通じて、高い水準となる韓国語の検定試験の合格を、その到達目標に置く学生の増加傾向を意味する。その数字は韓国語学習に対する満足度を示す回答であると同時に、韓国語の学習目標を高水準に設定し直す受講者の目標修正の現況を示唆している。

3.3.　韓国語の選択に対する満足度の変化

〈表13〉韓国語選択の満足に対する可否

「文学部」　単位：名

	はい		いいえ	
	２回	３回	２回	３回
男性	23	24	8	3
女性	33	32	0	1
全体	56	56	8	4

「商学部」　単位：名

	はい		いいえ	
	２回	３回	２回	３回
男性	34	34	5	7
女性	35	35	0	0
全体	69	69	5	7

上記の〈表13〉で見られるように、韓国語を選択してよかったかの設問に対して、２回目（学習４か月目）のアンケートの時と３回目（学習８か月目）のアンケート時とで比較してみると、以下のような分析が可能となる。

文学部の受講者の場合、韓国語を選択してよかったと回答した学生は男子学生が23名から24名に、女子学生は33名から32名へと、各々１名の増減が見られる。その数字は、学習４か月目と学習８か月目とでは韓国語の選択に対する心理的な変化はほとんどなかったことを表している。その反面に、「韓国語を選択してよくなかった」と回答した学生は８名から４名に減っている。これは、２回目のアンケートで「韓国語を選択してよくなかった」と答えた一部の学生が、「韓国語Ⅰ」の単位を落とし、３回目のアンケート調査の実施時での「韓国語Ⅱ」を履修していない学生による減少であると推測される。

商学部の受講者の場合、韓国語を選択してよかったと回答した学生の数に変化は無く、２回目、３回目も１回目と同様に、男子学生は34名、女子学生は35名となっている。韓国語を選択してよくなかったと回答した学生は５名から７名へと、２名増えている。これは、韓国語を選んでよかったと回答した学生の数に変化が無かった事実を考慮すると、２回目のアンケート実施時の欠席者が３回目アンケート実施時には調査に加わった結果であると推測される。

以上をまとめると両学部ともに、学習４か月目と学習８か月目でのアンケート調査を比較すると、第２外国語としての韓国語の選択に対する満足度にはほとんど変化がなかったことが示されている。

3.4.　韓国語に対するイメージの変化

〈表14〉韓国語に対するイメージ（１回目・２回目・３回目）

	１回目（学習開始前）	２回目（学習４か月後）	３回目（学習８か月後）
1.	全体的に難しい（40名）	思っていたより難しい（47名）	思っていたより簡単（18名）
2.	日本語と似ている（22名）	思っていたより簡単（15名）	思っていたより難しい（16名）
3.	記号みたい（16名）	読み書きや聞き取りができるようになった（10名）	分かるようになってきた（15名）
4.	他の外国語より易しそう（17名）	韓国に行ってみたい（１名）	日本語に似ている（６名）
5.	分からない（８名）	日本語に近い（１名）	楽しい（６名）
6.	ハングル（５名）		
7.	格好良い（３名）		
8.	K-POP（２名）		
9.	韓国ドラマ（２名）		
10.	不思議（２名）		
11.	面白そう（２名）		

次には韓国語の学習実現度による学習前と学習後の韓国語に対するイメージの変化に関する調査を行なった。その結果、韓国語のイメージとしては、まず韓国語の学習開始の前は、韓国語に対して「全体的に難しい（40名）」「日本語と似ている（22名）」「記号みたい（16名）」「他の外国語より易しそう（17名）」となっている。

そこには、学習前には韓国語に対する抽象的なイメージを持っている学生が多い状況を示している。それが学習の４か月後になると「思っていたより難しい（47名）」「思っていたより簡単（15名）」「読み書きや聞き取りができるようになった（10名）」など、韓国語を学習した結果、そのイメージが少し具体的な内容に変わってきている。

さらに、学習の８か月後のイメージでは「思っていたより簡単（18名）」「思っていたより難しい（16名）」「分かるようになってきた（15名）」「日本語に似ている（６名）」「楽しい（６名）」と言った回答内容へと変化している。そこには、最初の学習開始の段階における「思っていたより難しい」から「思っていたより簡単」への受講者の数が増えていくイメージの変化

の様子がうかがわれる。それは、韓国語の学習進展に伴って、韓国語の文法と語順および発音などで日本語との類似点を発見し、韓国語の学習のコツを掴んだことを示唆している。

4．おわりに

本稿では、第2外国語として韓国語に関するアンケート調査を分析対象とし、それを計量的な接近方法を用いて分析した。その際に、本稿ではまず調査対象となる受講者を絞ってアンケート調査を実施し、それをもとに分析作業を行った結果、概ね以下のような知見が得られている。それは第2外国語（韓国語）の場合、まず学習開始の段階における受講者による学習目標の設定が学習終了時までに連動する点である。すなわち、目標設定の段階でその目標を高く設定する学生の場合、その学習終了時の満足度が高いという知見が得られている。

次に本稿では第2外国語の場合、男子学生と比較して女子学生のほうが学習目標の達成度が高いという知見が得られている。その事実も、上述の学習目標の設定問題とも直接的に関係するものである。すなわち女子学生の場合、男子学生に比べて学習開始の段階での学習目標の設定が高く、それが学習終了期までに連動し、究極的には高い達成度につながっている。

その上本稿では、語学教育の場合、その学習目標を達成させるためには短期的な語学学習と比較して、長期の計画に基づく体系的な教育が最も有効的である点を改めて確認することが可能となっている。すなわち、多くのアンケート調査の結果は、授業の方法や改善を求める回答よりも、受講者自身による学習目標の設定に連動され、設定目標と学習効果が相互に影響し合う傾向を示唆している。

最後に前号と本号に引き続き、韓国語の達成度や学習期間と関わる韓国や韓国語のイメージの変化、学習目標とその満足度との相関関係に関して、韓国語の受講者を対象とする、更なる追跡調査を行うのが、今後の課題である。

参考資料　実施アンケート

「韓国語初級必修クラス」に関するアンケートⅡ

問１）性別を教えてください。
①　男性　　　　　　　　　②　女性

問２）韓国語の学習期間はどれくらいですか？
①　４か月
②　４か月～１年未満
③　１年以上～２年未満
④　２年以上～３年未満

問３）韓国語の能力はどれくらいですか。（自己判断でよい）
①　子音と母音が全く分からない。
②　母音だけなら読める
③　韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める。
④　「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める。
⑤　「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める。
⑥　学習した単語なら読み書き及び使用することができる。
⑦　簡単な会話ならできる。

問４）第２外国語として韓国語を選んでよかったと思いますか。その理由を書いてください。
①　はい　　　　　　　　　②　いいえ

問５）４か月間韓国語を学習しました。「韓国語」についてのイメージに変化はありますか。（自由記述）

問６）大学の在学期間中韓国語をどのレベルまで学習したいと思いますか。
①　簡単なあいさつができるまで
②　簡単な会話が成り立つまで
③　一人で韓国での旅行ができるまで
④　簡単な本が読めるまで
⑤　韓国語の検定試験に受かるまで
⑥　その他
（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問７）現在第２外国語授業は週１回ペースで行われています。この回数は適切だと思いますか。
①　ちょうど良い
②　頻度が少ない
③　頻度が多い

「韓国語初級必修クラス」に関するアンケートⅢ

問1）性別を教えてください。
①　男性　　　　　　　　　②　女性

問2）韓国語の学習期間はどれくらいですか？
①　10か月
②　10か月～1年半未満
③　1年半以上～2年未満
④　2年以上～3年未満

問3）韓国語の能力はどれくらいですか。（自己判断でよい）
①　子音と母音が全く分からない。
②　韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める。
③　「子音＋母音」だけの組み合わせの文字なら読める。
④　「子音＋母音＋子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める。
⑤　学習した単語なら読み書き及び使用することができる。
⑥　学習済みの会話ならできる。
⑦　まだ学習していない会話もできる。
⑧　手紙が書ける。

問4）第2外国語として韓国語を選んでよかったと思いますか。
その理由を書いてください。
①　はい　　　　　　　　　②　いいえ

問5）8か月間韓国語を学習しました。「韓国語」についてのイメージに変化はありますか。（自由記述）

問6）大学の在学期間中韓国語をどのレベルまで学習したいと思いますか。
①　簡単なあいさつができるまで
②　簡単な会話が成り立つまで
③　一人で韓国での旅行ができるまで
④　簡単な本が読めるまで
⑤　韓国語の検定試験に受かるまで
⑥　その他
（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問7）韓国語の学習においてより分かりやすい学習をするために、取り入れてほしい点はありますか。今後の参考にするので教えてください。

問8）来年度の韓国語の選択科目を受講したいと思いますか。
①はい　　　　　　　　　②いいえ

注

1）文嬉眞・金美淑、「日本の大学における「韓国語学習」――愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析(1)――」、『愛知学院大学教養部紀要』第61巻第４号、pp. 69–84. 愛知学院大学（2014）

夏目漱石のラファエロ前派と村上春樹訳 R. チャンドラー作『ロング・グッドバイ』の迷路

清　水　義　和

01.　はじめに

夏目漱石の小説『行人』、『心』、『道草』、『明暗』に見られる特徴は、結末で結論を出さず曖昧にしたまま終わるところにある。このスタイルは、スコット・フィッツジェラルドの小説『偉大なギャツビィ』やレイモンド・チャンドラーのスリラー『ロング・グッドバイ』にある一種の謎解きと関連がある。江藤淳は『夏目漱石』論の中で、漱石が心の病の問題に対してその謎に解答を出さなかったが、むしろそのことが漱石の苦悩が浮き彫りにされているから肝要であると述べている。[1]漱石は初めゴールド・スミスやジェーン・オースティーンの英国小説に影響を受けた。殊にオースティーンが描く固有の女性心理に影響を受け、肌理細やかな性格描写に分け入り、その表現技法を自分の小説に反映させて日本の明治の婦人を生き生きと活写した。続いて、漱石は森田草平の勧めで、ドストエフスキーの小説を読み、その影響を、遺作『明暗』の中で表象した。

村上春樹氏はスコット・フィッツジェラルドやレイモンド・チャンドラーばかりでなく、ドストエフスキーの『カラマゾフ兄弟』から影響を受け自らの小説を執筆したと述べている。ドストエフスキーは『カラマゾフ兄弟』執筆途中に作者自らの急逝によって中断した。漱石も胃潰瘍に悩まされ、遂に大内出血を起こし『明暗』の執筆途中で死去し中断してしまった。

村上氏の場合はどうか。亀山郁夫氏によれば、村上氏の『1Q84』の結末は曖昧で、続編が書かれるべきだという。その例として、亀山氏はドストエフスキーの『カラマゾフ兄弟』を挙げている。結局、ドストエフスキーや漱石は病で急逝し作品の執筆を中絶した。だが、村上氏は旺盛な作家活動を継続している。だから、亀山氏は村上氏が『1Q84』の続編を書くべきだ

と主張し、更に、亀山氏自ら『カラマゾフ兄弟』の続編を推測し詳細に論じるだけでなく、村上氏の『1Q84』の続編の構想も浮き彫りにしている。2)

村上春樹氏がスコット・フィッツジェラルドの小説『グレート・ギャツビィ』やレイモンド・チャンドラーのスリラー『ロング・グッドバイ』を自ら日本語に翻訳したばかりでなく、次いでフィッツジェラルドとチャンドラーの文体を換骨奪胎して、自作の小説『ダンス・ダンス・ダンス』を創作する過程で結果的に独特なサブカルの新機軸を生み出した。

村上氏によると、チャンドラーが『ロング・グッドバイ』を著した動機のひとつに、フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビィ』をスリラー化した結果生まれたと指摘している。3) ということは、実は、村上氏自身の場合も、純文学のスタイルをスリラーのような大衆小説風に変える試みによって自らの小説に独特のスタイルを産み出し、遂にサブカルの作風を獲得するに至った。いうまでもなく、スリラー小説は、ストーリー展開の妙に技法を駆使する事が肝要であり、まさに、スリラー小説の醍醐味は筋展開の妙につきる。もしも、村上氏が自らのエッセイで、フィッツジェラルドとチャンドラーの技法を指摘しなかったならば、チャンドラーが、『グレート・ギャツビィ』をスリラー化して『ロング・グッドバイ』を生み出した可能性に気がつかなかったかもしれない。

サルバトール・ダリは、古典画家の技法を打ち破ってサブカルの金字塔を打ち立て、1928年にルイス・ブニュエルと一緒に実験映画『アンダルシアの犬』を合作した。次いで、ダリは1945年にはアルフレッド・ヒッチコックが監督したスリラー映画『白い恐怖』の背景画作成に協力している。仮に、ダリが難解な前衛画家のアートを実験映画や大衆娯楽映画の背景を画く機会がなかったら、ダリのアートはアヴァンギャルド芸術のごく一部に限られたアートに留まったかもしれない。

20世紀のモダンアートにビッグバンを引き起こしたマルセル・デュシャンは、モナリザに髭を描き入れ、更にタブローの概念を打ち破った『大ガラス』や『遺作』を制作して、古典の常識を覆した。或いは、マンレイはキキの裸体をヴァイオリンに見立て撮った写真やアイロンに釘を取り付けたオブジェを芸術作品にしてしまった。マンレイは一流絵画のように写真を商品にしたフォトアーテイストであった。実は、ダリやデュシャンやマンレイの現代アートは、村上春樹氏がサブカルな小説を産み出す芸術の磁場となっている。

また、村上氏が描く小説は、難解さと明解さの間を振り子のように往復している。とはいえ、村上氏が表象した小説の前面には娯楽的なサブカルな色合いが濃厚に漂い浮かんでいる。例えば、村上氏が小説『ノルウェイの森』や『海辺のカフカ』の中で登場人物が忽然と姿を消す場面を描く。それは、トマス・ピンチョンが『V.』で V. が忽然と姿を消す難解な描写と相似形をなしている。4) しかも、複雑な構造からなるピンチョンの『V.』に比べると、村上氏の小

説『ノルウェイの森』や『海辺のカフカ』は論理が比較的明解である。更に、村上氏の文体の明晰さは、村上氏がフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビィ』やチャンドラーの『ロング・グッドバイ』の技法だけでなく、同時にドストエフスキーの『カラマゾフ兄弟』の底に潜む父性の呪縛からさえも影響を受けているからである。

村上氏は映画や音楽や絵画を小説の行間にちりばめながら独特な宇宙空間を創りあげている。たとえば、村上氏は『ダンス・ダンス・ダンス』のミステリアスな異空間に、画家のフランシス・ベーコンがこの世とあの世の狭間にある異次元に似た世界を構築しただけでなく、哲学的なコンセプトをヴィトゲンシュタインもコミットしている。だが、ときどき、村上氏の文体が観念的になり、異次元世界への突っ込みがもの足りなくなってしまうことがある。舞踏家の田中泯氏は、フランシス・ベーコンの絵がサブカルであると主張しているが、村上氏も思いきってクリストファー・ノーランが映画『インセプション』でフランシス・ベーコンの絵を使ったように『ダンス・ダンス・ダンス』の中にベーコン絵画のコンセプトを引用したら、村上氏の小説にサブカルの厚みが増すかもしれない。[5)]例えば『ダンス・ダンス・ダンス』のラストシーンで、ヒロインのユミヨシさんが別次元に行ってしまう。実は、そこにはフランシス・ベーコンが絵に暗示した生と死の狭間を表した描写と共通性がある。確かに、村上氏の文体には上田秋成の『雨月物語』からの影響があるが、村上氏が受けた影響はもっと幅広く緻密で多角的に分析できる可能性が同時に存在する。それほどまでに、村上氏の小説『ダンス・ダンス・ダンス』はフランシス・ベーコンの絵画が抱えるコンセプトと繋がっている。

更に、フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビィ』についていえば、この小説が内に宿す曖昧さは別の光源から来ていた。例えば、ジョゼフ・コンラッドが書いた小説の謎は、『闇の奥』の中に登場する謎の男クルツが発する不可解な言葉の影響を『偉大なギャツビィ』に認めることが出来る。同時に、フィッツジェラルドが描いた『グレート・ギャツビィ』の曖昧さは、村上氏が著わした『ダンス・ダンス・ダンス』の曖昧模糊とした結末の一面と繋がっている。[6)]

フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビィ』やチャンドラーの『ロング・グッドバイ』がかつてジャズエイジに付与した影響力を、村上氏の『ダンス・ダンス・ダンス』と比べて、或いは1960年代にマルセル・デュシャンが現代美術に与えた衝撃を視野に置き、村上氏が創りだしたサブカルの趣旨を浮き彫りにする。

夏目漱石が著した小説の多くは新聞小説であり、当時の読者は、漱石の新聞小説を、時事問題のように、毎日毎日一刻一刻と登場人物の運命と共に待ち続けた。漱石の作風は現代の情報社会の現象を彷彿とさせる。漱石は前衛詩人のような一部の特定の読者に向けて書いているのではなく、テレビやネットのように不特定多数の読者に向って書いている。もし仮に、漱石が

現代に生きていて創作活動をしたと仮定するなら、村上春樹のサブカルこそ相応しいのではないだろうか。本稿では漱石の心の懊悩を村上春樹に描かれた闇と光を透視して底に明示された迷路を浮き彫りにしていく。

02.　夏目漱石の『行人』『吾輩は猫である』『それから』『倫敦塔』

夏目漱石の『行人』『吾輩は猫である』の朗読会が2014年６月21日愛知県芸樹劇場で開催された。総合演出は木村繁氏で、群読の効果と言葉のリズムとを如何なく発揮した。名作の映画化『夏目漱石のこころ』『それから』『ユメ十夜』や舞台化された音楽劇『吾輩は猫である』は、原作が持つイメージを破壊しかねない。けれども群読の場合、俳優の身ぶりや手ぶりを一切そぎ落としてしまうので、声そのものから直接生れる世界は原作の世界に最も近くなる。木村氏は、役者たちから所作を取り払い声だけに集中させたおかげで、映像や舞台に現れるムーヴメントは専ら観客のイマジネーションに一切任された。群読は所謂劇場の演劇ではなく、美術の展覧会で生きた彫刻作品を見ているようで、動きは人形のようにそぎ落とされてしまう。

言い換えれば、『行人』『吾輩は猫である』の群読は、役者が所作をあくまでも最低限に単純化したのであり、また、一般の朗読会で聞くように『行人』『吾輩は猫である』を専ら耳で聞くのでもない。

ところが、漱石の朗読会で最後に朗読された『それから』は役者に所作を加えたり、朗読台本の一枚一枚を読み終わる度に舞台に落としていく振付があったりしたので、焦点は朗読よりも役者の所作に気持ちが移ってしまい、必ずしも朗読に集中できなかった。しかも役者も集中力が所作と朗読の二つに分散され弱まってしまったので、小説のようにイメージを言語化するのではなく、朗読の場合、原作の持つイメージを如何に音声化するかがどれほど大切なことであるかを考えさせられた。

小説の舞台化や映画化は、原作のプロットをなぞるだけでは、むしろオリジナル性を損なってしまう。木村氏が演出した『行人』『吾輩は猫である』が効果を発揮したのは、素人の役者を起用したことである。声が良い俳優が選ばれ、いわば声だけで演技したためストレートに生の音声が音楽のように鳴り響いたのである。

漱石は『倫敦塔』の中でジェーン・グレーの悲劇を綴っている。漱石は、『倫敦塔』でポール・ドラローシュが描いた「レディ・ジェイン・グレイの処刑」[7]とエーンズウォースの『倫敦塔』を引用し詩歌を紹介している。(421–422)

女優の堀北真希氏が演劇『9days Queen～９日間の女王』で、ジェインを赤坂 ACT シアターで2014年２月から３月まで演じた。既に、堀北真希氏はジェーン・グレーと同じように処刑

されたジャンヌを『ジャンヌ・ダルク』公演で梅田芸術劇場メインホールにて2010年12月に演じている。因みに、バーナード・ショーは『聖女ジャンヌ・ダーク』でジャンヌを描いている。

漱石は明治から大正にかけて日本で一種のショー・ブームに巻き込まれて時代を反映した批評を行っている。そして漱石はショーについて哲学者として次のように批評している。

> バーナード、ショウになると、兎に角自分の読んだだけの範囲で云うと、茲に一種の哲学なら哲学があって、それを現はす為に、殊更らな劇を組み立てたやうに思はれる。[8)]（予の描かんと欲する作品『新潮』10巻2号明治42年、215頁）

また、当時の日本には封建制度が色濃く残っていた時代に、漱石はショーについて風刺家として批評している。

> ショウといふ男は一寸いたづらものですな。[9)]（大正5年8月24日漱石全集15巻岩波昭和60年12月）

つまり、漱石のショー批評は当時の時代を反映している。第二次世界大戦後になって、安西徹雄が『マイ・フェア・レディ・イライザ』を上演して、漸くショーは真っ当な批評がなされるようになった。

また、漱石は『三四郎』の中で、イプセンが描く女性に対しても「イプセンの女は露骨だ」[10)]と書き、「イプセンの人物は、現代社会制度の陥欠を尤も明らかに感じたものだ」（74）と論じている。漱石はイプセンの新しい女の対極にラファエロの『聖母』のマリア像を見ていたようだ。（127）漱石はイプセンばりの新しい女を『虞美人草』の藤尾の激しい性格の中に書きこんでいる。

藤尾の激しい性格は森鴎外の『青年』にその面影が活写されている。イプセンの『ボルクマン』の描写で次の描写がある。

> 皆引っ込んだ跡に、ボルクマン夫人が残って、床の上に身を轉がして煩悶するところで幕になった。[11)]

藤尾の激しい性格は、殊にイブセンの『ヘッダ・ガブラー』のヒロインヘッダ・ガブラーのキャラクターとの類似性が見られる。

HEADA (*clearly and distinctly*). Yes, that is what you are liking forward to isn't it, Mr Brack? You, as the only cock in the yard.

(*A shot is heard within. Tesman, Mrs Elvsted, and Brack jump up*.)

TESMAN. Ah! Now she's playing with the pistols again.

(*He pulls the curtains aside and runs in. So does Mrs Elvsted. Hedda is lying lifeless, stretched out on the sofa*.)[12)]

当時、婦人運動は、樋口一葉、平塚雷鳥、伊藤野枝らの青鞜派の渦中にあったのであり、漱石は新しい女性を『虞美人草』の藤江の性格に託して活写したのである。そしてようやく漱石は晩年になって『明暗』の中で生活に根を張ったリアルな女性を書き始めたのである。

小山内薫は明治44（1911）年11月27日イプセンの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』で自由劇場の旗揚げをしたが、実は小山内は学生時代、漱石やハーンの教育を受けた。小山内のイプセンに対する傾倒ぶりを観ると、小山内の先生であった漱石からイプセンを学んでことは脈々と伝わってくる。それは漱石の『虞美人草』の強い性格の藤尾から推し量る事が出来る。

03. 『三四郎』『草枕』『虞美人草』『門』

漱石がドストエフスキーの小説に惹かれた理由は、森田草平の勧めもあるが、殊に、両者に共通した持病と心の問題との類似は看過できない。漱石が『心』『道草』『明暗』などに描いた心の懊悩は同時に持病となった胃潰瘍の激痛とも連結していた。ドストエフスキーは癲癇で生涯悩まされ続けた。漱石は、亀山郁夫氏が指摘しているけれども、ドストエフスキーがシラーの「父親殺し」のテーマを具に知っていたかどうか定かではない。けれども、江藤淳の『夏目漱石』論によれば、漱石の小説『道草』には母胎回帰の傾向が見られると指摘している。これは、エディプス・コンプレクスに繋がるテーマで、この点で漱石の小説『道草』はドストエフスキーの『カラマゾフ兄弟』の「父親殺し」のテーマと関係がある事に気がつく。

漱石の作品『三四郎』に出て来る『ハムレット』の解釈を英文テキストと坪内逍遥の日本語訳と逍遥の翻訳を使った舞台とを比較しながら論じている。

ハムレットがオフェリヤに向かって、尼寺へ行けと云う所へ来た時、（中略）―ハムレットの様なものに結婚が出来るか。―成程本で読むと左うらしい。芝居では結婚しても良さうである。[13)]

漱石は、坪内逍遥が文藝協会を創設して上演した『ハムレット』を観劇し、『三四郎』にその観劇記を活写している。土肥春曙がハムレットを演じ、松井須磨子がオフィーリアを演じた。漱石が「芝居では結婚しても良さうである」と言っているのは、須磨子の鬼気迫る演技を観てそのように批評したのかもしれない。

ところで文藝協会は逍遥の弟子の島村抱月が1902年から 3 年間留学の後、1906年に設立1909年に『ハムレット』を上演する事になった。

漱石は1900年ロンドンに留学1902年に帰国したが、抱月は漱石帰国後ロンドンに旅立ったのである。漱石は1905年『吾輩は猫である』で小説家として文壇に登場した。1910年『三四郎』を執筆し、1909年上演の『ハムレット』を小説に挿入したのである。

漱石は逍遥訳の『ハムレット』に馴染まなかった。後に逍遥の養子となった坪内志行がロンドンで舞台の内側から体験し帰国後旧帝劇でハムレットを演じた。しかしながら、逍遥の歌舞伎調の翻訳は現在も尚日本国内でベストセラーである。

更に、漱石は小説『三四郎』の中で、自然派としてクルーベの絵画を挙げた後で、モローやシャワンヌの絵を挙げている。(110)

続いて、漱石は小説『三四郎』の中で、ラファエルの『聖母』に言及している。(127) 漱石は小説『坊っちゃん』の中でもラファエルの『聖母』に言及している。[14)]

更に、漱石の『坊っちゃん』では赤シャツたちと釣りに行き、松を眺める場面がある。

> 「あの松を見給え、幹が真直で、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だにいうと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合ったらありませんね。「あの松を見給え、幹が真直で、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だにいうと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合ったらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙っていた。(344–345)

漱石の小説にはイギリス文学の影響だけでなく、特にイタリアルネッサンス美術の影響を受けてウオルター・ペーターが著した『ルネッサンス』(*Studies in the History of the Renaissance*, 1873) の美術工芸に対する審美眼を基にしている。また、漱石がオスカー・ワイルドの『意向集』(*Intentions by Oscar Wilde*) (1891) 評論集、IV『芸術家としての批評家』(The Critic as Artist)、『嘘の衰退』(1889) (*The Decay of Lying*)『獄中記』(*The Profundis*) (1905)、更に、ラスキンの『ヴェネツィアの石』(*The stones of Venice*)『胡麻と百合』(*Sesame and lilies*) から受けた影響は看過できない。

漱石と同時代人の本間久雄は、『英国近世唯美主義の研究』（1934年）を著し、後に、明治時代を日本のルネッサンスと喝破して、江戸時代の日本画が欧州の芸術家たちに与えた影響を調査し、欧州のジャポニズムを明治時代の芸術家たちが移入した。その経緯を本間は『明治文学史』（1935−1939）『明治文学考證随想』（1965）等に纏めた。本間は『明治文学考證随想』の中で、漱石を重要な作家として位置付けている。[15]というのは、漱石は小説に、俳句ばかりでなく、書画、音楽を取り入れて展開しているからである。その一例として、マルセル・プルーストはラスキンの『ヴェネツィアの石』『胡麻と百合』から影響を受け、『失われた時を求めて』を著し、その中で、小説家ベルゴット、作曲家のヴァントウーユ、オランダ画家フェルメールの美術研究家のスワンを配して小説を構成している。このところを具に漱石の小説と比較すると、両者の文学が、詩、絵画、音楽の総合芸術で出来上がっている事が理解できる。

本間が『明治文学史』『明治文学考證随想』『尾崎紅葉』（1919）の中で指摘しているが如く、尾崎紅葉の『金色夜叉』と明らかに異なって、漱石の小説『心』『明暗』などは、小説の中に、東西の美術や音楽を配した大交響楽であることを忘れてはならない。

> 漱石も鴎外も、自然主義からは、ペイタアの所謂「超越して、そして無関係」に、彼等独自の文学活動をつづけた作家だからである。[16]

漱石が『虞美人草』で描いた虞美人草はひなげし（ポピー）で、虞美人草に譬えられた藤尾は美しいけれど性格が悪すぎると述べる。しかし、漱石は、藤尾に象徴された悪の華の象徴を深く掘り下げて微細に描くべきではなかったろうか。悪女クレオパトラは、シェイクスピアが描く『アントニーとクレオパトラ』では退廃的な美女クレオパトラであるが同時に、クレオパトラの性格をアントニーとの夫婦の深い心の機微に触れた恋の秘密としてドラマ化している。1994年に、ロンドンのロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが上演した『アントニーとクレオパトラ』では、クレオパトラは悪女であるよりもアントニーと夫婦の濃密な繋がりをドラマとして緻密に劇を構築していた。

> Cleo. Noblest of men, woo't die?
> Hast thou no care of me? Shall I abide
> In this dull world, which in thy absence is
> No better than a sty?—O, see, my women,
> [Antony dies,][17]

バーナード・ショーが『シーザーとクレオパトラ』で描いたクレオパトラは、ある意味で、漱石が『虞美人草』で描いた藤尾のように、美しいけれど性格が悪い。だが、ショーはクレオパトラからやがて『マイ・フェア・レディ』のイライザを産みだしたのである。イライザはイプセンが『人形の家』で描いたノラのように自立する女性である。だが、漱石が描いた藤尾とノラを比較すると藤尾が自立して逞しく生きていく姿を想像することは難しい。

むしろ、イプセンが『ヘッダ・ガブラー』に描いたヘッダの自死は漱石が『虞美人草』で描いた藤尾が突然死ぬ状況を思わせる。

漱石がイプセンに関心があったのは逍遥や抱月らが主宰した日本文芸協会の『人形の家』（1912）や小山内薫が主宰した自由劇場第 1 回公演における演目『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』（1909）に刺戟を受けたからであろう。森鷗外は『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』の翻訳を担当し、自らの小説『青年』でイプセン論を開陳し、主人公小泉純一を当時のイプセンに関心が強かった漱石の面影を匂わせて活写している。

また、漱石は『虞美人草』の中で日本画の描写「逆に立てたのは二枚折の銀屏」があるが、花は虞美人草で酒井抱一の作である。

> 逆に立てたのは二枚折の銀屏である。一面に冴え返る月の色の方六尺のなかに、会釈もなく緑青を使って、柔婉（なよやか）なる茎を乱るるばかりに描いた。不規則にぎざぎざを畳む鋸葉を描いた。緑青の尽きる茎の頭には、薄い弁（はなびら）を掌ほどの大さに描いた。茎を弾けば、ひらひらと落つるばかりに軽く描いた。吉野紙を縮まして幾重の襞ひだを、絞りに畳み込んだように描いた。色は赤に描いた。紫に描いた。すべてが銀（しろかね）の中から生える。銀の中に咲く。落つるも銀の中と思わせるほどに描いた。[18)]

夏目漱石が書画に傾倒している一面は、『門』（四）の中で、酒井抱一作「月に秋草図屏風」（江戸時代、19 世紀）を描写している箇所から明白に読み取ることが出来る。

> 納戸から取り出して貰って、明るい処で眺めると、下に萩、桔梗、芒、葛、女郎花を隙間なく描いた上に、真丸な月を銀で出して、其横の空いた所へ、野路や空月の中なる女郎花、其一と題してある。
>
> 宗助は膝を突いて銀の色の黒く焦げた辺から、葛の葉の風に裏を返している色の乾いた様から、大福程な大きな丸い朱の輪郭の中に、抱一と行書で書いた落款をつくづくと見て、父の生きている当時を憶い起こさずにはいられなかった。[19)]

宗助は抱一作「月に秋草図屏風」の値打も分からない市井の人であるが、宗助の亡父は書画に審美眼のあった人らしく、宗助の亡父の思い出の中で生き生きと息づいている。宗助は残念なことに審美眼はないようで、貴重な亡父の宝物抱一作「月に秋草図屏風」の価値も知らず手放してしまう。これは、ちょうど、『失われた時を求めて』で亡父ヴァントゥイユの肖像画に娘のヴァントゥイユ嬢が唾を吐いて神聖を冒涜する場面と好一対を成している。

漱石は『草枕』でジョン・エヴアレット・ミレイ作オフィーリアを「風流な土左衛門」と引用している。漱石は『草枕』（七）でミレー作『オフィーリア』を何度も引用し批評している。

> 余が平生から苦にしていた、ミレーのオフェリヤも、こう観察するとだいぶ美しくなる。何であんな不愉快な所を択んだものかと今まで不審に思っていたが、あれはやはり画になるのだ。水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるいは沈んだり浮んだりしたまま、ただそのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。それで両岸にいろいろな草花をあしらって、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとったなら、きっと画になるに相違ない。[20)]

『草枕』では画家の主人公は、宗助と異なり審美眼もあり、書画を楽しみ、英詩を嗜む文人で、さながら、漱石を主人公にしたような主人公である。この画家は俳句を詠み、書画を解する審美家である。『草枕』では、ヒロインの那美さんが駅で別れた夫が満州へ出かける一瞬垣間見て、画家が那美さんに顔の表情に哀れを催す。ミレーのオフェリヤのモデルはエリザベス・シダルでロセッティの最初の妻でありアヘン中毒で亡くなった。那美さんとオフェリヤのモデル、エリザベス・シダルの関係は書かれていないが、那美さんの不幸を平然として絵に描く画家の心理は、村上春樹が『ノルウェイの森』で描く「ぼく」（ワタナベトオル）やドストエフスキーが『悪霊』で描くスタヴローギンの心理と一脈通ずるところがある。

或いは、ジル・ドゥルーズが『アンチ・オイディプス』の中で、『失われた時を求めて』をマルセル・デュシャンやフランシス・ベーコンのアヴァンギャルド・アートの視点を脱構築している。そのように、村上春樹氏は漱石の小説『草枕』をデュシャンの『大ガラス』に描かれた器械をイメージして脱構築し、『海辺のカフカ』の中でヒロインの佐伯さんに明示して新機軸を拓いたのである。

04.　フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビィ』とチャンドラーの『ロング・グッドバイ』

フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビィ』はアメリカのジャズエイジの時代を俯瞰的

に表している。フィッツジェラルドのジャズエイジはフランソワーズ・サガンやボリス・ヴィアンのスラップスティッなフランス小説と深いところで結びついている。

フィッツジェラルドやサガンやヴィアンのように社会の裏面をスリリングなストーリーテラー性で描く小説家を念頭に、現代日本文学を一望すると、ある意味で、吉行淳之介の小説の中から生まれ、やがて村上氏の小説に繋がっていく反俗的で反道徳的なロマンに逢着する。特に、村上氏がストーリーテラーとしての醍醐味を徹底した作風には、フィッツジェラルドを濾過してチャンドラーに浸透していったスリラーに見られる。同様にヴィアンやサガンにもこの傾向がある。また、これを系譜として見ると、前衛芸術家の吉行エイスケから息子の吉行淳之介が創作した『砂の上の植物群』へと受け継がれ、やがて『暗室』を著すことになったようなストーリーテラーを駆使した作風が浮き彫りになる。けれども村上氏が異例なのは、吉行や三島由紀夫さえ成しえなかった米国小説を続々と翻訳し、同時にそのスタイルを駆使して、平行して自作の小説を次々と新しいスタイルで書いたことだ。その意味で、村上氏の極北にあるのはジョイスの『ユリシーズ』を訳した丸谷才一であろう。

村上春樹氏によると、チャンドラーの『ロング・グッドバイ』はフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビィ』の構成にアナロジーが見られるという。ギャツビィの裏面で悪徳が蔓延る世界を友人が暴き立てるが、そのように、『ロング・グッドバイ』ではテリーの悪事を探偵のマウロウが暴き立てる。しかし驚愕するのは、ギャツビィの悪事に友人が同情するところである。

> Gatsby believed in the green light, the orgastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter—to-morrow we will run faster, stretch out our arms further …[21)]

語り手の「私」がギャツビーに対して同情するように、私立探偵のマウロウがテリーの悪事に対して同情を懐く。

> 'Good-bye.'
>
> He turned and walked across the floor and out. I watched the door close. I listened to his steps going away down the limitation marble corridor. After a while they got faint, then they got silent. I kept on listening anyway. What for? Did I want him to stop suddenly and turn come back and talk me out of the way I felt? Well, he didn't. That was that the last I saw of him.[22)]

ギャツビーやテリーからの影響のせいなのか、村上氏は自作の『ダンス・ダンス・ダンス』で、主人公の「僕」が悪党の五反田君に困惑するが同時に共感もするところが似ている。

> 長いあいだ、僕は自分が五反田君を殺してしまったような気がしていた。僕はその重苦しい気分をどうしても拭い去ることができなかった。僕はシェーキーズでの彼との会話をひとつひとつ思い返してみた。そのひとつひとつについて、僕はもっとうまく答えて彼を救うことができたんじゃないかと思った。[23)]

「僕」が悪党の五反田君に困惑するが共感も懐く理由は、村上氏が『ロング・グッドバイ』のテリーや『グレート・ギャツビィ』のギャツビィを通して、チャンドラーやフィッツジェラルドに対する共感があったからだ。

時代は三百年遡るが、シェイクスピアの『コリオレーナス』の結末でコリオレーナスは裏切りにあい殺される。ところが、コリオレーナスのライヴァル、タラス・オーフィディアスは、コリオレーナス殺害のあと、忽然と、憎しみが消え、コリオレーナスを偉大な軍人と認める。

> Auf.　　　　　　　　　　　　My rage is gone,
> And I am struck with sorrow.—Take him up:-
> Help three o' the chiefest soldiers; I'll be one.-
> Beat thou the drum, that it speak mournfully:
> Trail your steel pikes. Though in this city he
> Hath widow'd and unchilded many a one,
> Which to this hour bewail the injury.-
> Yet he shall have a noble memory.-
> Assist.[24)]

コリオレーナスのライヴァル、オーフィディアスは、コリオレーナスが生きている時は激しい怒りに燃えていた。ところが、不思議なことに、オーフィディアスはコリオレーナスが死んだ直後、憎しみは消え去りむしろコリオレーナスの偉大さを思い出し謙虚にその偉業を認める。この場面は論理的に理解出来ない場面である。だが、『ダンス・ダンス・ダンス』で「僕」が悪党の五反田君を困惑するが共感も懐く理由の解明の手掛かりになる。先ず、コリオレーナスのライヴァル、オーフィディアスは、コリオレーナスを偉大な軍人と認める。そこのところは、『グレート・ギャツビィ』でギャツビィが“グレート・ギャツビィ”と呼ばれる所以と似

通っている。また、『ロング・グッドバイ』でマーロウはテリー・レノックスの若き日を知っている。だからこそ、マーロウは目の前に居るテリーは嫌いだが、昔のテリーは強烈な想い出として懐かしく蘇るのである。更に、五反田君は殺人犯なので、だから「ぼく」は五反田君を殺してしまったと思っている。いずれも、今日から見ると、殺人は法を犯すので罪を免れない。

だがシェイクスピアのコリオレーナスの場合、ライヴァルのオーフィディアスがコリオレーナスを殺害しても、ギャツビィ、テリー・レノックス、五反田君のように犯罪者の烙印は押されない。にもかかわらず、コリオレーナスのライヴァル、オーフィディアスと同様に、ギャツビィ、テリー・レノックス、五反田君が殺人と関わった後、共通して、故人に対する思慕の念を懐く。それは、たとえば、現実では起こらなくても、夢の世界では、法を越えた世界を表すことができるのと似ている。特に、『ダンス・ダンス・ダンス』の場合は、「ぼく」は現実と夢との間を行き来している。

『グレート・ギャツビィ』のギャツビィ、『ロング・グッドバイ』のテリー・レノックス、『ダンス・ダンス・ダンス』の五反田君は、何れもアンチヒーローである。コリオレーナスもライヴァルのオーフィディアスからみれば、ギャツビィ、テリー・レノックス、五反田君と比べるとアンチヒーローとして見ることができるのではないだろうか。

村上氏は、三島由紀夫が書き別けた純文学としてのメインカルチャーとサブカルチャーとの境界線を乗り越えて、現代文学をサブカル一色にした。その裏には、村上氏が『グレート・ギャツビィ』や『ロング・グッドバイ』を翻訳しながら解読して考究した実績と無関係ではない。[25)]

村上氏が『ダンス・ダンス・ダンス』に表した音楽的な躍動感は、フィッツジェラルドが生きたアメリカのジャズエイジを彷彿とさせる雰囲気が伝わって来る。

また、村上氏の小説には、動物が人間の中に入ってしまう事件が幾つかある。『羊をめぐる冒険』や『シドニーのグリーン・ストリート』や『ダンス・ダンス・ダンス』には羊男がでてくる。実は、人間が動物に変身するドラマはイヨネスコの『犀』『アメデ、またはどうやって厄介払いするか』にある。[26)]また、カフカの『変身』でもザムザが朝起きると突然身体が虫に変わったことに気づく。

05. 村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』

村上春樹氏の作風は『海辺のカフカ』を執筆した頃から徐々に変化しつつあった。『ノルウェイの森』は未だ生の人間の顔が一人ずつ見えた。しかし、『海辺のカフカ』以降は、複数

の人間が一人の心の中に入り込んでしまったイメージが強固になった。既に、『ダンス・ダンス・ダンス』では母親のアメと娘のユキは母子関係でありながら、次第に、二人は接近していく。『海辺のカフカ』では、佐伯さんが15歳の女性の若い頃と50歳の大人になった頃とがセットになって姿を現わす。また、図書館司書の大島さんは男性の姿をしていながら実は女性であったり、話し言葉が男性的であったり女性的であったりする。

『海辺のカフカ』では、ホモセクシャルやゲイが詳細に描写され、あたかもマルセル・プルーストが描いた『ソドムとゴモラ』の世界に迷い込んだ心持を与える。理論的には、アントナン・アルトーが『ゴッホ論』で展開するゴッホ一族の世界が再構築されている。少なくとも、村上氏がプルーストの禁断の領域に踏み込んでしまい、その結果、一種の境界線が見えてくる。さて、村上氏は自作の全作品の中でプルーストの名前を４回使っている。[27)] かつてトルーマン・カポーテイはアメリカ版『失われた時を求めて』の『叶えられた祈り』（1986）を書き始めた当時、その小説をライフワークとして完成したいと願った。村上氏も、自作の中で、日本版『失われた時を求めて』を書こうとした意図があったかもしれない。村上氏が『ノルウェイの森』や『ダンス・ダンス・ダンス』を執筆していた時期は、カポーテイが『叶えられた祈り』を著わしていた。見方を変れば、村上氏は、『ノルウェイの森』（1987）や『ダンス・ダンス・ダンス』（1988）を執筆しながら、カポーテイを通してプルーストの名前を思い出した可能性が浮かび上がってくる。殊に、村上氏の場合、プルーストの名前が、他の作品の中で間欠泉のように突如として噴き出している。これは、プルーストの『心の間歇』のように、村上氏の作品の中で、心の間欠泉が噴き出した例なのであろうか。プルーストはベルエポックと同時代人であり、第一次大戦を跨いでフィッツジェラルドのジャズエイジと繋がっていた。従って、村上氏は、フィッツジェラルドのジャズエイジを通してプルーストのベルエポックを見つめた可能性が出てくる。スワンがサロンに憧れ、やがてサロンから追い出される。そのように、ギャツビィは成り上がり者でありながら、スノッブの世界に憧れ、やがてそこから追放される。そこが、ちょうど、『ダンス・ダンス・ダンス』で、成り上がり者でスノッブの五反田君が煌びやかな世界から追放されるのと相似形を成している。或いは、プルーストとアルフレッド・アゴスチネリの関係は、ギャツビィとニック・キャラウェイの関係と繋がりがある。更に、これらの関係は、五反田君と「私」との関係を想わせる。小説の世界から、五反田君の愛人キキは突然いなくなり、五反田君も結局死ぬ。ここはプルーストの愛人アルフレッド・アゴスチネリの死やアゴスチネリをモデルにしたアルベルチーヌの突然の失踪と類似している。

また、カポーテイはドキュメンタリーで『冷血』を著わし裁判記録を活写した。いっぽう、村上氏はサリン事件をドキュメンタリーで『アンダーグラウンド』に表した。明らかに、『ア

ンダーグラウンド』は、カポーテイがドキュメンタリーで書いた『冷血』からの影響がある。プルーストもドレフュス事件に巻き込まれ、『失われた時を求めて』の中にその事件を挿話にして書いた。また、プルーストは『失われた時を求めて』の中で第一次大戦をドキュメンタリー風に刻一刻と書き綴っている。仮に、プルーストが長生きしたらドレフュス事件や第一次大戦のドキュメンタリーを書き遺したであろう。

フランシス・ベーコンは1998年デイヴィッド シルヴェスターとの対談で、プルーストよりもバルザックの方が明解だと評した。しかし、2013年開催の『ベーコン展』では、ベーコンは自作の絵画に描いたこの世とあの世の往来を巡る解説した資料展示で、むしろプルーストを高く評価している。その理由は、ベーコンが同じ同性愛者であったプルーストが描くあの世とこの世の曖昧模糊とした表現に共感したからであろう。

村上氏は、ストーリーテラーとしての語り口の明快さと、突如として曖昧模糊とした描写を『ダンス・ダンス・ダンス』に持ちこみ、読者を摩訶不思議な世界に巻き込んでいく。例えば、プルーストは、『スワンの恋』の中で、スワンが愛人オデットの濡れ場に踏み込む場面を描いている。だがスワンが現場に踏み込むと、そこには愛人ではなく全く赤の他人がいた。けれどもオデットは一体どこに消えてしまったのか。この疑問は消えずに残る。このプルーストの曖昧さは、ベーコンが描いた絵画のこの世とあの世の往来にも表れている。そしてこの曖昧さは違った形となって、村上氏の小説『ダンス・ダンス・ダンス』に表れている。

06. 『羊をめぐる冒険』『1Q84』『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』

『羊をめぐる冒険』は羊男が羊をめぐる冒険の鍵を握っている。では、問題はその羊男が出現する事によって謎が解かれたのか。というと、実は謎が解かれたわけではない。むしろ、問題解決の糸口は簡単には見つからなくて、ミステリーの闇がいっそう深まるばかりである。にもかかわらず、羊男が忽然として姿を表すので読者の心が癒される。だが、これは一体どうしたわけか。ひとつの理由としは、羊男が恐ろしい怪獣ではなく、人懐っこい様子をしているからではないか。譬えるなら、『聖書』に出てくる悪魔は神であり、色白で白面の美男子で、文字通り、悪魔のような美男である。或いは、ギリシア神話のジュピターは無垢な女性を誘惑する為に何にでも変身し若い娘を堕落させた。村上氏の羊男は、悪魔やジュピターのような衣装とは異なっている。だが羊男は装いも新たなぬいぐるみの悪魔やジュピターとなった姿を思わせる。或いは、村上氏の羊男は、ジョセフ・コンラッドの『闇の奥』の主人公クルツが最後に発する謎の言葉の響きが木霊しているようだ。

『1Q84』は、テロリストの恋を描いている。冒頭の暗殺事件は、ルイ・マル監督の『死刑台

のエレベーター』の暗殺シーンと似ている。映画『死刑台のエレベーター』ではモーリス・ロネが演じたジュリアン・タベルニエは暗殺に成功するのだが、殺人者はロープをテラスから取り外しを忘れたことでケチがつき、完全犯罪は失敗する。『1Q84』では、ヒロインの青豆が暗殺現場に行くのに、タクシーが渋滞に巻き込まれ、計画は失敗に終わるかにみえる。だが、クールなヒロインは交通渋滞から抜け出して暗殺を首尾よく成し遂げる。当然ながら、青豆は人殺しを引き起こしたのだから法によって裁かれなければならない。ところが村上氏が意図したことは『1Q84』を勧善懲悪の観点で描写描したのではない。青豆の暗殺行為は、小説が著わしている紙の上での出来事であり、仮に紙の上で殺人を犯したら、作家は皆殺人罪を犯したことになる。同じように、遊園地のゲーム場で相手の人形を倒して殺しても罪にはならない。青豆の殺人は、小説やゲームやアクション映画で引き起こされる仮想現実の事件である。また、青豆の殺人は、チャンドラーが描いたスリラー『ロング・グッドバイ』でテリー・レノックスが引き起こす事件の戦慄を想いださせる。

村上氏は悪玉と善玉が最初から終わりまで決まっているサスペンスはステレオタイプでつまらないと述べている。歌舞伎の勧善懲悪を描いた河竹黙阿弥の『天衣紛上野初花』とは異なって、寺山修司の映画『無頼漢』では、直次郎は、原作には出て来ない母親と二人でクーデターから逃げ出し、結末では政治よりも母親が一大事と嘯いて市井の生活を選ぶ。寺山が描いた直次郎は悪事を働くが映画では死刑にはなっていない。だからといって、寺山が河竹黙阿弥の勧善懲悪を無視したと誰も非難しない。『1Q84』の結末はそのような痛快さと曖昧さが残る。

『1Q84』は冒頭でヒロインの青豆が交通渋滞に巻き込まれるところから始まり、最後に、再び、交通渋滞に巻き込まれていく。小説のエンデイングは、青豆が小説の冒頭に懐いていた緊張感を徐々に醸し出していく。

『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』は、多崎つくるが無二の友達からある日突然交際を拒絶される。多崎つくるは、自分が何故無二の友達から交際を拒絶されたのかその理由を尋ねる為、彼を捨てた友人たちを訪ねる。映画『舞踏会の手帖』のクリスティーヌや『第三の男』のホリー・マーチンスのように、多崎つくるは事件にかかわることによって、次第に真実が解き明かされていく。『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』でも、多崎つくるは、思いがけない真実と直面することになる。結局、『ノルウェイの森』の直子のような心に病を抱えた女性の悪戯の為に、多崎つくるは、とんでもない濡れ衣を着せられ、冤罪に巻き込まれていく。

事件の犯人と間違えられた事件で重い罪を負った人の数は計り知れない。ドストエフキーの小説にはしばしば登場する奇怪な事件が『悪霊』や『白痴』の中では起こる。主な事件の原因は心の病が中心にある。けれども、多崎つくるの場合、事件の究明に行動を起こすのは、鈍感

にもその行動は事件が起きたずっと後のことであり、しかも、多崎つくるは、その原因も知らず、何もかも終ってから、事件の謎の究明を行う。また、事件のあらましが次第に分かって来るに従って、何故、そんなに時間が経ってから、多崎つくるが、行動を起こしたのかと疑問が生じる。だが、逆に、多崎つくるが鈍感であった為に、事件が起きたのではないかといういらだたしさが湧き起こる。けれども、多崎つくるを取り巻く状況がパセティックに表わされないおかげで、それまでの小説『風の歌を聴け』や『ノルウェイの森』にある感傷的な調子は抑えられ、それでいながら抑制が効きすぎているというのでもない。ともかく、何故多崎つくるは、事件の真相を知らずにいたのかという疑問がかすかに心の隅に残る。だが、心の闇を抱えた女性のミステリーが過去の闇の底から徐々に浮かび上がってくる。しかも、多崎つくるが心の謎を追いかけていく姿は、抑制が効いている。だから、多崎つくるの事件は平行するように、ドストエフキーの『白痴』に出てくるムイシュキン侯爵が苦悩を解決できないで彷徨する姿と重なってくる。つまり、多崎つくるが色彩を持たないのは、ムイシュキン公爵が白痴で無垢であるのとどこか似ている。けれども、多崎つくるが色彩を持っていなかったので、他の友人たちと異なって、交通信号の赤や青や黄色に気がつかず悲劇が起こったとも考えられる。多崎つくるが色彩を持たないのは必ずしも罪があることにはならない。というのは、わけも分からず、多崎つくるが濡れ衣を着せられ、友達と断絶を余儀なくされたのであり、それだけでも、十分精神的には辛いことであり、色彩を持たない人間として、言い換えれば、何の手掛かりもなく、償いの巡礼をするのであり、その旅路の終わりに漸く失われた時を取り戻すのである。

07. 『ねじまき鳥クロニクル』『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』

『ねじまき鳥クロニクル』は、挿話として第二次世界大戦末期、1939年 5 月から 9 月，満州国（中国東北地方）とモンゴル人民共和国（外蒙古）の国境ノモンハンで起こった日ソ両軍の国境紛争事件を描いている。日本は関東軍 1 万5000名を動員したが， 8 月ソ連空軍と機械化部隊の反撃によって壊滅的打撃を受けた。この事件はエピソードとして、小説の中に挟みこまれている。その理由は、日本が過去の戦争で問題解決をせず、現代社会になってからも手付かずのまま放置し、問題を曖昧にしたまま危機的な状況を浮き彫りにしているからである。結局、『ねじまき鳥クロニクル』は、現在の日本も未来の日本も事件の解決を曖昧にして、同じ過ちを繰り返す危険性を暗示している。

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』は SF 小説であり、トマス・ピンチョンの SF 小説『V.』のように、世界が壊滅していく状況を原作のニューヨークから東京に舞台

を移したように展開していく。けれども、村上氏は、『V.』とは異なり、破滅しながらも、希望を失わないでいる。村上氏は、西洋のキリスト教のように悪を生み出して、悪を懲らしめる為に神が必要される西洋文化とは異なり、東洋の宗教観で世界を判断し、悪は善でもあるという『善悪の彼岸』の視点で過去から現在にかけ日本人が歩んできた日本の歴史を現した。

08.　まとめ

村上春樹氏が『ダンス・ダンス・ダンス』や『ノルウェイの森』以降、次第に作風を変えて、『海辺のカフカ』へと変貌を遂げていく。先ず、村上氏は『グレート・ギャツビィ』や『ロング・グッドバイ』を自ら日本語に翻訳し知悉することによって、人間の暖かさに共感することになった。だから、『ダンス・ダンス・ダンス』や『ノルウェイの森』からは暖かい血の通った生身の人間の息吹が伝わってくる。けれども、次いで、村上氏が『ライ麦で捕まえて』を自ら訳してから次第に文体は冷徹に心の闇を解剖する文体に変わった。つまり、血が通っていない冷血な人間、たとえば、ロボットのような器械を思わせる人間が『海辺のカフカ』あたりから存在感を増した。

ひるがえって、近代、殊に産業革命以降、機械が人間を支配し始めるに従い、逆に、徐々にではあるが、一個の生身の人間としての神話が生命力を失った。ジル・ドゥルーズは『アンチ・オイディプス』で機械が存在を増し、オイディプスは非人間的な機械にされたと説いた。既にドゥルーズは『プルーストとシーニュ』で『失われた時を求めて』を機械装置として論じた。更に、ドゥルーズは『アンチ・オイディプス』の中でゴッホ論を展開し、『失われた時を求めて』でプルーストがゴッホを模倣した痕跡を検証した。プルーストは『失われた時を求めて』を美術論と音楽論と文学論とで構成した。その中心にあるのはフェルメール論である。作中小説家のベルゴットはフェルメールの『デルフトの眺望』を見つめながら息絶える。だが、この『デルフトの眺望』に描かれた朝日の黄金は、実はゴッホのひまわりの黄金色を指しており、ゴッホがカラスのいる麦畑を描きながらピストル自殺した情景を象徴している。プルーストはゴッホを小説家のベルゴットに変え、ゴッホの黄金のひまわりをフェルメールが『デルフトの眺望』に描いた日出の黄金に変えた。といっても、プルーストがゴッホを模倣していることに変わりはない。また、ゴッホの膨大な『書簡集』は美術論、音楽論、文学論によって綴られている。ゴッホはドラクロワの『悲しみの聖母』を娼婦シーンの顔の表情に見て、自作の絵画『悲しみ』を描いた。プルーストは『スワンの恋』の中で娼婦オデットの顔にボッチチェルリが描いた聖女の面影を見いだし、恋をする。このドラクロワ、ゴッホ、プルーストのフェルメール論には、ある種、デュシャンが発案したレディメイドにその系譜を見る事が出来る。

ドゥルーズは、プルーストが『失われた時を求めて』で、ゴッホの生命力をちょうど蜘蛛が毒で蝶を麻痺させて生命力を奪うように、今度は自作で登場人物たちの生命力を奪い機械化したと論じた。

寺山修司は前衛劇『奴婢訓』で機械装置を舞台化した。けれども、寺山は30年前の1986年に亡くなった。だが、村上春樹氏は寺山没後30年の間に、『海辺のカフカ』をはじめ、『1Q84』『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』で生の人間を一種の精密な機械のように描き続けた。

サリンジャーは『ライ麦畑で捕まえて』で、幼い少年ホールデン・コールフィールドがまるで、パラノイア患者のように、心を病み、受動的にしかも機械的に命令に従うロボットのような心理状態を繊細に描写した。

> ‘I thought it was “If a body catch a body”,’ I said. ‘Anyway, I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all. Thousands of little kids, and nobody’s around—nobody big, I mean—except me. And I’m standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start to go over the cliff.- I mean if they’re running and they don’t look where they’re going I have to come out from somewhere and catch them. That’s all I’d do all day. I’d just be the catcher in the rye and all. I know it’s crazy, but that’s the only thing I’d really like to be. I know it’s crazy.’[28]

村上氏はサリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』だけではなく、更に、カフカの『流刑地にて』や、ドゥルーズが著したプルーストの『失われた時を求めて』論や、デュシャンの『大ガラス』の機械に影響をうけて、創作『ダンス・ダンス・ダンス』や『ノルウェイの森』で器械のように情感を殺した人間を描いた。

だから、村上氏の小説『海辺のカフカ』に著されたカフカ少年の全体を支配するのは、もはや生の人間というよりも、パラノイアの患者が人間性を喪失し、サイボーグ化した現象を表している。つまり、村上氏が描くキャラクターは、足が地に着いた人間でなくて、梶を失った舟のように、漂流する思考を辿っていく。つまり、この種の小説を、サブカルと呼ぶことに異論がないだろう。

亀山郁夫氏が『ドストエフスキー　父殺しの文学』で指摘しているが、ドストエフスキーは間接的に父を殺すことよって、パラノイアに陥り、父性を失ったばかりでなく、神も失うことになったと語る。[29]更に、続けて亀山氏は論考を展開して、ドストエフスキーは父性を喪失した結果、主人を失ったロシア国家全体が機械と化した状況を目の当りにする。だから、ドスト

エフスキーは、ロシアが蘇生する為に、『悪霊』に描いたスタヴローギンのように、もう一人の神である悪魔が必要だと考えた。

村上氏は『海辺のカフカ』のようなSF小説だけではなく、『アンダーグラウンド』のように現代社会にコミットしたサリン事件をドキュメンタリーで表した。その背景には、村上氏は、舵取りを失い、いわば、神を失った日本の現代社会に、もう一人の神である悪魔が必要になったのかどうなのかを検証する必要を感じ、サリン事件を解析したと言ってもよい。

先に述べたが、フランシス・ベーコンは1998年デイヴィッド シルヴェスターとの対談で「プルーストは複雑で難解だが、バルザックは極めて明解である」[30]と語った。けれども、2013年のベーコン展では、ベーコンは、こちら側と向こう側の行き来を象徴的に表している絵の展示の中で、「フランシス・ベーコン展で言及されたマルセル・プルーストの『失われた時を求めて』を引用して「人間たちを（たとえ怪物のような存在にさせることになろうとも）空間の中にあてがわれているあのようにせまい場所に比べ、厖大な一つの場所を時の中に占めるものとして私の作品の中に書き込むこと」の重要性を書き遺した。[31]つまり、ベーコンはプルーストの『失われた時を求めて』それ自体が単なる機械だけではなく、この世とあの世の行き来を可能にする装置だと述べた。このエネルギーはエリアーデのいう「性のエクスタシー」が意味する生命の発露と繋がりがある。或いはロジェ・カイヨワは『石』の中で論じているが、魚石に閉じ込められた「処女水」が大気に触れるや否や一挙に発散する瞬間的な爆発的な力を表す現象とも繋がっている。[32]

村上氏が『海辺のカフカ』以降、『1Q84』や『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』で、エリアーデの「性のエクスタシー」やカイヨワの「処女水」を探求しているかどうかは今のところ充分には分析できない。

少なくとも、『ノルウェイの森』の直子の死の謎や『海辺のカフカ』のナガタさんの死の謎は『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の多崎つくるが遭遇する奇怪な謎と共通していることは理解できる。死は機械のように冷たい世界である。だが、仮に、フランシス・ベーコンがプルーストに生と死の境目にある象徴的な異空間を見出したように、村上氏が『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の多崎つくるの性格の中に見出したとすれば、田中泯氏が指摘するように、それこそ真のサブカルとなって村上氏の筆先から発散して出てくる可能性がある。

こうしてみてくると、フィッツジェラルドの小説『グレート・ギャツビィ』やチャンドラーのスリラー『ロング・グッドバイ』にはコンラッドが小説『闇の奥』に描いたはっきりしない漠とした闇が横たわる宇宙空間が拡がって見えてくる。そして、村上氏は『偉大なギャツビィ』や『ロング・グッドバイ』を翻訳し研究した結果、『ノルウェイの森』で直子の心の内部に潜

む儚い心理現象を闇の中から明瞭にあぶり出して見せたのである。

いっぽう、D. J. サリンジャーが描いた『ライ麦畑で捕まえて』は、少年ホールデンを通して、心の闇を先鋭化したことは事実であり、その結果として、村上氏は自分の小説『海辺のカフカ』でカフカ少年のパラノイアを顕在化することが出来たのである。つまり村上氏は、『グレート・ギャツビィ』や『ロング・グッドバイ』の翻訳を通して、生の人間の心の闇を描き、更に、『ライ麦畑で捕まえて』の翻訳を通じて、パラノイアを患った少年ホールデンの分裂した心の闇を解読したのである。そしてそこから、村上氏は自分の小説『海辺のカフカ』の中でカフカ少年の心に深く潜入しその闇を暴いてみせたのであった。

次いで、村上氏は、一個人の心の闇だけではなく、集団妄想による心の闇をドキュメンタリー『アンダーグラウンド』で、サリン事件を描き日本社会の暗部を暴いた。

はじめ、村上氏は、『グレート・ギャツビィ』や『ロング・グッドバイ』を自ら解析することにより、その原点にコンラッドの『闇の奥』の謎を突き止めようと試みた。次いで、村上氏は『ライ麦畑で捕まえて』を分析することによってパラノイアを解読し、遂に、亀山氏が指摘する父性を喪失した国家は集団妄想に陥るのと同じ状況に遭遇することになった。そして、村上氏はドストエフスキーの「父殺し」と共通した国家全体の闇を突き止めたのである。こうして、村上氏はドキュメンタリー『アンダーグラウンド』でサリン事件の集団妄想を検証することになった。その意味では、村上氏にとって、『アンダーグラウンド』は、日本人が心を見失った状況を指す集団妄想を描く為、ドストエフスキーの「父殺し」のテーマが重要となり必要不可欠となったのである。

村上氏は個人の苦悩と集団ヒステリーをセットにし、SF 小説から出て現実の社会にコミットした。その試みは今後村上氏が自作で如何に SF 小説と社会の集団妄想とをワンセットにして如何に総合するかが重大になる。だが、その村上芸術の原点にあるのは、『グレート・ギャツビィ』や『ロング・グッドバイ』が秘めた心の闇だったのであり、その背後に隠れていたのはコンラッドの『闇の奥』に潜む謎であった。

村上氏が『アンダーグラウンド』の集団ヒステリーと『海辺のカフカ』に示した人間個人の苦悩とをセットにしてそれを如何に総合するか、またこの謎を解く鍵を見いだすことが可能なのかどうか、それは今後の村上氏の小説を待たねばならない。

村上氏が生み出したサブカルの対極にあるのはメインカルチャーである。ところで、先に挙げた亀山氏は『ドストエフスキー　父殺しの文学』の中で、性のエクスタシーを強調している。けれども、プルーストが「心の間歇」で論じた性のエクスタシーとは幾分性質が異なる。しかしながら、同時に、村上氏が提示したサブカルのエッセンスを読み解く為には、集団ヒステリーと性のエクスタシー：「心の間歇」の間に横たわる差異を読み解く鍵を見つける事が重

要である。

確かに、ドストエフスキーが述べた父性喪失による集団ヒステリーと、同様に田中泯氏が語った「フランシス・ベーコンはサブカル」が意味するコンセプトの間には裂け目がある。その裂け目を結ぶ掛け橋となるのは、田中氏が指摘したように、「ベーコンがプルーストとあの世とこの世の狭間を繋ぐ懸け橋となる」と語ったコンセプトが不可欠となる。

村上氏は独創的なサブカルを生み出した。しかも、その萌芽を田中泯氏が言うベーコンのサブカルに見いだすことは可能である。その一例として、村上氏の『ノルウェイの森』と『海辺のカフカ』の間を隔てる谷を渡る掛橋が出来るかどうかにある。しかしながら、村上氏が描く集団妄想は、プルーストが著わした「心の間歇」との間に差異がある。その掛け橋を渡るには、先ず『ノルウェイの森』と『海辺のカフカ』の間に横たわっている人間と機械との差異を読み解くことが先決である。少なくとも『海辺のカフカ』の機械は『ノルウェイの森』の生の人間から産まれたのである。

亀山氏は『破滅のマヤコフスキー』の中で集団ヒステリーの頂点でマヤコフスキーは自殺したと推測している。[33)]マヤコフスキーの苦悩は、ある意味でサリン事件を引き起こした人たちの懊悩と似ている。しかしマヤコフスキーの懊悩は集団ヒステリーだけにとどまらない。その謎を解く鍵として、寺山が下した一つの解釈がある。先ず、寺山は1971年の実験映画『書を捨てよ、町へ出よう』でスクリーンにマヤコフスキーの詩をスーパー・インポウズした。次いで寺山は1972年ミュンヘン・オリンピックの野外劇で『走れメロス』の上演で、ドストエフスキーに影響を与えたシラーの父性を取り出し、父性喪失のコンセプトを劇化した。にもかかわらず、寺山はミュンヘン・オリンピックでの抗議集会に政治参加を最終的に拒否した。寺山が示したある種の異化効果は、ブレヒトの異化効果と全く異なる。実は、そのギャップは、村上氏にも見られる。たとえば、村上氏は『アンダーグラウンド』で集団妄想にコミットしながら、短編小説「ドライブ・マイ・カー　女のいない男たち」（2013）の中では、吉行淳之介が描くエロスを個人の心の中に退行するような市井の人を描き分けているのである。

更に『海辺のカフカ』、『1Q84』、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』では、集団ヒステリーよりも、プルーストの「心の間歇」を表す「性のエクスタシー」が強く息づいている。

結局、村上氏は集団ヒステリーよりも、プルーストが表す「心の間歇」のもとになる「性のエクスタシー」との繋がりの方が強く現れてくる。その理由は、村上氏が『グレート・ギャツビィ』や『ロング・グッドバイ』を日本語に翻訳したうえで、『ノルウェイの森』を著わし、心の闇を描いたことと深く繋がっているからである。

漱石は『明暗』『心』『道草』の中で、作中人物の心の苦悩や煩悶を未解決のまま放置して終

わっている。ここのところは、亀山氏が村上氏の『1Q84』は未解決のままだから、続編を書くべきだと論じていると論じている要でもある。だが、肝要なのは、村上氏が『1Q84』で謎を謎のままにしていることだ。確かに、漱石の『明暗』もドストエフスキーの『カラマゾフ兄弟』も何れも作者らの突然の死によって小説は中断された。そればかりでない、未完のまま中絶している作品は他にも多く存在することだ。プルーストの『失われた時を求めて』も作者が校正中、完成稿を待たず亡くなった。カポーテイの『叶えられた祈り』も突然の死で未完のままで終わった。しかし、漱石『明暗』やドストエフスキーの場合『カラマゾフ兄弟』の場合、プルーストの『失われた時を求めて』やカポーテイの『叶えられた祈り』の未完成とは趣を異にする。漱石の『明暗』やドストエフスキーの『カラマゾフ兄弟』の場合、もともと最初から解答はなく、むしろ謎自体が重要なのであり、仮に謎が解決されてしまえば、同時に固有な独自性も消えて無くなってしまう。だから、村上春樹の『1Q84』も謎が解決されないことが重要なのである。むろん、完結している作品の場合でも、未知の世界は遺されている。フランシス・ベーコンがプルーストの描写を評して、プルーストが描く世界は余りにも濃密で密着し凝縮しており、しかもその針の穴は無限大に通じていると論じている。プルースト自身が、いみじくも告白しているが、プルーストのスタイルは、日本の水中花にその譬えを挙げて、自分の文体の秘密を明かしている。言い換えれば、漱石やドストエフスキーや村上春樹はドアの向こう側に未知の世界が広がっている。これに対して、プルーストの場合は、ドアの向こう側ばかりでなく内側も未知の広大な宇宙世界に満たされているのである。江藤淳はプルーストと漱石は異なると論じている。プルーストと漱石は異なるかもしれないが、村上春樹氏はフィッツジェラルドを迂回して、漱石の苦悩を通り抜けて、プルーストが圧縮し濃密にした迷路の空間に遭遇する可能性はある。何故なら村上氏はプルーストの時代にはまだ実験的であったサブカルを自在に操って新機軸を拓き迷路に灯りを照らす手掛りをまさに掴もうとしているからである。

注

1）江藤淳『夏目漱石』194頁参照。

2）亀山郁夫「神の夢、または1Q84のアナムネーシス」（『村上春樹の読みかた』平凡社、2012）、69頁。

3）レイモンド・チャンドラー『ロング・グッドバイ』村上春樹訳（早川書房、2009）、675–676頁参照。

4）Pynchon, Thomas, *V.* (Picador, 1981), p. 492.

5）【参考】NHK Eテレ番組【田中泯 画家フランシス・ベーコンを踊る】2013年8月2日夜11:00～「ETV特集」日本で30年ぶりに開催されたフランシス・ベーコン展。ダンサー田中泯氏は、今回初めてベーコンの絵の実物と向き合い、新作ダンスを踊った。(http://www.nhk.or.jp/etv21c/ 2013.8.25)

6）【参考】www.kotensinyaku.jp/mt/mt-search.cgi?IncludeBlogs 2013.8.25

７）夏目漱石Ⅰ『倫敦塔』（文藝春秋、1966）422頁。以下、同書から引用は頁数のみ記す。
８）夏目漱石「予の描かんと欲する作品」（『新潮』10巻２号、1909）215頁。
９）『漱石全集』15巻　大正５年８月24日（岩波、1985）、580頁。
10）夏目漱石全集 (4)（筑摩書房、1986）73頁。以下、同書から引用は頁数のみ記す。
11）森鴎外全集２（筑摩書房、1971）30頁。
12）Ibsen, Henrick, *Hedda Gabler* (Methuen, 1990) pp. 363−364.
13）夏目漱石全集４（『三四郎』筑摩書房、1986）144頁。以下、同書から引用は頁数のみ記す。
14）夏目漱石Ⅰ『ぼっちゃん』（文藝春秋、1966）422頁。以下、同書から引用は頁数のみ記す。
15）本間久雄『英国近世唯美主義の研究』（東京堂出版、1934）参照。
16）本間久雄「明治文学史後記実践文学」23号（1906.12）22頁。
17）*The Complete Works of William Shakespeare* (Spring Books) p. 772.
18）夏目漱石『虞美人草』（岩波文庫、1970）387頁。
19）漱石全集　第６巻夏目漱石『門』（岩波書店、1994）400頁。
20）漱石全集　第３巻　夏目漱石『草枕』（岩波書店、1994）86頁。
21）Fitzgerald, F. Scott, *The Great Gatsby* (Penguin Books, 1950) p. 188.
22）Chandler, Raymond, *The Long Goodbye* (Penguin Books, 1976) p. 320.
23）村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』（講談社文庫、1996）305頁。
24）*CORIOLANUS* (*The Complete Works of William Shakespeare* Spring Books 1972), p. 718.
25）【参考】『英語で読む村上春樹　世界の中の日本文学』（『NHK ラジオテキスト』NHK 出版、2018.8）『英語で読む村上春樹　世界の中の日本文学』（『NHK ラジオテキスト』NHK 出版、2018.9）清水良典『村上春樹はくせになる』（朝日新書、2006）
26）【参考】『アメデ、またはどうやって厄介払いするか』(*Amédée ou comment s'en débarrasser*)−1954.
27）【参考】1000ya.isis.ne.jp/0372.html. 2013.8.25
28）J. D. Salinger, *The Cather in the Rye* (Penguin Books, 1966), pp. 179−180.
29）亀山郁夫『ドストエフスキー　父殺しの文学』上・下（日本放送協会、2004）参照。
30）Cf. Francis Bacon In conversation with Michel Archimbaud (Phaidon Press Limited, 2000)
31）フランシス・ベーコン ２ちゃんねる文庫 Francis Bacon *2ch.ebookr.jp/ r / gallery / 1360115547* 2013.8.25
32）Caillois, Roger, *Pierres* (Poesie/Gallimard, 1970) p. 62.
33）亀山郁夫『破滅のマヤコフスキー』参照。

参考文献

Ibsen, Henrick, *Hedda Gabler* (Ibsen Plays: Two, Methuen, 1990)
Ibsen, Henrick, *Hedda Gabler* (Henrick Ibsen Four Major Plays, Oxford U.P., 1992)
Fitzgerald, F. Scott, *The Great Gatsby* (Oxford, 2005)
Fitzgerald, F. Scott, *The Great Gatsby* (Penguin Books, 1950)
The Selected Works of F. Scott Fitzgerald (本の友社、1996)
F. Scott Fitzgerald's The great Gatsby Edited, and with an introduction by Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1986)

F. Scott Fitzgerald critical assessments Edited by Henry Claridge (Helm Information 1999)
F. Scott Fitzgerald Edited, with an introduction, by Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1985)
Kenneth Eble *F. Scott Fitzgerald* (Twayne Publishers, 1977)
A concordance to F. Scott Fitzgerald's The great Gatsby Compiled by Andrew T. Crosland (Gale Research Co., 1975)
Twentieth century interpretations of The great Gatsby A collection of critical essays, Edited by Ernest H. Lockridge (Prentice-Hall, 1968)
F. Scott Fitzgerald a collection of critical essays Edited by Arthur Mizener (Prentice-Hall, 1963)
F. Scott Fitzgerald The man and his work Biography (World Pub. Co. 1951)
Salinger, J. D., *The catcher in the rye* (Penguin, 1994)
J. D. Salinger, revisited by Warren French (Twayne Publishers, 1988)
J. D. Salinger Edited and with an introduction by Harold Bloom (Chelsea House, 1987)
J. D. Salinger, *Franny and Zooey* (Penguin Books, 1964)
Chandler, Raymond, *The Long Goodbye* (Penguin Books, 1976)
Murakami, Haruki, *A Wild Sheep Chase* (Vintage, 2003)
Murakami, Haruki, *After Dark* (Harvill Secker, 2007)
Murakami, Haruki, *NORWEGIAN WOOD* Translated by Jay Rubin (Vintage, 2003)
Murakami, Haruki, *Sputnik Sweetheart* Translated by Philip Gabriel (The Harvill Press, 1999)
Murakami, Haruki, *The Wind–up Bird Chronicle* Translated by Jay Rubin (The Harvill Press, 1998)
Murakami, Haruki, *Underground* (The Harvill Press, 2000)
Murakami, Haruki, *Underground: The Tokyo Gas Attack and the Japanese Psyche (Panther)* Translated by Alfred Birnbaum (Random House, 2001)
Murakami, Haruki, *Kafka on the Shore* (Vintage, 2005)
Murakami, Haruki, *Dance Dance Dance* (Vintage, 2007)
Proust, Marcel, *A la recherche du temp perdu* (nrf Gallimard, 1954)
Gilles Deleuze & Félix Guattari, *Capitalisme et Schizopherénie Anti-Oedipus* (Les Éditions de Minuit, 1972)
Wilson, Colin, *The Occult* (Watkins Publishing, 2003)
Eliade, Mircea, *Myths, Dreams and Mysteries* translated by Philip Mairet (Harper Torchbooks, 1960)
Van Gogh's Letters The Mind of the Artist in Paintings, Drawings, and Words, 1875–1890 Edited by H. Anna Suh (Black Dog & Leventhal Publishers, 2006)
Francis Bacon In conversation with Michel Archimbaud (Phaidon Press Limited, 2000)
Artaud, Antonin, *Van Gogh le Suicidé de la Société* (Gallimard, 2001)
Forrester, Viviane, *Van Gogh ou l'enterrement dans les blés* (Éditions du Seuil, 1983)
Caillois, Roger, *Pierres* (Poésie / Gallimard, 1970)
Golding, John, *The Bride Stripped Bare by her Bachelors, Even* (Allen Lane Penguin Press, 1973)
夏目金之助著編『漱石全集』第一巻〜第二十八巻（岩波書店、1993〜1999）
夏目金之助著編『漱石全集』別巻（岩波書店、1996）
『漱石文学全集』第１巻〜第10巻（集英社、1982−1983）
夏目漱石『夏目漱石全集』第１巻（角川書店、1973）
夏目漱石『夏目漱石全集』第１巻〜第10巻（筑摩書房、1986）

夏目漱石『夏目漱石全集』別巻（筑摩書房、1986）
夏目漱石小説全集　第五巻（日文社、1955）
『夏目漱石』1（文藝春秋、1966）
夏目漱石『吾輩は猫である』（新潮社、1966）
夏目漱石『三四郎』（岩波書店、1990）
夏目漱石『虞美人草』（新潮社、1966）
夏目漱石『こころ』（角川書店、1951）
夏目漱石『それから』（岩波書店、1989）
夏目漱石『彼岸過迄』（新潮社、1966）
夏目漱石『道草』（岩波書店、1984）
夏目漱石『明暗』（岩波文庫、1966）
夏目漱石『二百十日・野分』（旺文社文庫、1969）
森田草平『夏目漱石』（日本図書センター、1992）
小森陽一『村上春樹論「海辺のカフカ」を精読する』（平凡社、2006）
柴田勝二『村上春樹と夏目漱石―二人の国民作家が描いた〈日本〉』（祥伝社新書、2011）
江藤淳『夏目漱石』（講談社、1960）
江藤淳『夏目漱石』（角川文庫、1979）
江藤淳『決定版夏目漱石』（新潮文庫、1979）
江藤淳『決定版夏目漱石』（新潮文庫、1979）
江藤淳「ロンドン・漱石・ターナー」（『江藤淳著作集４』講談社、1967）
江藤淳「漱石とその時代」（新潮選書、1970）
江藤淳『海賊の唄』（みすず・ぶっくす、みすず書房、1959）
小森陽一、石原千秋編『漱石を語る』⑴⑵（翰林書房、1998）
亀井俊介『英文学者夏目漱石』（松柏社、2011）
夏目鏡子『漱石の思ひ出』（角川文庫、1965）
夏目伸六『父　夏目漱石』（角川文庫、1965）
唐木順三『夏目漱石』（現代選書、修道社、1956）
荒正人『評伝夏目漱石《作品と作家研究》』（実業之日本社、1967）
荒正人、小田切秀雄監修『増補改訂漱石研究年表』（集英社、1984）
小坂晋『漱石の愛と文学』（講談社、1974）
坂本浩『夏目漱石―作品の深層世界―』（明治書院、1979）
稲垣瑞穂『夏目漱石と倫敦留学』（吾妻書房、1994）
吉田六郎『『吾輩は猫である』論漱石の「猫」とホフマンの「猫」』（勁草書房、1968）
吉田六郎『漱石文学の心理的探求』（勁草書房、1970）
金正勲『漱石と朝鮮』（中央大学出版部、2010）
水山隆夫『夏目漱石と戦争』（平凡社新書528、2010）
水山隆夫『夏目漱石「こころ」を読みなおす』（平凡社新書287、2005）
神山睦美『漱石の俳句・漢詩』（「コレクション日本歌人選037」笠間書院、2011）
佐々木英昭『「新しい女」の到来平塚らいてうと漱石』（名古屋大学出版会、1994）

丸谷才一、山崎正和「近代文学は青春と不機嫌を祀った」(『文學界』、2001.8)
丸谷才一、山崎正和『日本史を読む』(中央公論社、1998)
森鴎外全集 2　(筑摩書房、1971)
村上春樹『風邪の歌を聞け』(講談社、1979)
村上春樹『羊をめぐる冒険』上・下（講談社、1994)
村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』 1・2・3 部（新潮社、1987)
村上春樹『ノルウェイの森』上・下（講談社、1987)
村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』上・下（講談社、1996)
村上春樹『アフターダーク』(講談社、2004)
村上春樹『スプートニクの恋人』(講談社、1999)
村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』上・下巻（新潮社、2010)
村上春樹『はじめての文学』(文藝春秋、2007)
村上春樹編訳『月曜日は最悪だとみんなは言うけれど』(中央公論新社、2000)
村上春樹『意味がなければスイングはない』(文藝春秋、2005)
村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(文藝春秋、2013)
村上春樹『1Q84』BOOK1（４月－６月）後篇（新潮社、2012)
村上春樹『村上朝日堂ジャーナルうずまき猫のみつけかた』(新潮社、1996)
村上春樹『蛍・納屋を焼く・その他の短編』(新潮社、1984)
村上春樹『アンダーグラウンド』(講談社、1997)
村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです村上春樹インタビュー集1997–2011』(文藝春秋、2012)
村上春樹『約束された場所で』(文藝春秋、1998)
村上春樹『走ることについて語るときに僕の語ること』(文藝春秋、2007)
村上春樹『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』(中公文庫、1991)
村上春樹『やがて悲しき外国語』(講談社、1994)
村上春樹「僕が「僕」にこだわるわけ。」(『広告批評』35号、1982.3)
村上春樹「「カーヴァー・カントリー」を描くロバート・アルトマンの迷宮映画」(『本』講談社、1993.7)
村上春樹「「やさしい」映画を作ろうとするほど映像はデモニッシュになる『ツィゴイネルワイゼン』(『太陽』平凡社、No. 207 1980.6)
村上春樹「歌舞伎町のゲーム・センターで時折感じる“リアリテイ”。『スター・ウオーズ / 帝国の逆襲』」(『太陽』平凡社、No. 209 1980.8)
村上春樹「完璧な「書き割り」の平面に、ポランスキーの才気がひかる。『テス』」(『太陽』平凡社、No. 209 1980.9)
村上春樹「くだらない男は撃ち殺せ！八〇年代の女はタフにならねば。『ハンター』と『グロリア』」(『太陽』平凡社、No. 209 1980.9)
村上春樹「バルト海の底で僕を待ち受けていた鰻たちに関する「テーゼ」。『ブリキの太鼓』」(『太陽』平凡社、No. 218 1981.4)
村上春樹「ドライブ・マイ・カー　女のいない男たち」(文藝春秋、2013.12)
河合隼雄、村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』(岩波書店、1996)
小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』(講談社現代新書2071、2010)

小山鉄郎『空想読解なるほど、村上春樹』（共同通信社、2012）
諏訪哲司、「村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を語る。」（七ツ寺通信32号2013.6）
吉本由美『するめ映画館』（文藝春秋、2010）
鈴村和成『テレホン村上春樹、デリダ、康成、プルースト』（洋泉社、1987）
『村上春樹が分かる』（AERAMook Asahi Shinbun Number 75, 2001）
『村上春樹テーマ・装置・キャラクター』（国文学解釈と鑑賞、至文堂、2008.1.5）
「総特集村上春樹を読む」（『ユリイカ』Vol. 21−8 2000.6）
「村上春樹の世界」（『ユリイカ』Vol. 32−4 1989）
小森陽一『村上春樹論』（平凡社新書、2006）
レイモンド・チャンドラー『ロング・グッドバイ』村上春樹訳（早川書房、2009）
フィッツジェラルド、スコット『マイ・ロスト・シティー』村上春樹訳（中央公論新社、2012）
明里千章『村上春樹の映画記号学』（若草書房、2008）
清水良典『村上春樹はくせになる』（朝日新書、2006）
村上春樹、柴田元幸『翻訳夜話』（文春新書、2000）
村上春樹、柴田元幸『翻訳夜話2サリンジャー戦記』（文春新書、2003）
「日本人が知らない村上春樹」（『Newsweek ニューズウイーク日本版』、2013.5.21）
『英語で読む村上春樹　世界の中の日本文学』（『NHK ラジオテキスト』NHK 出版、2018.8）
『英語で読む村上春樹　世界の中の日本文学』（『NHK ラジオテキスト』NHK 出版、2018.9）
『ノルウェイの森』DVD（アスミック、フジテレビ、2010）
亀山郁夫「世界の終末はロシアより」（『オーム真理教の深層』青土社、1995）
亀山郁夫『ドストエフスキー　父殺しの文学』上・下（日本放送協会、2004）
亀山郁夫『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房、1998）

Hayao Miyazaki's *The Wind Rises*: Oneiric Aspects of Character Development through Narrative Dream Sequence

Jane LIGHTBURN

The film *The Wind Rises* by Hayao Miyazaki centers on the life story of Jiro Horikoshi, the noted Zero figher plane designer. The story covers the time from Jiro's Taisho era boyhood until about 1945 following the end of the Second World War. "The protagonist, Jiro Horikoshi, is a character combining the essences of the designer and engineer Jiro Horikoshi—creator of the Zero, a famous machine that later made its mark in the history of aviation—and Tatsuo Hori, a man of letters who lived at the same time" (Miyazaki, 2013, 10). As part of Jiro Horikoshi's character portrayal, Miyazaki inserted dream sequences at key points in the plot of the film story. Describing the dream inserts as free and lyrical, Miyazaki says in the introduction of *The Art of The Wind Rises* that "the dreams will embody the obsessive singular focus of Caproni and Jiro" (Miyazaki, 2013, 9).[1] There are basically five dream sequences that occur in the film and each of them reveal something about Jiro Horikoshi's character according to their narrative content, visual imagery, and placement within the film. These can be considered as scaffolding around which the film story itself evolves.

The dreams indicate important aspects of the protagonist's interior life at the time of each dreaming. Also, the two main characters Jiro and Caproni, and their conversations in the dream, provide the viewer with the introspective depth of Jiro's state of mind that is not always revealed by Jiro's material life in the film story. This essay looks at the dream sequences and offers interpretations on their meaning in the film work with regards to character development and overall theme.

In looking at the use of dreams in Miyazaki's film-work, it is evident that several of his major films have included dreams and oneiric elements. These dreams may appear in the film while characters are sleeping and dreaming such as Mei and Satsuki in *My Neighbor Totoro* or Princess Nausicaa in *Nausicaa*

of the Valley of the Wind. Others occur in the form of a memory by the main character, as seen in the story-telling visualization of Marco when told to Fio in *Porco Rosso*. In some cases, the dream sequence appears as a stream of consciousness into which the character experiences a marvelous almost surrealistic landscape, as Sofie Hatter did in *Howl's Moving Castle*. In these stories, the various dream sequences provide the viewer with vital interior information about the main character as well as the others in the dream sequence, and serve as a metaphorical device for the underlying vision of the film.

The Wind Rises technically begins and ends with a dream sequence, differing from other the oneiric insert styles in the above mentioned Miyazaki films. Those film dream sequences mainly appear at one or two points in the story, but in the *The Wind Rises* dream sequences form a thread that ties the beginning of the story to the final frame. In this sense the use of dream narrative here is a more significant component in the actual thematic composition of the story realting to Jiro's character development, while the film plot naturally unfolds in a basic restricted linear narration through which key periods in Jiro's life are portrayed.

The film plot takes the viewer through the Taisho and early Showa eras of Jiro's personal and professional life while the dream sequences, defying both time and space, indicate a deeper intrinsic theme of the story. The portrayal of Jiro's character and its development is one of the main thematic threads that holds the entire film story together. The dream sequences thus serve as guideposts that indicate the direction in which the main character is evolving.

The poetic nature of the dream inserts in this film is first felt visually and literarily through the opening words of the French writer Paul Valéry in the first frame of the film, "*Le vent se lève, il faut tenter de vivre*," which are also echoed in the final scene by Nahoko's spirit when she appears to tell Jiro that 'he must live.' From this bittersweet and nostalgic theme of accepting to live one's life with hope, arises the first dream with the boy Jiro at home early one morning in his bed as he dreams of flying a small bird-like airplane over the fields and town at dawn.

In the first dream Jiro flies his child-size craft with ease and confidence, as he sails at sunrise in the plane with lyrical-like ease over green fields, a river and the Taisho-era country town. At first he seems able to fly the plane without use of glasses or goggles, as if he is naturally able to fly the craft. The happy and pastoral feeling of the dream comes to a disturbing halt when suddenly looming high above him Jiro spots a huge fantastical Zepplin type of craft with bizarre dark-man bomb bugs suspended from its belly. One of them collides with his little craft, abruptly crashing the shocked Jiro back down to earth. He awakens from the dream, checking to see if he is at home safe in bed.

The first dream, in which there is no dialog, offers points that visually show its importance to the

narrative. First, it presents the true deep desire of the main character Jiro, who even as a boy dreams of flying and of beautiful airplanes. The harmonious purity of his dream-experience over the pastoral countryside is interrupted by the overshadowing menace of the armed Zepplin. While Jiro dreams of airplanes and flying as something beautiful and wonderful, the huge machine of war seems to have appeared above him from behind the clouds revealing the grim omen of a possibly unfulfilled life overshadowed by the reality of war.

The placement of the dream at the very beginning of the film is meaningful. Basic features of this initial dream portray the very first look at the protagonist of the story. In this dream it is clearly shown when he is dreaming and where he is as he dreams. He is the boy Jiro, 13 years of age at home dreaming of flying a small child-size plane. This vision preludes the more complex and mundane scenes from his practical life. This is the start of the dreaming, inspiration and life aspirations of Jiro which make a kind of metaphorical thread that practically ties the beginning of the film to the end, (which is also a dream insert as well). What is subsequently created in his life or whatever he did in his life as shown through the linear plot narrative is connected to and emerges out of this first initial dream sequence in childhood. It represents the original great spark of pure inspiration that arises in the unblemished child's mind. All things are possible, even flying a plane without glasses by someone who has poor eyesight.

The second dream comes soon after Jiro had been given some English magazines that feature Gianni Caproni, the noted Italian aeronautical design engineer whom he greatly admires. He lies atop the tile roof of his house with his little sister Kayo looking up at the stars. The dream time starts there but finishes with Jiro sleeping inside in a tatami mat room with his mother nearby. It is not clearly indicated but the change of location may indicate Jiro has had the same dream on several occasions. Jiro's dream is a dialogue between himself and Mr. Caproni, who only appears in his mind, never in the actual events of the film story. These dialogues are a kind of narrative strategy in which Caproni appears as a mentoring-like muse and voice of reason for Jiro. Miyazaki states in the introduction notes to the film, "Caproni appears in Jiro's dreams as someone who inspires and advises Jiro; he is also the mouthpiece for Jiro's interior." (Miyazaki, 2013, 9).

As Jiro meets with Caproni for the first time in this dream, we see them talking in a wide, green field after which they board a plane designed by Caproni. They continue their discussion. We learn about a fundamental aspect of Jiro's mind. We know his dream is to become an aeronautical engineer. Caproni enlightens Jiro on important ideas such as life itself being a dream, knowing his own true dream in life,

as well as how dreams are the platform for inspiration in life. Caproni also tells Jiro about the difference between the naivety of beautiful dreams and how they might end up being misused in real life. He warns him, “Remember this, Japanese boy. Airplanes are not tools for war. They are not for making money. Airplanes are beautiful dreams. Engineers turn dreams into reality” (Miyazaki, 2013, 238).

In their initial meeting Jiro tells Caproni that this is his dream. However the word itself “dream” seems to retain a fluidity and reflects potentially multiple interpretations. Jiro says to Caproni that he is dreaming. Caproni tells Jiro, “Interesting. Yes, this is a dream. This world is a dream.” (Miyazaki, 2013, 237). We are not shown if Caproni means that the dream itself is the world he is referring to, or if the real physical world outside is the dream. Either way, this narrative acts as a springboard from Jiro’s dream life into his real one. This childhood dream in which he first encounters Caproni is the initial turning point in his character development. He has decided to become an aeronautical engineer.

One interesting aspect to these encounters with Caproni is the stance between Jiro and the Italian mentor-muse. Caproni’s style is friendly and inspiring, yet he always refers to Jiro by the descriptive term of “Japanese boy.” On the other hand, Jiro always addresses his muse as “Mr. Caproni,” an indication of respect for the older and wiser figure. The Caproni figure could be psychologically interpreted as a part of Jiro’s own deeper and more mature inner psyche. However, Caproni is unique in that while he is an historical person, he only appears as a dreamscape character in the film. The true nature of Caproni being either a metaphysical fantasy character or a deeper part of Jiro’s self are both possible if not feasible in Miyazaki’s established pattern of blending and merging worlds seen and unseen within the fabric of one story.

The third dream comes much later in terms of placement within the plot. Jiro is now a young man poised to begin study at university in Tokyo. The vision comes in the form of a daydream. Jiro sits exhausted, by the ruins of his university shortly after the 1923 Kanto earthquake had destroyed most of Tokyo. He rests with his friend Honjo by piles of books rescued from the burning school library. By chance the wind blows a postcard to him. He picks it up and sees that it has the photo of Caproni along with one of his airplanes. The scene shifts to his daydream at Lake Maggiore and Caproni’s failed airplane test flight on the lake. While Jiro is daydreaming, he does so literally sitting in the middle of a huge disaster area at the university. He visualizes Caproni’s frustration at his failed airplane test. Right after the crash, an animated Caproni turns toward Jiro to ask him, “What do you think Japanese boy? Is the wind still rising?”, as if he is ironically checking on Jiro ability to live even in the midst of chaos, death and disaster. Jiro answers in the affirmative. So Caproni responds, “Then you must live. Le vent se lève”

(Miyazaki, 2013, 242). The poetic echo of the film's underlying theme of hope once again appears from deep within himself sustaining Jiro's faith in life even through the horrific times.

This scene shows Jiro and others struggling in the aftermath of the 1923 Kanto earthquake. Even in such circumstances, Miyazaki reaffirms the wisdom of choosing life and hope over pessimism and defeat. Jiro and his friend Honjo are only at the start of their university life. They have just experienced a devastating earthquake, but they still have the willpower to live. In the introduction to the film notes Miyazaki writes that the film "portrays a character who tries to live each day as though it were a precious gift" (Miyazaki, 2013, 10). This appreciation for each day of life, even in the worst of times, is reflected in the juxtaposed images of Jiro's colorful dream of Caproni with the harsh reality of his life circumstances. It displays the inner character development of the young man who is sorting out the conflicts within himself, determined to confront life without giving into the temptation of hopeless surrender.

In terms of the linear narrative time frame, the next dream insert does not occur for many years. The narrative shows Jiro's student days at the university, his securing a job with Mitsubishi in Nagoya and the start of a promising career designing aeronautical parts for planes. He goes through various advances and endures failures in his work. His childhood dream of becoming an aeronautical engineer seems to have become a reality. But the reality of this dream is much more challenging than he might have imagined. Not only does he face the competition of other designers, he is forced to acknowledge his own technical limitations as a designer and creator of beautiful airplanes while being overshadowed by the superiority of German engineers. The screenplay narration shows that in 1929 Jiro and Honjo are sent by their company to visit Germany and study their aircraft design and planes. It is in these circumstance that the next dream insert occurs.

The two men have just finished a tour of German aircraft and production sites. They learned that Japan's technical skills are far below that of the Germans and Honjo complains about their plight in the hotel room. When Jiro starts to admire even the design lines of the radiator in the room, Honjo remarks, "Okay, I get it. German technology is so superior that they can put wings on anything and fly it, including their damn radiators…" (Miyazaki, 2013, 252). They go for a walk in the cold winter night and talk about running to catch up with German technology. Jiro indicates he still has hope of designing a good plane. He thoughtfully tells Honjo "I wonder if there's a different way to run, Honjo" (Miyazaki, 2013, 252). The two men walk on in the cold night only to find secret police chasing men in the next street. They soon return to the hotel. Jiro is exhausted and falls asleep on the bed. With that, the next dream commences, reflecting a conflicted and bothered state of mind following all that he has experienced while in Germany.

In his dream, he is surrounded by aircraft wreckage on a cold and snowy plain at night. The first images reflect death and darkness as A G.38 plane crashes overhead, crashing down in flames. Jiro observes silently, walking past the wreckage in the snow and towards a train. The dream vision continues with a cut-jump into the night train. Once again Jiro meets Gianni Caproni who comes and sits down next to him.

In this poignant exchange, Caproni again checks to see if Jiro is still confident enough to make his dream of a beautiful plane into a reality. He greets him, "Is the wind still rising?" to which Jiro answers, "It sure is" (Miyazaki, 2013, 253). The dream scene drastically shifts as Caproni invites Jiro to literally jump off the train and they fall into a sunny and green landscape showing a Caproni aircraft scenario. Caproni is taking his family and workers on a tour flight in his Ca.90 which is soon to be used as a bomber by the government. As Jiro and Caproni ride along, Caproni talks to him about aircraft design. Again we see how Jiro's dialogs in the dreamscape reveal that he is able to transform his perception of his outer reality. As if he knew about Jiro's designing dilemma after his encounters in Germany, Caproni reassuringly tells him, "Inspiration is more important than scale. Inspiration unlocks the future. I've found technology eventually catches up." (Miyazaki, 2013, 254). However, Caproni also directly admits to him the sobering fact of a tainted future for their precious aeronautical designs, saying, " Humanity dreams of flight but the dream is cursed. My aircraft are destined to become tools for slaughter and destruction." (Miyazaki, 2013, 254) to which Jiro can only answer, "I know." Even at this early point in his professional life, Jiro senses the paradox of his dream, revealed in this key oneiric insert.

In this dream Jiro also shows Caproni for the first time his model plane design. It is a white inverted gull wing fighter plane. As it sails past them, Caproni encouragingly remarks, "Bravo! A beautiful dream." (Miyazaki, 2013, 255). Jiro's special design seems to be taking shape. In this dream not only is he working through the good and bad sides of creating his beautiful airplane, but he also seems to unravel a puzzle of what constitutes an authentic approach towards creating an original aircraft despite German technology's superiority at the moment. This oneiric insert displays both Jiro's growing maturity and his capacity for having faith in his own inspiration. Moreover, he is finally able to dive inside the unconscious creative mind and envision his plane, despite what he has seen in the world of German aircraft design.

This internal change towards a more confident maturity underlines how this character transforms inside, perhaps gaining a deeper spiritual sense to his life through numerous challenges or hardships that he must face and overcome. For Jiro, the ambition to achieve his boyhood dream of making a beautiful airplane drives his creative life forward in adulthood. In the project Proposal of *The Wind Rises* Miyazaki describes Jiro as a person who, "… as he moves through life he always has in his heart a burning ambition

to build beautiful planes" (Miyazaki, 2013, 9). Despite the temporary failures, the technical superiority of others in his field and the mitigating circumstances that would force him into being part of a world braced for war, Jiro finds his way through the maze as reflected in the dialogues with Caproni which express his character development. He is changing from an unseasoned, immature youth to a more experienced and stable man with acceptance of his ability to create with originality.

Following the Germany trip's dream sequence the film plot portrays the mature Jiro hard at work in his company on various projects, endeavoring to design the needed aircraft for their military client. The years pass by. The next dream sequence does not come until the end of the film story, in 1945, which is long after he had achieved his Zero fighter jet design. Jiro had reconnected with and married Nahoko Satomi, who later died of tuberculosis in 1935, around the time of his successful Zero jet flight test. As described by Miyazaki, "Nahoko, the love of Jiro's life whom he meets during the Great Kanto Earthquake, is the heroine from Tatsuo Hori's novels *The Wind Rises* and *Nahoko*. She is depicted as a woman who lives a short, beautiful life." (Miyazaki, 2013, 10)

The scene directly before the final dream insert is the moment when Jiro's Zero fighter prototype plane test flight succeeds. It is within moments of the test that the scene shows Jiro intuitively knowing and feeling his wife's death. The screenplay text indicates "Jiro's face shines with pride. He suddenly starts, as if someone whispered in his ear. He turns and looks behind him Note: It is a few days after Nahoko quietly left the Kurokawa residence. Jiro has a premonition of her death here" (Miyazaki, 2013, 274). That moment marks another profound turning point in the main character's life, in which one dream is born while another one passes away.

The scene of the Zero fighter test flight morphs into the final climactic dream sequence which is distinctly vague in terms of the dreamer's time or place. There is no visual or narrative cue as to where or when Jiro is dreaming. According to the screenplay the year is 1945, and a visualization of B-29 bombers appears sending contrails across the sky above a city burning in war bombing. Jiro sees this, and his figure somberly strides through a dark field of crash wreckage. It is a stark metaphorical image of loss and defeat, surrender and death. Yet as the figure walks on, the landscape ahead becomes the familiar wide, sunny, green and grassy one from his childhood days in which the boy Jiro had first met Caproni and they had talked about their mutual dreams. Caproni reminds Jiro that this place is "our kingdom of dreams," but Jiro can only pessimistically reply, "Now it's the land of the dead" (Miyazaki, 2013, 274). Perhaps he not only means the defeat of Japan in the war but also the death of his wife Nahoko which he projects onto his current disillusionment of the 'beautiful airplane' dream.

As the two men talk Caproni appears to be paradoxically optimistic while Jiro counters him with

pessimism, and regrets. Caproni responds, “Not quite, in some ways, yes. But what about your ten years in the sun? Did you live them well?” Jiro answers, “Yes. Things fell apart toward the end, though.” (Miyazaki, 2013, 274). He reflects on what his beautiful dream had actually become in the reality of a war-scarred time of history making it seem like an unredeemable broken hope. Jiro tells him that not one of the Zero fighters returned, and Caproni finally has to admit, “There was nothing to return to. Airplanes are beautiful, cursed dreams waiting for the sky to swallow them up” (Miyazaki, 2013, 275). Caproni’s words echo the frightening omen from Jiro’s first boyhood dream in which the huge war-machine zeppelin had crashed his little bird-like plane out of the sky.

Against the backdrop of a blue sky and white clouds the disillusioned Jiro pauses on the crest of a hill in the field with Caproni, nostalgically suffering over the traumas of his life. But then something unexpected happens. There is a vision of Nahoko, and Caproni points her out to him. “Someone is waiting for you…. She’s been waiting here a long time” (Miyazaki, 2013, 275). Nahoko, the face and voice of love, appears with her great white parasol in the breeze. She has been alive inside Jiro’s dreamscape world waiting for him to see her. It is only after ten years that he is able to hear the most important message of all. She tells him, “You must live darling…. You must live.” (Miyazaki, 2013, 275). The screenplay text describes her as “joyous and relieved.” As he acknowledges her words, Nahoko smoothly fades away and merges into the wind. Her message is reconfirmed by Caproni as he tells Jiro matter-of-factly “You must live.” This is the same original theme which first appears as a quote from Valéry’s poem at the very start of the film. The scene shows Jiro and Caproni walking over the hill and out of sight with only the green grass waving in the wind, a blue sky and puffy white clouds as the final image, hinting at the possibility of life yet to be lived with hope. The simplicity of this final pastorally toned significant scene shows us that it no longer matters where or how Jiro is dreaming because it reveals the resolved change in Jiro’s state of mind clarifying he has chosen life and hope over death and defeat. It is the final poetic thread in the fabric of the film story.

In examining the film *The Wind Rises* one could easily focus on the limited external and material aspects that subscribe to a superficial point of view which only sees Jiro Horikoshi’s life through the lens of history, politics, and the various socio-political events of that era, including war. However, the presence of the several dream inserts in this film guide us to see a deeper level of Jiro’s story and offers a more poignant personal point of view. Miyazaki indicated in his introduction to the film in *The Art of the Wind Rises*, that he wanted to focus on the portrayal of the person and his character. The linear plot is naturally set and evolves through an historical backdrop that starts in the Taisho era and ends in the 1940’s, but an important subtle character development is presented through the oneiric inserts through which Jiro’s story

can be better appreciated and understood.

In his landmark book *Starting Point 1979–1996* Miyazaki wrote about various important aspects to creating animation. He wrote, "The most important thing of all it seems to me, is to have an interest in people, in how they live, and how they interact with things" (Miyazaki, 1996, 125). These sentiments, clearly mirrored through the oneiric scenes in *The Wind Rises*, present us with a deeper look at the character Jiro Horikoshi, and serve as a way to present the importance of character development in the film.

As a storyteller, Miyazaki has taken someone who not unlike himself, earnestly applied his whole self to the realization of a beautiful dream, be it in animation, in airplane design or in something else. In the project proposal notes Miyazaki explained, "I want to portray a devoted individual who pursued his dream head-on. Dreams possess an element of madness, and such poison must not be concealed. Yearning for something too beautiful can ruin you. Swaying toward beauty may come at a price. Jiro will be battered and defeated, his design career cut short. Nonetheless, Jiro was an individual of preeminent originality and talent. This is what we will strive to portray in this film" (Miyazaki, 2013, 8).

Endnotes

1) Film and screenplay quotations are taken from *The Art of The Wind Rises: Project Proposal, Introduction, Complete English-Language Script*, Vis Media. 2013

Filmography

The Wind Rises, (2013) Director, Miyazaki, Hayao, Studio Ghibli. Tokyo

Bibliographic References

Cavallaro, Dani, *The Anime Art of Hayao Miyazaki*, McFarland & Company, Inc., London, 2006

Corrigan, Timothy and White, Patricia, *The Film Experience, An Introduction*, (2nd Edition), Bedford/St. Martin's, New York, 2009

Jahn Herman, D., Ryan, M., (editors), *Routledge Encyclopedia of Narrative Theory*, Routledge, New York, 2005

Miyazaki, Hayao, *The Art of The Wind Rises, A Film by Hayao Miyazaki*, (Allen, J., English Adaptation; Mamatas, N., Montesa, M. Editors), Viz Media, San Francisco, 2013

—*Kaze no Kaeru basho: Nausicaa kara Chihiro made no kiseki*, Bungeishunju Ltd., Tokyo, 2013

—*Starting Point, 1979–1996*, Viz Media, San Francisco, 1996

—*Turning Point, 1997–2008*, Viz Media, San Francisco, 2008

Robinson, Jeremy M., *The Cinema of Hayao Miyazaki*, Crescent Moon Publishing, Kent, 2011

資料

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（九・完）

——明治三十三年五月～明治三十三年六月——

川口高風

凡例

一、本稿は「能仁新報」に掲載されている現在の名古屋市内にあたる地域の仏教関係の記事を採録した。「能仁新報」（名古屋市朝日町五十六番戸　能仁社発行）の原本は東京大学法学部の明治新聞雑誌文庫に所蔵するものを使用した。同文庫には明治二十三年五月十二日発行の第一号より明治三十三年六月二十五日発行の第六四九号まで所蔵するが、明治二十四年六月八日（第五十七号）、六月十五日（第五十八号）、同二十七年九月七日（第三三三号）から同二十八年七月三十日（第三七〇号）、同二十九年十一月十六日（第四三八号）から同三十一年八月三十日（第五五五号）までの発行号数は欠本となっているため、その間の記事はない。

一、第九回は「能仁新報」第六四二号（明治三十三年五月七日）より第六四九号（明治三十三年六月二十五日）までから採録した。

一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、記事に付してある漢字のルビは削除し、明らかな誤植は訂正した。

一、記事は掲載年月日順に配列したが、記事中に「当市」とあるのは名古屋市のことである。

一、平成二十四年十月発行の「愛知学院大学教養部紀要」第六十巻第二号に第一回を発表して以来、本回をもって明治新聞雑誌文庫に所蔵する号が終了するため最終回とした。

仏教演説雄弁家投票の募集〔明治33年5月7日　第六四二号〕

本社は、今回県下に於ける仏教演説の雄弁家の投票を募集し、之れを本紙に掲げて其の雄名を紹介せんとす。諸氏幸に本紙に掲ぐる投票紙を用ゐ、期日内に本社へ御送付被下度、其の得点は毎号本紙に掲載し、最高点者には相当の賞品を呈す。

仏教演説雄弁家投票得点

去三日迄の投票数

拾票以上の人名左の如し

岩佐大道
近藤疎賢
讃岐貫我
萩倉耕造
水野道秀
早川見竜
広間隆円
松本愛鴬

五票以上の人名左の如し

横井英光
吉水徳成
鶴見渕蔵
鈴木法真

三票以上の人名左の如し

大津町　太田元遵
本重町　山田正道
袋　町　宮本熊楠
水野雷幢
袋　町　天野顕意

壱票以上の人名左の如し

ヒハシマ　伊藤豊次郎
スカハラ　古沢九市郎
桑名町　大柿　仲
榎　町　早瀬了源
江尻深海
ヒハシマ　伊藤六郎
ナカシマ　水野錠太郎
木挽町　四谷伊八
本重町　黒部尭善
桑名町　谷　卯三郎
前　津　佐々木賢淳
ヒハシマ　松野八三郎
ヒハシマ　高木悦二郎
車　町　横井良慶
矢　場　岡田瑞穂
小市場町　水野元二郎

以上の明細得点は、次号より掲ぐ。

仏骨奉迎に付、大日本帝国愛国護法の士に禀告す。（明治33年5月7日　第六四二号）

（三十三年二月）

在暹羅盤谷勅願所　遠藤竜眠

凡物の隆盛を謀らんと欲せば、協同一致に依らざる可らず。而して協同一致の本は合意合働にあり。換言すれば、異体同心協力分路是なり。此事や発し難くして、守り難きは往古来今識者の共に難関とする所なり。我国は十三宗三十一派四十一人の管長、三千七十九万四千八百九十七人の信徒を有し、南北を通じ仏教中進歩の点、勢力の点、都てに於て第一に位する事は自も許し、他も亦認識する所なり。既に此名ありとすれば、其実無かる可からず。名は実の賓たり、実無くして名のみ存するの理あらんや。実とは何ぞや。曰く南北五億の仏徒を通じ打て一団と為し、脈絡相通じ緩急相助け、共に共に進んでは法雨を開拓し、仏種子を植ゑ、止つては甘露微妙の法雨を降らし、退ては法城の堅固を守り、駸々乎として止むなくんば、遂には五大洲を通じて我法味に飽満せしむるの時あらん。

是れ大聖釈尊の本懐にして仏祖砕身し玉ふ所、法乳に慈恩に浴するもの奈何ぞ。是を不問に付すべけんや。夫れ我日本帝国の昨今は、日本の日本にあらずして世界の日本、東洋の盟主たり。然らば我徒は日本の仏徒にあらずして、世界の仏徒南北仏徒の盟主たらざる可らず。既に任重く事大なり。豈内地の事にのみ齷齪とする時ならんや。内地の経営と共に海外異邦の地に向て精神界の同盟軍を起し、外教徒の邦域に進入し作戦線を施設せざるべからず。天なる哉命なる哉、茲に一大快事こそ生じたり。何ぞや曰く仏骨奉迎の件是なり。

抑も当仏骨は、西暦千八百九十七年英人ピツプなる者カピラパストを距る二三哩ピプチの地にて発見せり。嘗てピツプ思へらく、此地は釈尊の遺骨を奉葬せるが故に、必ずや古代の器物等あるべきを信じ、其古塔を穿つこと廿尺余に及べり。果せる哉一大石窟あり。其内より遺骨及宝石等数種を出す。其内水晶に文字を彫刻せるものあり。是をドクトルホイートなる人の手に依て翻訳せらる。曰く仏滅後、その遺族に仏の遺骨を分与せらる云々の事明記せり。是に依つてピツプは、此の如き古代の宝物を私宝と為すを惜み、都て英政府へ奉納し、且上奏して曰く。是を四分と為し、一分は印度カルカツタの博物館に納め、一分は英政府へ納め、一分は発拓者へ分与せられ、而して仏骨に属する部分は当時仏教国たる暹羅王国へ送呈せられ度き旨を以てす。英政府は同人の希望に一任す。是に依て昨年五月、暹羅政府は勅使を遠く印度に派して奉迎し、前後三十余日の大祭を執行し、王国の道俗千里を遠しとせずして盤谷府に来集す。当時の景況は、嘗て我同胞に報ぜしを以て、今茲に略す。本年一月緬甸錫蘭の仏徒道俗三十余人来暹し、仏骨の分与を受け在留二十余日にして帰途に登れり。

茲に於て我日本公使稲垣満次郎氏は、暹国皇帝に上奏して曰く、我日本帝国は仏教渡来後、茲に千有余年上は天皇より下庶人に至るまで仏陀大悲の慈恩に薫習せざるなく、其教義発達の点に至り

ては南北仏教中一大高位にあるや、世界各国の許す所にして上下一致同奉の仏教国たるに依り、冀くは同仏教国の好を以て分与あらば、我同胞の大幸、何ぞ是に過ぎんと奏問数回、遂に今回王命を以て分与の確報を得たり。是偏に公使の周旋多きに依ると雖も、亦我神州の国威と我仏教界の実力偉大なるの然らしむる所たるや明なり。

然らば我日本仏教徒の任や重く、実や大なる事は増々明なり。暹羅皇帝の勅命は日本仏教一部に分与するにあらずして、其仏教全般に分与せらるゝものなるが故に、日本仏教者は一大協力し、宗の内外を問はず、各其信徒を誘ひ最も偉大なる奉迎式を挙げざる可らず。此事や前夜来述ぶる所の南北仏教合同一団の導火線にして、世界仏教徒同盟の嚆矢たるべし。翻て社界の大勢を察するに、協和同盟の声は日に新たに従て一国の政党なるものも、小党分裂の時代は去て一大政党と変じ、其他新聞に雑誌に然らずるはなし。世運の流潮既に然り。我徒亦当時の面目に安住して可ならんや。

又我国仏教徒は、暹羅王室より幾多の厚意を受けつゝあり。初めには暹羅の一大蔵経を我国各宗本山に奉納せらる。其後二三の僧侶、此地に止まるあり。今又仏骨の分与を受くる事を得。此の厚意に対して我日本仏教徒は、大に酬ゐざるを得ざる義務を有せり。特に今回の如きは、南北仏教徒中最第一位に在りと嘗て自負せるに愧ぢざるの実を挙げざる可らず。将来人智の発達と共に各自分業を云々し、或は錫蘭に入り、或はサンスクリットを学習するもの、或は暹羅に来りパリーを学ぶもの年を追うて増々多からん。或は更に印度暹羅の仏徒にして日本に至り、日本仏教の如何を研究するものも生ぜん。是将来の想像にあらずして、現今其緒に付きつゝあり。

何れの点よりするも、今回の件は彼我同盟の第一着歩として逸すべからざる好機会たり。此の如き機会を根底と為し、将来暹羅を南北仏教の中央政府と為し、一方には緬甸錫蘭に入り、一方にはカンボヂヤ、安南、老過、西蔵、カシユミル、フータン、クシヒムより更に転じて南方支那の一帯に及び、北方は日本を本部として蒙古、朝鮮より支那本部に入り気脈相通じ、朝にはヒマラヤの山嶺に雲を起し、夕には蒙古の沙漠に雨を降すに至らば、豈一大快事ならずや。不肖遠藤竜眠謹で大日本帝国護法の士に禀告す。

●釈尊御遺形奉迎協議案

第一項　帝国仏教各宗派は、奉迎使七員を選挙し暹羅国へ派遣せしむる事。但し宗教は真言、臨済、曹洞、浄土、日蓮、本願寺派、大谷派の七宗派より各一員を選出し、出発日時は奉迎使協議の上之を定む。

第二項　奉迎使は、互選を以て正使一員を置くことを得。

第三項　各宗派は暹羅王陛下、同国外務大臣、稲垣公使に宛管長連署の書面を寄贈し、兼て奉迎使に関する信任状を呈すべき事。

第四項　各宗派は暹羅王室及其他に物品を贈呈する事、但物品の価格は合て金壱千円を程度とし、物品の撰択は奉迎使の協定に

一任すべし。

第五項　各宗派は其宗派毎に奉迎委員一員を選定し奉迎に関する事件を取扱はしむべき事、但選定委員の姓名住所等は本日より五日以内に通知せられたし。

第六項　釈尊御尊形仮奉安所及奉迎事務所を設置する事。但京都市下京区妙法院前町妙法院とす。

第七項　奉迎事務所に関する費用は奉迎委員に於て之を議定すべき事。

前項の費用は一時借入金を以て之を支弁し、償却方法は別途に之を定むべし。

第八項　奉迎使派遣の費用予算を定むること左の如し。

一金壱万円　　奉迎使派遣費

内金千円　　奉呈物品購入費

金七千円　　奉迎使往復費

金弐千円　　奉迎使予備費

以上費目は、奉迎使に推薦せられたる宗派にて之を協議し一時立替ふべし。

第九項　御遺形仏事式典は大略左記の如し。其法要の施行方法は奉迎委員に於て之を協議すべき事。

一上陸会　　長崎に於て之を行ふ。

一奉迎会　　京都に於て之を行ふ。

一仮安置会　同上

一拝迎会　　沿道各所に於て之を行ふ。

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（九・完）

一拝瞻会　　仮安置の後期日を定め之を行ふ。

第十項　奉迎委員は御遺形奉安に付、左記各項の事業計画を為し、宗派会議に提出し決定すべき事。

一塗廟建設の件

一同上建設地撰定の件

一右費に関する件

第十一項　奉迎使に推薦したる各宗派に対しては、当会より代表者を以て之れが請願を為すべき事。

〇特別協議案

一釈尊御遺形を奉迎し及び之を奉安し、日本仏教者に於て永遠護持し奉らんが為め帝国仏教会を設立し、同会組織方法等は之を各宗派管長会に提出し議決を求むべし。

妙法院の委員会〔明治33年5月7日　第六四二号〕

京都妙法院内に仮設したる仏骨奉迎事務所にては、去る三十日午後一時より大谷派土屋観山、本派名和渕海、真言宗林栄運、時宗河野良心、臨済派稲葉元厚の各氏集会し、仏骨奉迎事務員の事及暹羅王への献上品の事等を議したる由。又同日まで届出でたる各宗奉迎委員は大谷派土屋観山、永源寺派伊藤宗富、建仁寺派後藤文震、融通念仏宗黒田覚州、興正寺派三原俊栄、時宗河野良心、東福寺派平住幽谷、西山派青井俊法、天台宗薗光轍、寺門派河村暹尊、東大寺派平岡宥海、妙心寺派後藤禅提、曹洞宗有沢香庵の数氏にして、更に三十日まで届け出たる分にして、未だ開緘せざ

るは法相、臨済、鎌倉建長寺、日蓮宗派、相国寺派、黄檗派等なりと云ふ。

浄土宗西山派東山法主猊下の御巡化〔明治33年5月7日　第六四二号〕

猊下には、去る三月四日御発程、愛知県名古屋西光院に於て四五両日国師の大遠忌を六日より一周間授戒会を修行せらる。初め猊下の停車場に着せらるゝや早天より待ち構へる数百の奉迎者（名古屋熱田各寺院并に各寺且方惣代信徒等　同場の内外に雲集し歓喜声恰も涌が如くに思はれたり。猊下は先づ駅長室にて御休憩の上随行員根来融堂、仝円明両師、侍者阿部純道、石原篤瑞等を随へさせられ、西光院住職の先導にて奉迎者に囲繞せられ玉ひ、和気藹々の裏に数百の腕車を駆りて無事西光院へ御着ありしは、恰も午後二時を過ぐる頃にて、其盛挙言外なりし。戒会中随喜大衆日々凡て五十名余、授者通計四百名を下らず。猊下の御懇切なる御教示には、何れも信心を増上し、特に十二日満会御訣別の時抔は満座御別をおしみ、思はず随喜の涙を催せし等、非常の法益ありしと。続て十二日午後三時、西光院御発程熱田蔵福寺へ向はせらる。奉送奉迎一層の盛を増し、時に警官の労を煩はせし程なりしが無事御到着。当日同寺入仏式、続て授戒会一周間、終りに国師大遠忌を修行あらせらる。戒会授者凡て三百有余名、同地近来の盛会なりし。而して猊下は、都合により一と先づ御帰山の上、本月四日より愛知県愛知郡高根村円福寺に於て一周日間授戒会御挙行あり。是又盛会にて授者三百余名に及び、山間の老若は希有の法沢に塔し、弘願一乗の妙海に遊びしと。

仏骨奉迎請雑聞〔明治33年5月7日　第六四二号〕

妙心寺会議に於て仏骨迎請の決議を為したる以来、取り敢えず京都大仏妙法院に仏骨奉迎事務所を設け、去る廿一日より廿五日迄の間に各宗派より一人づゝ即ち四十二名の奉迎委員を撰定の上右事務所に届出づる筈となしたるが、期日中届出の到達せしは真宗高田派、仏光寺派、時宗、浄土宗、天台宗等にして、臨済五山（建仁、天竜、東福、南禅、相国）は妙心寺派に一任すべしと云ふ。○若し妙心寺派に一任せば、前田誠節師之に当るべく、而して真言宗は釈光然、曹洞宗は弘津説三、日蓮宗は旭日苗、西本願寺派は藤島了穏等の諸師ならんと云ふ。○右四十二名は揃つて渡暹するに非ずして、更らに其の中より十名の委員を互選する筈なりと。而して此の互選は三十日頃執行せらるべき予定なりしも、恐くは未だ其の運びに達せざるべしと説くものあり。

名古屋別院法要〔明治33年5月7日　第六四二号〕

大谷派名古屋別院に於ては、去五日より来る九日まで前門主厳如上人の七回忌并に同別院中興一如上人の二百年忌法要を営むに付き、法主大谷光瑩師今七日午前七時五十六分七条発列車にて名古屋に参向し、九日帰山する由。随行は小林参務堅田会計局長、藤林録事、浅野、松尾、山田、島、小林の各家従なりと。

高楠博士の仏骨談〔明治33年5月7日　第六四二号〕

目下我国仏教徒間の一問題となり居る仏骨に関して、東京文科大学言語学教授、文学博士高楠順次郎氏の考証談を聞くに左の如し。

仏教の開祖たる釈迦牟尼の入滅に関しては、従来東洋の仏教者間に於ては種々年代上の異説あれども、輓近欧米に於ける言語学者及び比較宗教学者等の史的考証によれば、耶蘇紀元前第五世紀を以て最も正確なる年代と認定せり。偖て釈尊が印度倶尸那迦羅なる沙羅双樹の林間に於て入滅するや、当時の仏教徒は孰れも教祖追慕の哀情に沈みし中にも、摩掲陀国の阿闍世王、毘沙離国「リツチヤビ」種族の律昌王、迦毘羅城の釈迦王、阿羅割波のプリヤ王、羅摩邑の拘利耶王、吠牽奴邑の波羅門、波々邑の摩羅王、倶尸那迦羅の摩羅王の八人は、各信教上の由緒を具して釈尊遺骨の分配を請求に及びしが、其分配の方法に付き議論定まらざりしかば、遂に婆羅門の徒盧那なるものに命じて、遺骨を右の八人に対し平等に分配せしめたり。而して彼ら八人は其遺骨を恭しく受取りて各其地方に持ち帰り、壮麗なる塔を建てゝ之を納め、月を定めて盛大なる祭礼供養を営みたり。然るに徒盧那は、遺骨分配の役目に当りしとは云へ、遺骨は既に彼の八人に分与を終りしにより、止むを得ず分配の時遺骨を納めたる空甕を乞ひ持ち帰へり、其時畢鉢羅邑の孔雀王と云へる人遅れて会せしも、遺骨は既に去りて跡なかりしかば、唯火葬後に残りし灰と炭とを納めて帰り、同く塔を建てゝ厚く供養したりと云ふ。故に右の如く釈尊の遺骨及び遺物は十箇所に分れたり。以上の史的事実は巴里語の大涅槃経の結末に出で、尚ほ漢訳の経典にては仏所行讃経、有部雑律等にも散見せり。

其後二百余年を経て、彼の印度を一統して帝国政治を施し、大に博愛主義を唱道して仏教の伝播に尽したる阿育王の時代に当り、同王は右十箇所の仏骨塔を発掘し、再び諸州に新塔を建てゝ之を祭らしめたり。是れ非常なる仏骨塔の変革なりしが、其中一二の塔は堅牢にして、遂に発掘する能はざりしかば、当時の伝説にては、地下竜王の守護なりとて一層尊崇するに至りしと云ふ。

一昨年中、印度ビプラーフパより一箇の甕を発掘せしが、此甕に伴ひたる刻文は僅に二行許のものなれども、刻文の意味は此甕中の物体は正に仏の遺骨に相違なしとあり、昨年に至り右甕中の遺骨を三分して、其一部は英国倫敦の博物館に納め、其一部をカルカツタの博物館に蔵め、其一部は世界唯一の仏教王たる暹羅国王に贈与したり。此暹羅国王の受領せしものこそ、曩に稲垣公使の斡旋により我国仏教徒へ分与するの運びとなり、現今仏界の大事件となりしものなり。

仏骨なるものは前陳の史的事実に依り、既に二千四百余年の歳月を経過したるものなれば、その真偽を云々するは寧ろ吾人の領分外なりと思ふ。我国仏教徒の仏骨奉迎が果して仏教上に利益を与ふるや否やは別問題なれども、従来仏教者が史的研究を粗略にする余り、斯の如き明白なる史的事実あるにも係らず、世上の非難に対して一言も論明する能はざるは仏界学術の衰頽せるを証する

ものにして歎ずるの外なし。今回は我が日本仏教の代表者として、真宗大谷派新法主及び南条博士が仏骨奉迎使として暹羅に向ふ由なれば、之によりて我仏教徒が聊なりとも暹羅、日本間の交通を親密にし、進みて東洋仏教徒の聯合を図り、南北仏教協同研究の好機を与へ新に世界宗教研究上は貢献する所あらんこと切に希望に堪へざるなり。

広告（明治33年5月7日　第六四二号）

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品
　受持講師　水野道秀師

永平家訓
　受持講師　早川見竜師

会場は宝町　禅芳寺

特別広告（明治33年5月14日　第六四三号）

賜性海慈船大禅師御親臨
宗祖承陽大師
六百五十回忌　報恩授戒会
従五月廿三日
仝月廿九日迄　名古屋矢場町　永昌院

特別広告（明治33年5月14日　第六四三号）

本月十六日午後一時より説教、同十七日午後一時より
西山国師御遠忌修行
同十八日午前十時「御とき」
説教師　美濃専養寺　森　博文殿
日置法然寺

特別広告（明治33年5月14日　第六四三号）

仏教演説雄弁家投票

得点数　（五月十日調）

三十点　萩倉耕造
廿九点　讃岐貫我
廿八点　近藤疎賢
十九点　水野道秀
十二点　岩佐大道
十二点　早川見竜
十点　広間隆円
十点　松本愛鴬

九点以下の人名左の如し。

太田元遵
山田祖学
片岡秀国
杉山大運
飯尾弁霊

横井英光
吉水徳成
鶴見渕蔵
鈴木得真
山田正道
宮本熊楠
佐々木賢淳
正木真月
鈴木敬嶽
大島慈敬
柳原松月
野々部至游
水主町 長円寺住職
水野雷幢
天野顕意
伊藤豊次郎
古沢九市郎
大柿仲
早瀬了源
江尻深海
伊藤六郎
水野錠太郎
四谷伊八

黒部尭善
谷卯三郎
松野八三郎
高木悦二郎
横井宜慶
岡田瑞穂
水野元二郎
木村循道
水谷顕曜
一柳智成
伊東洋二郎

仏骨奉迎使（明治33年5月14日　第六四三号）

各宗派の仏骨奉迎使は七名の筈なりしが、浄土宗にては右奉迎に対し、各宗派と提挈を断んとの議ある由にて、目下委員中にて交渉中なるが、目下既に定まり居るは大谷派新門主大谷光演師を始め臨済宗前田誠節、本願寺派藤島了穏、曹洞宗日置黙仙の諸師なりと。尚ほ真言宗は奉迎使を出さるゝことに決したる由。

妙法院会議（明治33年5月14日　第六四三号）

仏骨奉迎各宗委員会は、七日午前九時大仏妙法院内に開きたり。来会委員廿七名にして、各宗派より東宮御慶事献上に付てに、小林栄運師東上委員となり献品を奉じ東上せしが、曹洞宗管長畔上

楳仙師七日参内し献上を了りし旨を報告し、夫より献上品買入費賦課の協議を為したるに、宗派割分十の三、寺数割十分の四、実力割十分の三に決し、夫より常任委員十名の撰挙を行ひしに、当日日蓮宗不参の為め九名を撰挙することとなり。左の如く当撰したり。

有沢香庵（曹洞宗）薗光轍（天台宗）青井俊法（浄土宗西山派）三原俊栄（興正派）小林栄運（真言宗）土屋観山（大谷派）名和渕海（本願寺派）後藤禅提（臨済宗）河野良心（時宗）

尚ほ仏骨奉迎に関する経費は、当分借入金一万円とし、予入金十万円を限度とすることに決し、午後四時三十分散会せり。

前田学氏（明治33年5月14日　第六四三号）

県下海東郡万須田村速念寺住職たる同氏には、今回播劦姫路別院内教務所の管事に任ぜられ稟授二級を授せられたり。

名古屋仏教徒の奉祝（明治33年5月14日　第六四三号）

去る十日の御慶事に付き、当市の仏教徒には予記の如く、種々の計画を為して奉祝の意を表されしが、殊に仏教倶楽部の発企にて貧民救助の大慈善事業を行はれたり。今其の大要を記さば、初め奉祝の式場其の他も名古屋奉祝会の式場に於てせんとせしも、種々の事情ありて遂に若宮八幡社境内と変更し同処に於て、先づ正面の仮座に　皇太子并に妃殿下の御肖像を奉安し、時限に至りて各員参拝、次に当日施米を受けんとて集り来りたる数千の貧民をして参拝せしめ、先づ当日御慶事の次第より国民の義務などの演説あり。各々独立自営の道を立てざる可らざる事由及び仏教慈善の主義より因果応報の道理を示し、一名に付五合宛の白米を施与せり。当日は同処に祝酒を供へ置き、礼装ある人には何人にても酌むは、随意余興に投げ餅あり午後五時頃閉会されたり。其他各宗寺院は、予記の如く黎明に百一点の梵鐘を鳴らし、正午より七寺の各宗集議所にては各寺院集合奉祝の祈祷ありたり。其他市内の各寺院は夫々奉祝の式を挙げられし者多し。

特別広告（明治33年5月14日　第六四三号）

皇太子殿下御慶事に際し、恭しく奉賀式を挙げ序て、貧民施米の挙を賛し御寄付相成候段難有奉感謝候、左に其収支清算報告仕候也。

明治三十三年
五月十一日　愛知仏教倶楽部

一白米拾参石四斗六升　施与米
内訳｛白米拾石四斗六升　寄付米
　　｛米　白　参　石　買入米
一金八拾四円弐拾銭　寄付金
　金参拾九円　米買入
内訳金四拾四円〇五銭　投餅、公衆、御酒、席料、日雇、其他雑費種々
決算過金壱円拾五銭　育児院寄付

以　上

施米寄付人名

白米五石　発起者中
米壱石　古物会社
同　五斗　遊　廓
同　壱俵　牧田茂兵衛
同　同　山内文助
同　同　野尻　理右衛門
同　同　伊藤栄二郎
同　同　森本善七
同　同　滝　兵右衛門
同　壱斗　中野徳三郎
同　同　角田半兵衛
同　同　渡辺庄太郎
同　同　伊藤源助
同　同　加藤半三郎
同　同　各宗集議所
同　同　水谷房次郎
同　同　加藤信次郎
同参斗壱升　蓮友少年会
同壱斗五升　日本仏教青年会
同五升　伊藤彦七
金参円也　春日井丈右衛門

金弐円也　神　亀　楼
同　伊勢町某
同　伊藤清助
同　小島彦三郎
同　河原彦兵衛
同　関戸守彦
同　祖父江□兵衛
同　伊藤治郎左衛門
金壱円五十銭　森田平太郎
金壱円　菅井　丈右衛門
同　長谷川武助
同　加藤新兵衛
同　浅野儀助
同　小林甚助
同　坂倉嘉十郎
同　山田祖学
同　金剛得全
同　松浦祖英
同　陽　泉　寺
同　市川卓斎
同　水野道秀
同　早川見竜
同　吉川義道

同　羽柴達玄
同　河村道鱗
同　宝生院
同　伊藤直吉
同　滝定助
同　林文左衛門
同　某
同　鈴木惣兵衛
同　伊藤六郎
同　横井半三郎
同　水谷悦次郎
同　林市兵衛
同　川瀬代助
同　鬼頭平八
同　吹原九郎三郎
同　伊藤由太郎
同　近藤疎賢
同　服部与右衛門
同　浅野光信
同　三輪喜兵衛
同　堀部勝四郎
同　後藤増平
同　安藤清次郎

同　八木平兵衛
同　近藤太兵衛
同　慈教青年会
同　西部青年会
同　愛知吉祥講
金八円弐十銭　吉祥講有志十五名
金七十銭　永昌院会中
金壱円七十銭　北部仏教青年会
金壱円拾五銭　日本仏教青年会
金五十銭　石川治竜
同　伊藤貫中
同　前田鉄柱
同　高木啓法
同　橘孝範
同　北部仏教青年会有志五名
同　武山勘七
同　太田元遵
同　渡辺円左衛門
同　三輪惣右衛門
同　矢田吉助
同　井口商会支店
金弐十銭　渡辺佐助
同　中村源蔵

同　渡辺博剛
同　山田平次郎
金十銭　村井治兵衛
金五銭　大釙松吉

以上

愛知仏教倶楽部

西山国師忌〔明治33年5月14日　第六四三号〕

別項広告の如く、当市日置法然寺に於ては、来る十七日より修行せらるゝに付き、説教師として有名なる美濃の森博文氏が来錫せらる。

永平寺貫主の御来名〔明治33年5月14日　第六四三号〕

同禅師には、去る廿三日より当市矢場の永昌院の授戒親修の為に来名さるゝが、同授戒は前年よりの経画にて戒弟の申込も非常に多き由なれば、定めて盛大なる戒会あるべし。

広告〔明治33年5月14日　第六四三号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師　水野道秀師

永平家訓

受持講師　早川見竜師

会場は宝町　禅芳寺

仏教演説弁士投票に就て〔明治33年5月21日　第六四四号〕

来る廿五日は、愈々其の〆切なる処、去る十七日迄得点左の如し。而して該得点の結果、前号よりは意外なる高点者を生ずる等、総じて去る十五日以後投票は劇甚を加ふるに至れり。来る廿七日の本紙には、殊に得点人名を別表付録刷とし、弁士招聘家参考の為に住所居士号等を記入すべし故に、本紙に登載される弁士にして居士号を有せらるゝ方は、来る廿五日迄に御一報を乞ふ。京都其他々府県下の弁士を投票されたる者あり。惣て無効とす。一枚の投票紙に同一人名のみを五重に記したるあり。是亦無効とす。

仏教演説雄弁家投票

得点数	（五月十七日調）
五十九点	近藤疎賢
五十一点	水野道秀
四十点	早川見竜
四十点	萩倉耕造
三十六点	松本愛鷲
三十四点	讃岐貫我
二十四点	吉水徳成
二十四点	水谷顕曜

二十二点　鶴見渕蔵
二十一点　宮本熊楠
十九点　片岡秀国
十四点　広間隆円
十四点　飯尾弁重
十二点　鈴木敬嶽
十一点　大柿　仲
十点　岩佐大道
十点　黙菴居士
十点　一柳智成
十点　丹羽円城

九点以下の人名左の如し。

太田元遵
山田祖学
杉山大運
横井英光
鈴木得真
山田正道
佐々木賢淳
正木真月
大島慈敬
柳原松月
野々部至游

水野雷幢
天野顕意
伊藤豊次郎
古沢九市郎
早瀬了源
伊藤六郎
水野錠太郎
黒部尭善
高木悦二郎
横井宣慶
岡田瑞穂
木村循道
伊東洋二郎
近藤得昇
無仏居士
天然居士
無言居士
伊藤真瑞
鬼頭伏竜
佐野忍嶺
任天居士
佐藤千代治郎
吉田達明

石田寅方
加藤梅仙
中村甑宗
久田竜峰
橘　成典
福田真成
麻蒔舌渓
小寺黙音
光弘□□
栗木確伝
太田鉄吉
宮崎智全
武田芳淳
山田祐山
井本□誠
清水梁山
田中智覚
田中進順
吉谷覚寿
小沢弁応
北折源六
太田如意
住田智見

木村暉太郎
成瀬賢秀
竜　桑巓
小泉徳兵衛
鈴木法真
岡野覚心
佐野覚範
岩井智海
天野若円
太田長造
太田現順
山田恵博
有元一鱗
野村甚三郎
小笠原吉二郎
小塚良蔵
栗本松寿
山田教学
神谷大周
林　法純
玉腰円了
丹羽雨諦
武田泰道

本　田　善　明

仏骨奉迎使出発期〔明治33年5月21日　第六四四号〕

去八日を以て、大仏妙法院に奉迎事務所を開設し、諸般の準備に着手せしが、去十六日は午後三時より京坂各新聞社員通信社員を祇園中村楼に招待して、奉迎使大谷光演代理石川馨、前田誠節、藤島了穏、日置黙仙の四師及び奉迎事務所常設委員出席し、前田氏より奉迎の由来及び今後の計画等詳細談話して賛同を求め、終て晩餐の饗応ありたり、持て奉迎使として渡航すべきは大谷光演、前田誠節、藤島了穏、日置黙仙の四師と確定し、其他随行員を合して一行十五名は愈々本月二十三日正午、神戸港出帆の博多丸に便乗出発すべき筈にて神戸波止場より小蒸汽船にて博多丸へ乗込み、正午十二時解纜の予定なりと。

奉迎使出発期日〔明治33年5月21日　第六四四号〕

仏骨奉迎使は、弥よ大谷派新門主大谷光演師を正使とし、本派本願寺藤島了穏、臨済宗前田誠節、曹洞宗日置黙仙、三師副使として、来廿二日午後一時二十分七条発列車にて一行神戸に到り、常盤「ホテル」に一泊、廿三日同港出帆の博多丸に搭し出発することとなりたり。右につき新門主随行長は南条博士を初め石川馨（台湾寺務所長）大草恵実（録事）松見得聞（学師）藤岡勝二（文学士）高□吉三郎（医学士）浅井恵定（承事）飼田辰一（家従）尾崎英吉（同）下間頼信（同）山本安太郎（通訳）の十一名なる由。右に付き昨日午前十時より妙法院事務所に於て、右の一行の為めに送別の宴を開き、席上村田事務総理の送別の辞、前田副使の答辞ありて午後一時散会せり。尚ほ出発当日は、京都各本山より総代を神戸まで見送らしむること京都、大阪、神戸、各駅付近の各宗派は総代を其停車場に出して歓迎するよし。又大谷派保信会、本山調進方は一昨夜臨時協議会を開き、当日七条停車場前に大なる国旗と仏旗とを交叉すること、神戸まで会員有志総代出発のこと、烏丸通七条以南停車場までに祝灯を掲ぐる事等を決議したりと。因に記す、奉迎帰朝の期限は二ケ月の予定にて、仏骨を仮安置する場所は妙法院宸殿なりといふ。

広告〔明治33年5月21日　第六四四号〕

勅特賜性海慈船大禅師御親臨
宗祖承陽大師　報恩授戒会
六百五十回忌
従五月廿三日　名古屋
仝月廿九日迄　矢場町　永昌院

仏骨奉迎使の発途期〔明治33年5月21日　第六四四号〕

釈尊遺形奉迎使大谷光演師を始め前田誠節、藤島了穏、日置黙仙の四氏は十五名の随行員と共に、愈よ来る二十二日午後一時二十四分七条発汽車にて出発し、同三時五十分三宮に着、諏訪山常盤に一泊し、翌二十三日午前十時税関波止場より小蒸汽船にて博多丸に乗込み、正午同港を解纜することに決定せり。右に付き各宗

委員、其他重なる檀信徒等数百名は神戸まで見送り、又七条三宮両駅発着の節は煙火を打揚ぐる由。

永平貫首（明治33年5月21日　第六四四号）

森田悟由禅師備中地方の戒会を畢りて愛知郡瑞穂村長福寺の授戒会へ臨場の為め、去十六日午後二時四十二分熱田停車場に着され、その出迎人は長福寺檀徒及吉祥講員等二百余名、停車場最寄にて数十発の煙火を打揚るなど中々の盛況なりき、同禅師は本月中は長福寺及当市矢場町の永昌院等に滞錫し、来月一日加賀の天徳院に赴かるゝ由。

名古屋地方の新聞人気（明治33年5月21日　第六四四号）

人気は仏教に非ざれば取り難しとてには、続々発行せらるゝ新聞紙は何れも仏教主義々々々の触出なり。殊更にてもあるまじけれども、真言に片寄りたる一奇事あり。東海日々新聞を題字は雲照律師……名古屋日報の題字は弘法大師の墨蹟中より寄せ字したる者、又近来は萩倉耕造君が頻りと五円株の株主募集中なれば、是亦遠からず発行せらるゝ事なるべし。田島任天居士の大陽発行の計画といひ、兎に角名古屋地方の新聞人気は仏教を以て高められつゝあるなり。

説教（明治33年5月21日　第六四四号）

来る廿一日より廿五日まで枇杷島町西源寺にて、同廿五日より三十日まで菅原町浄教寺に於て、美濃国本願寺派の司教多田専浄師出席説教を開筵せらる。

江尻深誨氏の帰朝（明治33年5月21日　第六四四号）

同氏は支那を漫遊し天台山に登られしが、今回帰朝されしを以て天台宗の有志家には、来る廿四日当市福泉寺に慰労の茶話会を催さるゝ由。因に同氏は、天台山より種々なる仏像等を持ち帰られしを同日拝観せしめらるゝ由。

名古屋市七ツ寺の一切経（明治33年5月21日　第六四四号）

名古屋市門前町七ツ寺の一切経の来歴を記せんに、抑も七ツ寺は往昔尾張国中島郡萱津原にありて人皇四十五代聖武天皇の天平三年に行基菩薩の開基に係り、その初め正覚院と名けられしがコハ、行基自から八尺五寸の阿弥陀仏像と三尺五寸の正観音大勢至の両大士像と外に、六尺五寸の多聞天持国天像等を彫刻し、開基の時之を勧請して総称せるによるものなるが、天応元年（光仁天皇の朝）に至り、河内国誉田の人河内権守紀是広秋田城介となりて任国に赴きしに、都に残せし妻女男児を生み光麿と名け、其子七歳になりし時、父を慕ひて出羽に下らんとし、途次尾張萱津里に至り病に罹りて死亡せり。折ふし父是広任満ちて京に帰らんとて萱津に至り、我児光麿の病死せるに逢ひ、悲歎の余り正覚院に至り、住僧智光に光麿が片時の蘇生を祈り給はんことを請ひしかば、智光憐みて之を容れ、薬師の尊像を壇上に安置し反魂香を焚

き修法せしに、香の煙児の面を掩ふよと見るまに忽ち蘇生し、互に親子の名乗りをなし、やがて光麿は元の如く死亡せり。斯くて是広は亡児を同院に葬り追福のため七区の伽藍堂塔を建立し、是より七個の堂宇に因み、改めて七ツ寺と称するに至れり。其後大地震ありて件の伽藍堂塔悉く壊倒したるが、六条天皇の御宇。尾張権守大中臣紀安長といふ人豊後守親実に嫁ぎたる愛女の死亡を悲み、その冥福を祈るため親実とはかりて七個の伽藍堂塔を再建して稲園山長福寺と改称し、十二の僧坊をも興し、且能筆の人を広く天下に求め、高倉天皇の安元元年正月より治承二年八月まで前後四年有余の長年月を閲して五千余巻の大蔵経を写し、之を同寺に奉納したり。是れぞ即ち今度国宝となりし一切経なり。然るに其後、天正十九年に至り、鬼頭孫左衛門なる人秀吉の命を奉じて同寺を萱津原より清洲城畔に移せしが、家康の代に当り清洲城を名古屋に移すや、長福寺も亦名古屋に移され、今の門前町に寺領を賜はり、徳川家の弁費によりて伽藍堂塔悉く此処に建立せられ以て、今日に至れるなり。同寺は斯くも再三移転に逢ひ、且其間に水火の災禍を蒙りし事ありたれば、一切経も自然散逸して欠本を生じ、殊に維新の際其保護を怠り、近年まで境内三層塔の内に委棄せられて風雨塵埃の汚涜する所となりしを心付きて、僅に之を取纏め堂内に納めしものなり。されば之を納めある唐櫃の如きも三十一個なりしが、委棄中一個は紛失して、今は三十個となり、巻数も五千三巻となりたりど、尚此唐櫃も写本時代の製作にかゝるものにして箱の上に布を貼り、其上部を漆塗とし文字仏像等を漆書しあれども保護完からざりしゆゑ、今は悉く剥落しあたら名筆の仏像も殆んど視るべからざるまでに至れり。

広告（明治33年5月21日　第六四四号）

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品　受持講師　水野道秀師

永平家訓　受持講師　早川見竜師

会場は宝町　禅芳寺

特別広告（明治33年5月28日　第六四五号）

耶蘇教徒不敬事件に付　大演説会

今廿八日午後一時より
仝　七時より　両会御園座に於て開会す。但し傍聴無料

会主　愛知仏教倶楽部

広告（明治33年5月28日　第六四五号）

仏教演説雄弁家投票

得点数

七百〇二点　近藤疎賢
六百卅四点　水野道秀
六百二十一点　松本愛鴬
六百十四点　萩倉耕造
六百〇九点　早川見竜
五百八十五点　讃岐貫我
五百七十四点　鶴見渕蔵
五百六十七点　岩佐大道
五百五十一点　吉水徳成
五百五十一点　水谷顕曜
五百六十七点　宮本熊楠
五百四十七点　黙菴居士
五百四十七点　片岡秀国
五百四十六点　大柿　仲
五百四十二点　鈴木敬嶽
五百三十七点　広間隆円
五百三十点　飯尾弁重
五百三点　一柳智成
五百二十七点　太田元遵
五百二十三点　丹羽円定
五百二十三点　水野益雄
五百二十一点　玉腰円了
五百二十一点　横井英光
五百十三点　野々部至游
五百十二点　山田祖学
五百十点　杉山大運
五百十点　佐々木賢淳
五百十点　武田泰道
五百十点　井本至誠
五百十点　黒部尭善
五百十点　木村循道

五百点以下の人名、左の如し。

鈴木得真
山田正道
正木真月
大島慈敬
柳原松月
水野雷幢
天野顕意
早瀬了源
伊藤六郎
水野錠太郎
高木悦二郎
横井宜慶
岡田瑞穂
伊東洋二郎

近藤得昇
無仏居士
天然居士
無言居士
伊藤真瑞
鬼頭伏竜
佐野忍嶺
任天居士
佐藤千代治郎
吉田達明
石田寅方
加藤海仙
中村甎宗
久田竜峰
橘　成典
福田真成
小寺黙音
光弘祐言
栗木碓伝
太田鉄吉
宮崎智全
武田芳淳
山田祐山

清水竜山
田中進順
小沢弁応
北折源六
太田如意
住田智見
木村暉太郎
成瀬賢秀
竜　桑巓
小泉徳兵衛
岡野覚心
佐野覚範
岩井智海
太田長造
山田恵博
有元一鱗
野村甚三郎
小笠原吉二郎
小塚良蔵
栗本松寿
山田教学
林　法純
丹羽霊諦

本田　善明
加藤　勝之助
木村　秀夫
伊勢　良量
平岩　親好
鬼頭　爰政
毛利　徹
加藤　宗全
吉田　直道
福井　天章
鈴木　宗円
平野　大仙
妙蓮寺　潮瑞
森　省三
小崎　義大
中野　一
吉田　泰
浅井　恒
長縄　保一
田中　□□
林　鎌太郎
長谷川　正道
水野　玄秀

八木　源十郎
服部　日大
藤井　長光
梅本　文立
木村　玉光
浅井　即心
吉田　仙次郎
坪井　諦堂
梅原　薫山
水谷　魁曜
藤井　大威
岡桐　梨潭
成瀬　日俊
左右田　秋満
加藤　浩
中西　玉竜
森　西舟
渡辺　孝造
横江　覚城
伊藤　覚典
城　静山
高梨　敬寛
高岡　徹宗

水谷　可定
小桜　秀機
若原　敬経
青木　　隆
藤田　鉽太郎
加藤　　亨
石川　譲念
青山　竜二郎
森山　蓮馨
吉田　勝市
水野　元二郎
橘　　秀円

仏骨奉迎使の出発（神戸電報廿二日）〔明治33年5月28日　第六四五号〕

昨日来、神諏訪山中常盤に投宿せる仏骨奉迎使大谷光演師の一行は、本日午前十時兵庫県庁より差立の馬車にて水上警察署の波止場に至り、全処より小蒸汽船にて博多丸に乗込たり。当日は見送人は約一万人にして、近きは大阪、京都、遠きは姫路岡山地方より隊を組みて来神し、海岸通りは一時通行出来ざる程の混雑なりき。

他派掛籍事件（妙心寺公報正法輪）〔明治33年5月28日　第六四五号〕

尾張国名古屋市本派一等地総見寺元副住職安田文達は、建長寺派に在籍中、本派総見寺副住職及之に相当する法階を請願し、之を稟承したること後日に至り発覚したるがことは、本派綱目を無視する行為なるを以て、法階は悉く取消し、推薦人も懲誡に付せらるべき筈なるも、本人及推薦人加藤宗俊、鈴木玄説の二人共、各自悔悟懺謝状を呈出したるを情状を酌量し、之が処分として同教区取締へ左の通り達せられたり。

第十五教区本派取締　鎌田知轍

該部内総見寺副住職安田文達、曩に法階稟承に際し、其推薦人加藤宗俊、鈴木玄説等は推薦に関し、疎漏の廉あることを反省し自ら懺謝状を呈したり。之に依り文達も亦自ら安んぜず懺謝状を具し、何分の処分を請へり。

抑も法階推薦の事たる宗監上、太だ甚大の責任を有するものなるを以て、推薦人等に対し何等処分を為すべきも、特別の詮議を以て当度限り、之れが警誡を宥恕したり、蓋推薦上疎漏し件は、畢竟推薦人の過失に止り、累を文達に及ぼす所以に非ずと雖も、手続に於て悉くさゝる所あれば従て、之れが訂正を為さゝる可らず。然れども文達に於ては安せざる故を以て、自らの推薦人に対し深く自損の途に就かざる可らざる至当の処置なりとす。

当職は文達に対し、其過去を問はず之を免恕す。宜しく徳義上

自損の実を挙げ、或期間に於て遠慮し謹慎を表すべきの至当なることを信ず。

前記の通、安田文達へ告達すべし。

右管長猊下の慈旨に依り相達候事

明治三十三年四月十二日

妙心寺派教務本所

第十五教区本派取締　鎌田知轍

該部内総見寺元副住職安田文達法階稟承に際し、推薦上に関し疎漏之廉有之、自然右推薦人加藤宗俊、鈴木玄説に対し、何等の警誡を加うべきも前記二名の者は、自反悔悟の末懺状を且し、兼て処分を請求せり。抑も推薦人は師印及其他に付事件を証明し、一々推薦したる本人の行履を保障すべき責任を有するものなるに拘らず、疎漏の事状あることを発見せられたるは、其当を失するの甚しきものと云はざる可らず。然れども自反悔悟し懺謝を呈する上は、警誡を加ふるに忍びざるを以て、当度限り之を宥恕す。宜　将来を慎み過を復たひせざれ。

前記の通、加藤宗俊、鈴木玄説へ告達すべし

奉迎使送別宴〔明治33年5月28日　第六四五号〕

仏骨奉迎正使大谷派本願寺新門主大谷光演師は、十九日午後三時より奉迎事務総理村田寂順を始め前田誠節、藤島了穏、日置黙仙二副使及□奉迎事務委員諸氏を根殻邸に招待し留別の宴を開き、席上村田寂順氏は左の詩三首を贈りしと。

送奉迎釈尊遺形各宗諸師渡暹

南台寂順

奉迎高里渡南洋。霊物東来是吉祥。預祝諸師回錫処。扶桑仏日更生光。

鉄輪截海乱□開。万里処□□壮哉。大聖似追東漸約。更分霊骨渡洋来。

暹王頒贈仏遺形。欣喜奉迎双樹霊。大白牛車容彼土。報恩須布一乗経。

同時に大谷派の大法主光瑩上人には、左の二詩を賦せられたり。

聖代自呈聖代祥　世尊遺蹟現西方　謝君万里迎霊骨　更見日東輝法光。

送誠節和尚了穏司教黙仙和尚為

世尊遺形奉迎赴暹羅国

明治庚子□　愚邱

西邦皇帝勅宜伝。使事任□爾勉栴。奇瑞時生皆差巧　霊趾今現亦方便。愍恩更治暹羅国。光益重加日域夫　休道海洋航路竜神泰護仏陀船。

嗣光演為仏奉骨迎正使赴干暹羅国賦而示

明治三十三年五月　愚丘

仏骨奉迎彙報〔明治33年5月28日　第六四五号〕

仏骨奉迎使は、弥よ去廿二日午後一時廿四分七条発列車にて出発することとなり、七条停車場に於て五十発、梅田停車場、神戸停

車場にて何れも五十発づゝ煙火を打揚ぐ。また一行出航の準備として、三原河野両委員□山書記長は、前日午後三時廿七分七条発列車にて神戸に到たれり。▲神戸旅館は中常磐とし、博多丸乗□には、奉迎使は馬車にて海岸に到るよし。▲一行は門司に二日、上海に二日、シンガポールに三日間滞在し、同地より便船に乗替へ暹羅国に到る筈。▲帰朝は七月下旬か遅くも八月上旬にて、暹羅国滞在は一週間か長くも十日間を過ぎざる予定にて、仏骨の神戸に着する砌りは各宗管長神戸まで奉迎のよし。▲奉迎使の携帯して暹羅国皇帝、其他へ献贈する品物は左の如し。

一金地芝山入花生　一　対

白斜子袋入茶色紐にて結び絹匣に納め、之を復柾樅の函に入る。

一平目蒔絵巻煙草函　一　個

白縮緬帛紗に包み黒柿の函に納め、之を復柾樅の函に入る。

一真美大観　甲乙二冊

紙本絹表二□桐文庫に納め、之を又柾樅の箱に入る。

又同国大臣僧正稲垣公使への贈品は左の如し。

一七□藤模様花生　一　対

一同古代模様花生　一　対

一古銅象嵌花立　一　対

一古金襴□□五条袈裟　一　肩

右袈裟包は縮緬紅白昼夜仕立箱は□桐外箱付。

一真美大観並製　五部甲乙十冊

●仏骨奉迎正使一行の出発　暹羅国へ渡航する仏骨奉迎正使たる大谷派本願寺新法主大谷光演氏をはじめ奉迎使前田誠節、藤島了穏、日置黙仙の諸師は、いよ〳〵廿二日京都を出発するにつき、大谷派本願寺にては事務所役員一同午前六時同寺事務所に参集し新法主見送りの準備をなし、広書院において新法主に謁して渡行を祝せり。また同寺用達商人の保信会有志者は、烏丸七条下る処に本山の徽章ある大旗を樹て、同寺地内各戸は悉く本山旗を掲げて共に祝意を表したるが、午前より各宗派の僧侶信徒及び学校職員生徒等は陸続として二条寺に参集し、奉迎事務所総理をはじめ常任委員各宗派委員等も皆前後して参集したり。かくて奉迎正使大谷光演氏は正午同寺の両堂に礼拝し、表玄関より馬車にて出門、南条随行長以下随行員付添ひ七条停車場に着し、先着の三名正使と共に暫時し、やがて正使以下一プラットホームに入り列車に乗り組み、午後一時廿四分同駅を出発し神戸に向ひしが、神戸まで同列車に乗組み見送りし僧俗九百名に及び、七条駅において見送りし人々は久迩宮殿下、村雲尼公御使をはじめ九条公、近衛公の使、高崎知事、本派本願寺連枝大谷尊重師、大谷派本願寺総務大谷勝縁師、妙法院門跡村田寂順師その他各宗管長及び管長代理者以下執事、役員、門末僧侶、信徒、各宗学校職員生徒等無量一万人余と註せられために、同駅内外は人を以て充満し非常の雑沓を極めたり。又一行出発の際、同駅南手の畑中にて煙花を打揚げ、楽隊は楽を奏して之を餞し、大谷家よりは法主の使都筑録

事、同裏方使尾崎□従、総代島家従いづれも神戸まで見送れり。又同寺事務所役員は半数だけ昨日神戸まで見送り、即日帰山し、残りの半数は本日神戸に赴き同地出発を見送る筈なり。又仏骨奉迎事務所常任委員土屋観山、後藤禅提の両師は仏教各宗派総代として、大谷派本願寺参務石川舜台師は大谷派総代として奉迎使と同車し、同□□□午後三時四十五分を以て神戸に着し、新法主を初め一同諏訪山西常磐に投じ、□□而して本日正午出帆の博多丸にて出発の筈なり。因に正使正名が今回暹羅皇帝陛下をはじめその他への土産物として持参せる品物は別項に記したるが、又大谷派新法主光演師は暹羅皇帝陛下へ献上のため、京都西村総左衛門の調進にかゝる左の品々を携帯せし由。

一刺繍四曲屏風　一対（宇治平等院春景代価二千七百円）
一綴繍壁掛　一枚（蓮図代価六百四十円）
一刺繍の扁額　一面（林中群鷺図代価六百六十円）
一刺繍結扁額　一面（山桜の図代価三百二十円）
一婦人用織物洋服地　一巻（代価百五十円）

尚奉迎正名一行の午後二時四十分当駅通過の際、大阪各宗僧侶無慮二百余名皆正服着用にて構内に参集し、見送の信徒は殆ど三千名に及び、一同最敬礼をなり、当市相続講青年会及び仏教壮年会有力信徒十名ばかりは、神戸まで見送せんため同列車に乗込み、仏教壮年会員等は花火数六本を放つて盛に奉祝せり。又前記仏骨奉迎事務所常托委員土屋、後藤の両師及び大谷派本願寺参務石川舜台師は神戸より門司まで見送る筈なりと。

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（九・完）

特別広告（明治33年5月28日　第六四五号）

帰朝広告

衲儀台湾及清国へ渡航布教及び霊蹟参拝中の処、今回支那天台山に登り漸く帰朝候に付、早速各位を訪問すべきの処、匆々の際未だ其意を不得候に中、乍略新報を以て御断り申上候、尚携持の仏像等有之候に付、拝覧又は実況談話御聴聞希望の御方は左に御申越相成度候也。

名古屋市桶屋町福泉寺
江　尻　深　海

大谷派の賛衆改選（明治33年5月28日　第六四五号）

大谷派の賛衆改選は、愈々来る六月一日総撰挙にて二十一名を出し、七月一日其の二十一名より三名を復撰する尾張賛衆は、名古屋市にては総撰挙にて

小林町楽運寺　佐々木　賢　淳
鶴重町安浄寺　黒　田

中風止めの名灸（明治33年5月28日　第六四五号）

別項広告の如く、来る六月二日より菅原町浄教寺に於て大和光明寺伝来の名灸師出張の由。同家灸治は其の効顕著にして、灸治を乞ふ者毎回に其の数を増かざる事なるが、同病患者は就て其の効能を験されよ。

一柳智成氏の演説〔明治33年5月28日　第六四五号〕

去る十九日、当市菅原町浄教寺に於て愛知仏教会が会主となり開会したる同氏支那実況演説は、午後二時より開会、当日は案内状持参者の外は入場を許さゝりし為に、来聴者は悉く中流以上にして軍人あり、教師あり、官吏あり、氏は第一席に支那の兵備、農工商の事を説き、兵の傭兵にして平時定員備へず。其の俸給等は上官の嚢裡を肥す事より、支那人が漸く軍隊は何邦と雖も其の組織同一なりとの感を抱くより、或る者は日本は文明国なり、日本に赴き兵隊に傭はれたりしなど語りたる者あるなどの事より、商業に於ては其の同業の団結力強く、到底日本商人の如き同士相討つが如き事なく、其の組合又は同郷の者は互に相救援して敗を他邦、又は他団の者に取らざるに尽力する実況を述べ、大に我が商工業界を誡しめ、尚ほ支那現今の状を述べて、支那は成る程半ば破壊されたる亡国なり、然れども恰も大厦の破れて壁の落ちたるが如く却て風に堪え、容易に顛覆の災害を免れ居る者なり云云、第二席には宗教の現状を述べ、支那僧侶の無学にして到底布教の任に堪ふる者に非ざる事より、俚諺に僧侶即ち和尚といふ名詞は一種の馬鹿といふを意味する事より日本の坊主の例を引き、大に誡しむる所あり。次に支那の宗教儒、道、仏、耶の百に対する比例を挙げ、キリスト教は仏国の旧教など仲々に勢力あれども、回教徒は無頼の徒多くして中流社会は伍するを欲せず為に、支那のキリスト教は将来大に望みなく、又仏教は浄土禅により今我々が布教に従事する仏教も大に好便あれば、将来に望みを□すべきを述べ、四時三十分頃に閉会したり。氏は来月上旬再び上海に赴かるゝ由なり。

大石真虎の謝罪証文〔明治33年5月28日　第六四五号〕

大石真虎は尾州名古屋の人にして画名一世を轟かせしが、其行為亦奇偉なるもの多し。就中左の一語は、最も滑稽を尽せるものなり。当時名古屋の或町に町代を勤むる何某といふものありけるが、此者己が身分の素町人なるを厭ふを以つて、常に士人風を粧ひ、己れが町代を勤むるを幸ひ、肩を聳かして街路狭しと横行し、其頭髪も士人の結様を為ねて前頭を狭く剃り、明は大髻に結ひ居りけるが、元来此人は聟養子にて、女房に対しては随分閉口し居る方なりければ、真虎其近隣に家居して、常に其の士風を粧ふを気に喰はず、殊に其頭の狭き剃り方を見る毎に胸悪き思ひを為し、何とかして彼の頭を人並に剃り拡げさせんと陰謀を巧みありしが、去りとは知らず、某は一日近所なる髪結床に来り、月代を剃らんとせしに真虎これぞ幸ひなりと店主を私かに物陰に招き行きて云ふ様、今来たられしは御身達も音に聞く町代某殿なるが、旦那は養子の御身分にて何事も内儀任かせ頭の剃様など、旦那には人並みにせんことを望まるるも、何分内儀が士人風を好まる故、不得止斯く狭く剃り居らるゝ事なれば、其の心得にて次第に剃り拡げよ。但し人目があれば、外辺は小言位申さるゝ事あらんも、そこを堪忍して何分頼むとの旦那の仰せなりとて、窃かに一分金を渡したれば、床屋は真に受けて、夫れより手過ちに托け

て一分二分づゝ削り拡げ、二三回にてヤ、人並の前頭に為したるが、一日某は例の如く床屋に来り、太くこれまでの疎忽を叱責し、今度は屹度疏匆をせぬかと言ひ詰れば、床主は微笑しつ委細承知仕りたりと一向平気の様子にて、月代に取掛らんとすれば、某大いに憤り、此奴真の麁匆に非ず、必らず其故あらんと問ひ詰むれば、床屋も終ひには隠し得ず。先日真虎に依頼されし旨を告るに、町代はヤツキとなり急ぎ我家に帰り、直ぐさま真虎を呼び寄せ、我れに何の恨み有つて我頭を弄り物とはなしたるぞ、御気の毒様位の言ひ訳で済むと思ふか、汝の如きものは誤り証文を板にでも致し置くが宜いと散々に談じ付けたれば、流石の真虎もたゝ詫入るのみにて一言の返□詞□なく、逃ぐるが如くに辞し去りたるが、真虎もさるものなりければ、直に瓦板といふものに左の如き文言を彫刻せしめ、翌日町代の許に差出したり。

誤まり申証文の事

一我等□□□□□に付き、貴殿へ対し申訳も無之儀誤り入候、以後斯様のやりそこなひ不仕様精々心掛可申誤り証文、仍如件

年　月　日　　大　石　真　虎

誰　殿

然れば、町代某も余りの事に呆れ果て、茲に初めて其忠告の切なる心根を察し、大いに後悔してこれより頭も全く人並に剃落しいと丁寧なる人になれりとぞ、ア、滑稽も此に至つて功なしとせんや。

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（九・完）

広告〔明治33年5月28日　第六四五号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観　音　普　門　品

受持講師　水　野　道　秀　師

永　平　家　訓

受持講師　早　川　見　竜　師

会場は宝町　禅　芳　寺

仏骨奉迎委員会〔明治33年6月4日　第六四六号〕

大仏妙法院なる仏骨奉迎事務所にては、廿八日午後常任委員会を開き委員の事務を区分して、第一第二の両部を置き、第一は奉迎に関する儀式及び諸般の準備、第二部は奉安所塔廟、其他の設計は係る事項及び仮奉安に係る事務を分掌することとし、委員の分担を左の如く定めたる由。

第一部河野良心、後藤禅提、名和渕海、青井俊法、小林栄運、

第二部薗光轍、三原俊栄、土屋観山、有沢香菴、田村豊亮

尚ほ、奉迎の件に付き、各宗派管長会議に提出すべき議案編製のため薗光轍、名和渕海、土屋観山、後藤禅提の四師を委員に撰定せり。

天台宗よりの暹帝に献上品〔明治33年6月4日　第六四六号〕

今回仏骨奉迎の初め、各宗より渡暹せらるゝに付、各宗派に於て

も夫々適当の物品、或は土産を準備し暹羅皇帝並に其他王室へも献上せらるゝに付、本宗にんは盛門三井三山合同して堂塔名監数十個等を大なる写真に撮り、之れ美麗なる帙入仕立となし（縁由を英訳にて添へたり）献上することに纏り、製本の上右渡暹せらる奉迎使に委託し、之が献上の手続を請はれたりと。

各宗派管長会議（明治33年6月4日　第六四六号）

同会議は、愈よ来月五日より妙心寺内竜泉庵に於て開会することと為り、仏骨奉迎事務所総理村田寂順師より各管長へ左の通牒を発したり。

本年四月廿日、各派会議の決議に依り、来る六月五日より三日間京都花園妙心寺内竜泉庵に於て各宗管長会議開会致候間、該日午前九時迄に出席相成度、此段御通候也。

追て各宗派より出席委員の数は、明治三十二年六月十二日各宗派管長の決議せし各宗集議所規則第四条に準じ、御出席相成候様致度為念申添候也。

奉迎使香港着（明治33年6月4日　第六四六号）

去る三十一日、無事同港に着す。両三日滞在の後ち、博多丸にて嘉坡に向ふとの電報ありたり。

古今未曽有の盛挙（明治33年6月4日　第六四六号）

対不敬事件仏教演説

去る廿八日　皇后陛下御誕辰の佳日をトし、名古屋第一の美観を極むる劇場御園座に就て、対不敬事件仏教演説を開会せり。会主は愛知仏教倶楽部員にして、昼夜二回に開会せられたり。定刻は午後正一時よりといふも、午前十時頃より続々聴衆は同座に集まり、開会の頃は殆んど満場なりし。水野、早川、森、萩倉、其の他の演説ありて、同五時に閉会したり。夜間は正七時より開会の筈なりしに、聴衆は凡そ五時過ぎより来集せしも、同座の規則として点灯以前に入場せしむるを得ざる筈なれば、止むなく入場を謝絶せしが、其の次第は一般の来集者に貫徹せず。同座の面前は殆んど四五百名の大乱雑を醸し、警官の来りて制するも力は及ばず。漸く電燭を認むるに至りて大木戸を開くや、此の来集者は一時に入場し、殆んど宏壮なる劇場を震動せしめたり。引き続き入場する者緒の如く、七時に至り三千名の定員を超えたりとて入場を禁ぜられしより、再び座前に人の山を築き、警官の制止も如何ともする能はず。止むなく階上の聾席を開らきて之れに上らしめたり。然るに聾席を密かに脱して桟敷へ出づる者あり。遂には演台をも置くべき位置なきに至りしも、鶴見、宮本、横井其他の諸氏は、熱心にキリスト教の国害なる所以を証引して論ずる所ありしより、満場は静粛に之れを謹聴せんとするも、入場を得ざる坐前の来集者は、或は喊声を揚げ、或は波動を起こす。其の郷音の場内に達すると、尚ほ聾席に在る者の不満の声を立てゝ殆んど騒然たりしが、流石熱心なる聴者なりき。其て際涯にも拍手の声は起り、前古未曽有の盛会なりし、当日或る人の語所によれば、来

集せし者は一万人に近く、其の□は入場を得ざりしと、斯る混雑を極めたる為に、同坐を修飾せし彩旗の杆を押り、其他場内に敷きたる戒壇を荒らしたるなど、同坐の重役諸氏も悉く仏教熱心者なれば、此の辺の損害には少しも頓着せず、非常なる歓心を以て迎へ居らると、兎に角に未曽有の演説なりし。

朝日座の演説（明治33年6月4日　第六四六号）

浄土宗の吉水徳成氏等数名にて、去る三十日杉ノ町の同座に開会非常なる盛会なり。

西別院の降誕会（明治33年6月4日　第六四六号）

去る廿七日、当市西別院にて於て行はれたる宗祖の降誕会は、前号に記したる如き次第に延引されしも、当日は諸講中尚徳会員等の尽力にて盛大に行はれ、午後は正式の勤行あり。午後に至り狂言の催し園遊会などあり、拾七箇所に飲食店を出し、各々好みに随ひて飲食し興を尽くして退散されしは七時に近かり。

愛知育児院拡張演説並に幻灯会（明治33年6月4日　第六四六号）

海東郡巡回特派員近藤疎賢、石田寅方、井本至誠の三氏は五月廿四日、遠島村字宝安了寺に於て開会、斉藤久三郎宅宿泊、同廿五日篠田村福栄寺に於て開会石原芳次郎宅に宿泊、廿六日野間村立尋常小学校に於て開会、石原芳太郎宅に宿泊。右三日間は近藤師の巡回にて昼夜開会、翌日より石田師と交代巡回せらるゝ廿七日、越治村念道寺に於て開会、猪飼篤三郎宅に宿泊、廿八日神守村養源寺に於て開会、役場内に宿す。廿日日光村真宗説教所に於て於会大杉新十郎宅に宿す。三十日□渕村西源寺に於て開会、卅一日大野村、六月一日新田、右昼夜に開演来聴者夥しく惣て盛会なりき。因みに宿泊等は悉く篤志を以てせられ、役場員并に地方委員等は非常に尽力され奇特の事なりき。

五月廿四日、海東郡遠島村字宝にて近藤疎賢師、愛知育児院拡張のため慈善演説を、又同村七宝職工の為め、文学教授の九江老儒は左の詩を近藤師に呈送やられたりと。

聴慈善大演説有感

呈疎賢近藤禅師閣下

九江老生

弁尚如流水。愛邦又敬神。説明忠与孝。貫徹金剛心。

広告（明治33年6月4日　第六四六号）

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品　受持講師　水野道秀師

永平家訓　受持講師　早川見竜師

会場は宝町　禅芳寺

正使随行〔明治33年6月11日　第六四七号〕

大谷派新門主が仏骨奉迎の為に暹羅に赴かれしが、其の随行任命は左の如し。

○四月二十四日

釈尊御遺形奉迎正使随行長を命ず　南条文雄
釈尊御遺形奉迎正使随行を命ず　石川　馨
同　大草慧実
同　藤岡勝次
同　松見得聞
釈尊御遺形奉迎使随行申付　浅井恵定
同　飼田辰一
同　尾崎　英
同　下間頼信

仏陀伽耶の親告式〔明治33年6月11日　第六四七号〕

仏舎利奉迎使の一行は汽船中にて協議を開き、曹洞宗の日置黙仙師の提議にて暹羅国王より尊骨を領したる上は、更に仏陀伽耶に詣で親告式を挙行することに決したれば、一行は印度に廻航すべきに依り、帰朝期凡そ二週間余も延期する由。

永平寺貫主〔明治33年6月11日　第六四七号〕

森田悟由禅師には、当市矢場の永昌院の授戒後は金沢の天徳院に赴かれしが、去る八日同地より大阪に赴かれたり。

仏骨奉安準備〔明治33年6月11日　第六四七号〕

仏骨奉迎準備に付ては、各宗管長会に於て帝国仏教会則同細則の確定するを待ち、引続き同会の協賛を求むるにて、其原案は左の如し。

仏骨の長崎に到着するや同地二泊佐賀、博多、小倉、赤間関各一泊、広島二泊、尾之道、岡山、姫路、神戸各一泊、大阪二泊にして、京都に到着は長崎より十五日目とす。▲仮奉安会は京都御到着一週間以後に於て、一週間之を行ふ事。▲拝瞻会は明治三十四年四月八日より同五月十五日迄施行の事。▲塔廟建設の起工式は前条四月八日より五月十五日の中間に於て行ふ事。▲上陸会、奉迎会、拝瞻会の三会施行の日に於て、各宗派大小の寺院は瞻鏡を喝し相当の供養を為す事。

各宗派管長会議〔明治33年6月11日　第六四七号〕

同会議は予記の如く、五日より花園妙心寺内竜泉庵に於て開会、午前は諸般の打合せを為し、午後一時三十分より本議を開きたり。当日出席の各管長同代理者及委員は左の如し。

真宗興正派管長華園沢称○真宗誠照寺派管長二条秀源○華厳宗管長佐保山晋円○大徳寺派管長菅広洲○妙心寺派管長小林宗輔○天竜寺派管長橋本峨山○仏骨奉迎事務総理村田寂順○大谷派管長代理石川舜台○本派管長代理近松尊定○相国寺派管長代理伊藤貫宗○南禅寺派管長代理畑道温○建仁寺派管長代理瑞問惟陶○曹洞宗管長代理織田雪嵓○真言宗長者代理土宜法竜○真宗

木辺管長代理松原深諦○高田派管長代理藤山真証○西山派管長代理青井俊法○融通念仏宗管長代理黒田覚洲○真言宗委員小林栄運○時宗委員河野良心○臨済宗委員有沢香庵○誠照寺派委員藤井学道○真言律宗委員岩城元随○東福寺派委員林素嶺○興正派委員三原俊栄○天竜寺派委員北条周篤○天台宗真盛派委員古泉性信○東大寺派委員雲井春海○相国寺派委員宮崎栴芳○妙心寺派委員稲葉元厚○曹洞宗委員弘津説三○大谷派委員児門賢象○仏光寺派委員渋谷円順○黄檗宗委員鈴木恵眼○本派委員神根善雄、同和田円什○西山派委員岩瀬霊雲○永源寺派委員最上祐禅○日蓮宗委員田村豊亮

天台宗委員薗光轍、臨済宗委員後藤禅提、大谷派委員土屋観山、本派委員名和渕海の四師番外席に就き、先づ仏骨奉迎事務総理村田寂順師の仏骨奉迎に関する報告演説あり。夫より本派管長代理近松尊定師を仮議長とし、正副議長を撰挙したるに、天竜寺管長橋本峨山師議長に、真言宗長者代理土宜法竜師副議長に当選したるも、峨山和尚は議事の整理などは知らずとて副議長に依頼し、満場異議なきを以て土宜法竜師議長席に如き第一号議案帝国仏教会々則の議事を開かんとせしに、弘津説三師の発議に依り議案熟考の為め休会することに決し、午後三時散会す。

第二日の各宗派管長会議

同会議は引続き妙心寺竜泉庵に於て開き、第一号議案帝国仏教会々則を審議する筈なりしが、同案に対しては修正意見を抱けるもの少なからざるを以て、先づ協議会を如き午後三時に到り、大谷派法主大谷光瑩師の来会あり。又前日出席せざりし仏光寺派管長代理有馬憲文、真宗三元派管長代理星野貫了、天台委員中村勝契、大徳寺派委員菅田実吉、西山派委員零群零雲の諸師も出席して凝議せしが、結局帝国仏教会なる名称は其当を得ざれば、会名を始め其他の各条に修正直加ふる為め、各宗派より修正委員を定め申出ることとして、遂に本会議を開かずして午後六時散会せり。

●各宗派管長会議（七日は休会）　各宗派管長会議、去六日の協議会に於て帝国仏教会々則案の為め、各宗より委員を撰出することとし、右撰挙の結果曹洞宗より弘津説三、真言宗より小林栄運、臨済宗より瑞岳惟陶、真宗（本派を除く）各宗より有馬憲文、本山より神根善雄、天台宗より中村勝契、日蓮宗より田村豊亮の七師当撰したれば、五日も本会議を開かず。午後一時より大仏妙法院に於て同委員会を開き、番外薗光轍、土屋観山、名和渕海、後藤禅提の四師出席し、大谷派本願寺法主も三時過より臨席して七時頃散会せり。

第三日の各宗派管長会（明治33年6月11日　第六四七号）

各宗派管長会議、八日午前十一時三十分より妙心寺竜泉庵内に於て開会、出席者は大谷派本願寺法主、天台座主を始め三十六名にて、先づ第一議案日本大菩提会々則（委員修正案）の議事を開きしに、第三条の起業方法に対し、本派本願寺委員は単に覚王殿建築に止め教育及慈善事業を見合すべしと発議したるより議論沸騰

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（九・完）

し、纏らざるを以て交渉の為め休憩数度に渉りて、午後三時三十分再び本議を開き、本派委員神根善雄師は番外土屋観山、後藤禅提両師との間に激論あり。本派委員は徹頭徹尾、教育慈善を大菩提会の事業と為すことに反対せしが、大谷派委員和田円什師の発議に依り、原案の二読会を開くべきや否やに付き採決することに決せしかば、本派管長代理近松尊定、木辺管長松原深諦、三元派管長代理星野貫了、本派委員名和渕海、同菅田実元、同神根善雄の諸師は袂を聯ねて退場せり。夫より議長は本案に付き採決せしに、過半数にて二読会及び三読会を省略し、本案可決確定し引続き第二号及三号議案を議したるに、是亦異議なく可決確定し、午後四時五十分散会せり。即ち当日可決確定の議案は左の如し。

○第一号議案

日本大菩提会々則

第一条　本会は日本大菩提会と称し、本部を京都市に置き支部を各地方に設く。

第二条　本会は釈尊の遺形を奉安し、其聖徳を顯揚し国民の道義を涵養する目的とす。

第三条　本会の目的を達せんが為め、順次左の事業を起す。起業方法は別に之を定む。

第一期　覚王殿建築

第二期　教育及慈善

第四条　本会の会員を分て左の四種とす。会員待遇方法は別に之を定む。

一名誉会員（本会職員会の推撰による者
又は金百円已上を喜捨したる者）

一特別会員（本会職員会の推撰による者
又は金十円已上を喜捨したる者）

一正会員金一円已上を喜捨したる者

一随喜会員応分の金品を喜捨したる者

第五条　会員の徽章及証票は、本部より之を交付す。

第六条　本会は、各宗派管長を推戴して名誉会監とす。

第七条　本会は会務処理の為め、左の職員を置く。職員の服務規則は別に之を定む。

一理事長　一人

理　事　十人

第八条　理事は本会々議に於て委員中より之を互撰し、理事長は理事の互撰を以て之を定む。

第九条　本会に監事三名を置く。其撰出方は前条に準じ。

第十条　本会々議は各宗派撰出の委員を以て之を組織す。

第十一条　会議は定期臨時の二種に分ち、定期会は毎年一回之を開き、臨時会は緊急必要ある場合に之を開く。

第十二条　現金の出納は特約銀行をして之を取扱はしむ。

第十三条　経費の予算は本会々議に於て議定し、決算は毎年定期会に報告す。

第十四条　支部に関する規則は別に之を定む。

以　上

○第二号議案

日本大菩提会施行細則

第一条　本会々員募集の為め、勧誘委員若干人を各宗派より撰出す。其員数は従来の慣例に依る。

第二条　勧誘委員には本会より嘱托状を交付し、其姓名を各宗派に報告す。

第三条　勧誘委員は本会本部より一定の方針を示し派出せしむ。

第四条　各宗派は勧誘委員に便宜を与ふる為め、門末一般に対し訓示するものとす。

第五条　勧誘委員派出期限は一方面約一ケ年とし、一組二人以上を以て各府県を分担せしむ。

第六条　勧誘委員は其担任地に於て領収したる金員百円に達する毎に、金員の姓名簿及金額を明記し本会へ郵送すべし。

第七条　本会の発会式は明治三十四年四月之を行ふ。

○第三号議案

起業順序

第一期事業

覚王殿建築工事

一、入会者凡百万人に達するを待ち、覚王殿並に付属物の建築に着手すること。

二、建築物は壮大堅牢にして、永遠に保存し得べき範囲内に於て之を計画すること。

三、該工事の落成期は凡七ケ年とす。

第二期事業

教育及慈善

第一期事業結了を告たるときは、更に会員中より喜捨金募集し、凡見込み立たる時を待ち起業に着手するものとす。

総見寺の後任事件と本社の迷惑〔明治33年6月11日　第六四七号〕

当市総見寺の現住安田文達氏が同寺に住職せられたるは、全くの違式の事にて同氏の僧籍は、建長寺派に在れば、妙心寺の末寺に転住すべからざるは謂ふ迄も無き事なるに、如何なる間違にや本市の政秀寺及光勝院が推挙者となり、本山に申請して同寺に住職せしめたり。然るに此の事露顕に及び、前記推挙者は処分せられし事を能仁新報に記せしより、之れが関係者は立腹し、非常に本社を悪く申居る由なるが、本社は実に意外の迷惑千万なる事なり。元来該記事を能仁に掲げたるは、既に住職事件の落着後数ケ月を経たる後の事なるが、抑も之れを能仁に掲げたる次第は、違法住職事件に付ては世人は甚だしき誤報を伝へ、関係の人々をば最も罪悪極る者となし、殊に本山より重科に処せられたるが如く風聞するより、本社は当人等の為に気の毒に思ひ、本山の処分は軽き警誡なる事又違法住職事件も世人の風説するが如き者に非ざる事を、当人等に代て弁明し呉れたるを如何に思ひけん。世間の風説を知らざる関係人等は、誰れも知らぬ事を能仁が掘き出したりとて激昂し居るとは、其の痴□は笑ふべきも恩を仇にといふ事は是等ならん。併しながら若しも你等にして尚悟る所なくば、夫

れこそ你等の為に大打撃の素破を抜くの筆をも領せり。少しは脳を冷して了一了せよ。……

寄書〔明治33年6月11日　第六四七号〕

訪問伝道の実を挙げ　早　川　見　竜

布教伝道の事たる、之れを謂ふや易くして、之れを実地に行ひ、而して直ちに其の効果を奏する事や、頗る至難の業と謂つべし。今の所謂布教伝道を以て自から任ずる者、啻だに演説若しくは説教なるものを以て、布教上の唯一得策と心得しにや到る処の寺院に於て此等の事業は行はれて、其盛挙や教門の為には頗る賀すべしと雖ども、翻つて眼を参聴者の機類何如に注ぐ時は、又た歓心せざるものゝ如し。いかんとなれば今の所謂寺院に集れる参聴者なる者は、老翁野婆に非れば東西未弁の児童ならざるはなし。言を換ゆれば直接社界の事業に与かるものには非ずして、寧ろ社界の事業に遠ざかるの機類と云はざる可らず。吾人は斯るを全然廃棄する者には非れども、日進月歩の趨勢に鑑んがみ、人智発達の現下に徴して、斯る機類を投機衆として布教せんよりは、寧ろ他の方面に向て布教を試み、誠心誠意之れが実行を企画したらんには、充分の効果あらん事を断言するに憚らざるなり。請些しく之れを謂はしめよ。

今の所謂布教家を以て自から任ずる人、寺院の説教場に青年者若しくは、壮年者の参集せざるのを視て、直ちに評言すらく、此れ青年者又は壮年者には、道徳の感念なく宗教心は既でに欠乏せりと。嗚呼、之れ何等の戯言ぞや。凡そ人として社界に生存する以上は、天賦の良心を具せざる者は有らざるべし。而して此の良心たる、或る場合に於ては之れを隠蔽し、又た或る境遇に接しては、之れを汚濁せしめ、時に触れ、処ろに応じて其の発動機が不徳義となり破廉恥となり、遂には刑法上の犯罪者を造り出すに到るは、人生の数なるべし。斯る可憐の出来事は、常に青年者又は壮年者の部属に於て其の多きを視るなり。故に此等の部属を誘掖して、益々其の良心を発達せしめ、以て俯仰天地に恥ぢざるの、極楽地に到らしめてこそ、由来布教家たる者の先天的本分なれ。爰んづ口を宗教心の欠乏に仮りて、徒らに責任を無視するの愚を演じて可ならんや。蓋し願ふに彼等青年者の部属が、寺院の説教場に参集せざるは単に宗教心の欠乏するには非ずして、外に別の理由在つて存する事を知らざる可らず。彼等が日夜採りつゝある諸般の業務は、社界の進歩すると倶に益々繁激を加へ、彼等の身躯は常に繁激の文字に抑圧せられて、寺院の説教場に参集するの時間を与へず。否な寧ろ事情に於て之れを許さざるなり。去れば之れを縁なき衆生と視傚して、投機衆以外に放棄せんか。吾人は決して其の然らざるを信ず。茲に及んで最とも其の有望の効果を期して、着々為すべきの事業は唯だ訪問伝道の一途あるのみ。視よ全国各都会の地に商業家として最とも名あるの家を、（例せば当市の伊藤呉服店、大丸呉服店の如き）常に多数の番頭丁稚を使役し、又た多数の出入り人を傭役しつゝある事を、布教家たる者にして、常に此等の家を訪問し、慎重に其の主人其の支配人に協

議して、一ケ月一回か若しくは二回の間に於て、直接其の家に就き、業務に支障なき限り、一間の席に彼等を相集めて循乎として布教伝道を試みたらんには、其の労力や微少にして、其の効果を収むる事や。寺院に催す説教の効果に優れる事、其の幾倍なるや知べからず。嗚呼、刻下の急務として着々断行す可きの事業は、夫れ唯だ訪問伝道に在るか。吾人不敏なりと雖ども、多年身を仏門に寄せ、白毫光裡に日月を過ぐす上は前述の言を為すも、奚んぞ徒らに議を好むの意に出でんや。幸ひに燃ゆるが如きの熱誠を以て、身を布教場裏に投ぜらるゝ、文明的の布教家諸氏よ。枉げて吾人の微言に意を傾けられん事を。

名古屋大須観音堂〔明治33年6月11日　第六四七号〕

名古屋市大須北野山宝生院真福寺の観音は、俗に大須観音と称し、諸人の信仰浅からざれば、其堂宇頗る壮麗を極めたりしが、去る明治二十五年三月二十二日の夜、境内の劇場宝生座より出火し、遂に本堂始め五重塔并に仁王門をも烏有に帰し、爰に名古屋市の一大美観を失ひしが、其の後、真福寺住職始め有志者の尽力により普く寄付金募集して堂宇再建を計り、其起工式をあげしは実に二十五年六月なりき。越えて八ケ年の星霜を経て漸く竣工し、今は只内部の装飾を残すのみとなれり。

抑も大須観音といふは、今を距ること七百二十余年の昔し、人皇八十二代後鳥羽天皇の建久年中、美濃国中島郡大須に建立せられたるものにして後醍醐天皇深く之に帰依し給ひ、当時土御門三品親王宝生院の別当として同寺の住職となり給ひ、禄高も三千石あり。当時は勅使殿の設けさへありて、至尊を始め奉り皇族貴顕の間々ありし程の名刹にて徳川氏の世となり、初めて美濃より名古屋の現在地に移し以て今日に至れるものなりされば、同寺には古文書も多く存して、今も尚ほ散逸せず。火災の時も此宝庫のみは幸ひに難を逭れたるが、其宝物の重なるものは菅公自筆の御影にして、後醍醐天皇特に京都北野山の宝物中より選抜して同寺に賜はりたるものなりといふ。左れば維新の頃までは、境内に天神を祀れる祠ありしが、其後神仏分離の際、天神社は他に移され、観音は依然として世の渇仰浅からず今日に至りぬ。災後新築の計画あるや諸方より金品を寄付し立ろに其計画成り、災後間もなく起工式をあげ、二十七年七月地均式を行ひ、二十八年六月建柱式をあげ、三十年十二月仁王門落成したり。扨堂宇の形式については人を山城大和諸地方に派し、所有古名刹を視察し、遂に紀州粉川寺の形式を摸し、之に多少の修正を加へたるものにして、其の構造は二重造りなり。尚ほ内部の装飾等は本年中に悉皆成功の見込みにて、遅くも来春は移仏式を挙行する心算なりと云ふ。因に建築に要する費用の予算は約十万円なりと。

大菩提会創立式〔明治33年6月18日　第六四八号〕

仏骨奉迎に関し、各宗派管長会に於て日本大菩提会の組織確定したるに付、去十一日午後二時より大仏妙法院に於て、提携の各宗派管長及重役参集なし同会の創立式を挙ぐ協議を為したり。

奉迎委員会〔明治33年6月18日　第六四八号〕

仏骨奉迎に関する準備に付、去十日午前九時より妙心寺竜泉庵に於て委員会を開く。

仏骨奉迎各宗派委員会〔明治33年6月18日　第六四八号〕

仏骨奉迎準備に関し、去十日午後一時より妙心寺竜泉庵に於て各宗派委員集会し委員会を開きたるが、出席者は左の如し。

相国寺派宮崎栃芳、真言宗岩城元随、融通念仏宗黒田覚洲、専修寺派藤山真澄、黄檗宗鈴木恵眠、興正寺派三原俊栄、南禅寺派山名□山、時宗河野良心、天台宗薗光轍、西山派青井俊法、大谷派土屋観山、永源寺派天□□越、妙心寺派後藤禅提、曹洞宗有沢香庵、仏光寺派渋谷円順、誠照寺派藤井学道、天竜寺派北条周篤、日蓮宗田村豊亮、建仁寺派後藤文宸

以上十九名にして、議長を互撰せしに後藤禅提師当撰し、夫より仏骨奉迎に関する事項を議せしが、原案には仏骨の長崎に着するや佐賀、博多、小倉、赤間関、広島、其他順次一泊、又は二泊して、京都に入着は長崎より十五日目なるも、かくては余り長びくべしとて日数減少説出て、一時四十分休憩を為して協議会を開き、二時□十分再び開議して、左の如く決議し、是れにて委員会全く終了し、議事録に調印して退散せしは、午後三時三十分なりしが、其確定議案は左の如し。

議　案

明治三十三年四月の議事録奉迎協議案第九項の四により、左の通り之を決議す。

一、長崎京都間の御駐輿は七日以内とし、其場所撰定は常任委員に一任する事。
二、京都御着奉迎会に関する場所及日数は、常任委員に一任す。
三、仮安置会は奉迎会、引続き三日間之を行ふ事。
四、拝瞻会は明治三十四年四月八日より五月十五日施行の事。
五、前条の期間に於て覚王殿建設の起工式を行ふ。
六、拝瞻会施行の初日に於て、各宗派の寺院は梵鐘を鳴し相当の供養をなすべきことを其宗派より諭告すること。
七、法要の施行方法は常任委員に一任す。

覚王殿建立地について〔明治33年6月18日　第六四八号〕

釈尊仏骨の奉安する覚王殿建立地については、或は南都にせんといひ、或は叡山または京都市内にせんといひ、または東京にと望むもあり。人々の意思により議論も区々たるが、仏骨奉迎委員に於ては未だ建立地を協議するまでに実際運び居らず、過日妙心寺竜泉庵にて決定せしめ日本大菩提会の設計にては、全殿の工事を七年間に成工せしむべきものとなしありて、其境内は十町四方位とし、之に荘厳宏大なる仏殿を建立せんとの議あるも、京都市にて此の如き広大なる敷地を望むべくもあらず。中には古来より王城鎮護の霊地なる叡山にせんといひ、または成るべく衆生の結縁礼拝に便なる市内とし、若し十分の敷地を望むべからずんば、今

少しく規模を小にするも可なりと云ひ、これまた議論区々たるも、畢竟箇人の意思に止まり、大菩提会に於ても未だ正式に発議する運びには至り居らずといふ。

本派と大菩提会（明治33年6月18日　第六四八号）

本派本願寺の各派と協同して仏骨奉迎の為め、既に副使として藤島了穏師を暹羅国に派遣したるも、既報の如く妙心寺会議に於て日本菩提会規則を議するに当り、同派委員は第一期の事業たる覚王殿建立に同意を表したるも、第二期の教育及び慈善事業を起すことに反対し、激論の末管長代理以下委員十□袂を聯ねて退場し、爾来同会議に列せず。又十一日の菩提会創立式にも参列せざりしが、同本山にては愈よ各宗派と提携を絶ち、藤島師の仏骨奉迎副使を罷め□□は来る九月巴里に開く万国宗教大会より招待せられ居るを以て、暹羅国より直ちに仏国に出張を命せることと顧問会に於て決議したれば、不日法主の裁可を経て発表する由。尚ほ本件に付き、前日本派の利井明朗、名和渕海二師は妙法院に到り、村田総理に面談したる趣き。

●浄土宗管長交代　西山派管長大僧正清水範空師、管長満期に付き同派総本山誓願寺住職大僧正久田□道師と交代願出に依り、去る八日国務省に於て之を認可せり。

●大谷派法主の金沢参向　大谷派本願寺法主大谷光瑩師は、去十日午前六時廿五分七条発列車にて石川参務、藤井録事、鈴木、久米両承事等を随へ金沢別院に到り、九日より十三日まで、五日間同別院にて執行する前門主厳如上人の七回忌法要に参向し、又十一日は、金沢衛戍戦病死者追悼法要を兼六公園紀念碑前に於て修法せり。

日本大菩提会創立式（明治33年6月18日　第六四八号）

各宗派管長会議に於て議決したる日本大菩提会は、十一日午前十一時五十分大仏妙法院宸殿に於て創立式を挙行せり。宸殿尊牌段は白の幔幕を以て覆ひ、幕外中央上段に妙法院第廿七代獅子吼院一品尭恕法親王の御染筆なる釈迦文殊普賢三尊の大幅を掲げ、一同着席するや理事長村田寂順師は左の開会の辞を朗読せり。

世儒曰く。人皆尭舜たるべし。之を前に行ふは古の尭舜なり。之を後に行ふは今の尭舜なりと。在俗己に然り。我徒豈また自棄す可けんや。夫れ釈迦牟尼世尊は己成の仏にして、吾人は当成の仏なり。惟る夫れ人寔に先後の差あり。而て教法に固より古今の異りなし。然は則其の後人をして先覚に同く当成の仏をして己成の仏たらしめんと欲せば、必先づ其古今異りなきの宗教に依らしめざるべからず。然るに輓近桑門の紀綱漸く弛み概ね依るべきの□規に依らずして、却て為す可らざるの事を為し、法力内に衰へ労利外に競ふ。此に於て檀越信を失ひ邪魔隙を窺ふ。蓋し□□の振はざる□として是れ之に由る。嗚呼苟くも釈尊の徒たるもの誰か奮発興起せざる可けんや。今や幸に暹羅国王陛下釈尊遺形頒賦の盛事に遭遇するを得、実に空前の盛事にして仏法興隆の大好機たり。而て其奉迎使は殆ど彼地に達

せんとし、霊尊入朝の期亦遠きに非ざるなり。此の時に当り、須く先づ内弊を矯止し、三業清浄に虔礼以て之を奉迎し、深信以て忝敬供養の誠を尽さる可らず。然れども寸膠以て黄河を澄満するに足らず。孰か豈能く頽運挽回す可けんや。是を以て鴻業を永遠に図らんと欲せば、必ず広く天下の信朋を結合し、和通填輔以て盛略を賛襄せざる可らず。是各宗協同新たに日本大菩提会を創設せる所以なり。抑も本会の目的たるや、先づ輪奐たる大覚王殿を創建して釈尊の遺形を奉安し、其遺徳を顕揚し内には以て国民固有の道徳を涵養し、外に南北仏教を混融し異苗殊根を問はず、等しく大乗仏教の法雨に潤しめ以て万世一系の　皇威と三千年以来仏光を併せて内に輝かし、共に倶に四恩に報答せんことを企図す。仰願くば寸善尺魔の障礙無く、速に本会の結果を成満せんことを。謹て本会創立の旨趣を宣ること云爾。

奉迎事務総理兼
日本大菩提会理事長
明治庚子六月十一日　妙法院門跡　村田寂順

次に真宗誠照寺派管長二条秀源師及び仏光寺派管長代理有馬憲文師の祝辞、仏骨奉迎委員総代田村豊亮師の答辞あり。来賓鳥尾得庵居士は一場の演説を為し、古へより山城大和両国は仏教各本山の所在地なれども、今日は帝都を東京に移され、時勢自ら一変し居れば、仏骨奉安の地は東京を以て適当と考ふる旨を述べ、午後一時式を終り、折詰の饗ありて退散せり。尚ほ当日重なる来会者は天台座主中山玄航、真宗興正寺派管長花園沢称、建仁寺派管長竹田嘿雷、南禅寺派管長豊田毒湛、粟田青蓮院門跡三、玄津、誠照寺派管長二条秀源、相国寺派管長中原東岳の諸師、其他管長代理委員等にて来賓は鳥尾得庵居士及び京□新聞社等六十余名なりき。

鳥尾子所感の大要

本会を日本大菩提会と名づけたるが、予の信ずる所によれば各宗派一致するのみならず。大乗南北仏教を通じ仏法を興隆する悃眼より起りし者ならん。夫が今回の一念なれば、大乗小乗ともに此一念の上において成就するものなり。斯の如く世上に現はれ、成就を望むにおいては、其一念において二念三念の相続を必要とし、その間に種々煩脳を出すもあらんが不退転にして、第一念によりて尽さざれば、後に念願の不成就となるべし。本日の挙式を平易に見れば、是迄各宗の智識有志者等が仏法のためには種々心配し居るも、仏法は日を追ひ衰へ来るにより、今回仏骨を奉迎するに至り、仏の威徳光明を更に発揮するは疑を容れず。我国の仏教は、我国の歴史に伴つて形造らるれば明治維新　陛下が都を東遷し賜ひしより、自然と天下の人心も変化したるより、此処をよく考へざるべからず。今回の仏骨奉迎を仏法の一大紀□とし、各宗協力して京都へ仏骨を奉安すべき一大殿堂を建築し大道場を開き、以て天下に普く仏法の利益の及ばんことを偏へに希望す。高きに声を発すれば、此に及ぶの例あり。東京は皇居のある処日本の頭脳なれば、東京にお

いて仏功を輝して適当と思考す云云。

覚王殿建設費寄付（明治33年6月18日　第六四八号）

既記の如く、本派本願寺は大菩提会の第二期事業として教育及慈善の起業を為すことに反対し、同会組織に同意せざることに決したれども、仏骨奉安の為め覚王殿を建設することは勿論賛成なりとて、同殿建設費中に金二万円を寄付する事に決し、顧問利井明朗、注記名和渕海の二師は、十一日大仏妙法院に仏骨奉迎事務総理村田寂順を訪ふて、其旨を陳述し、左の書面を送りたる由。

今般各宗派管長会議に於て大菩提会を組織し、会員を募集し釈尊の御遺形奉安の殿堂建設等の事業企図可相成段決議有之候処、本派に於ては殿堂建設の儀は無論賛成に付、右費用の内へ本派より金二万円寄付可致候、乍去大菩提会組織の儀者、断然同意難致候条、此段申進候也。

真宗本願寺派管長代理　近　松　尊　定

奉迎事務総理村田寂順

本派の意見（明治33年6月18日　第六四八号）

本派本願寺の大菩提会に反対する理由なりとて、同派の当路者は左の如く語れり。

目下僧界の堕落せる状況を見て、世間早くも推断して教界が山仕事を為すが如く云ふものあるは、心外千万にして甚だ慙愧に堪へず。故に苟くも遺弟として教を釈門に奉ずる以上は仏骨奉迎奉安の如き、盛事に際しては先づ金を他に募ることを為すより己れ他に先んじて金を投じ、これを俗人の手に藉らず、僧侶自から其の奉安の殿堂を建設せんことこそ望ましけれ。左れば之れを俗人より募り、七ケ年を費して巨大の土木を起すよりは、宜しく七万の僧侶各自金二円を投じ、十四万円位の殿堂を建設し以て釈尊崇仰遺徳顕揚の実を挙げ、衆人の模範たらんことを期すべし。是本派の意見にして、今回殿堂建設費に金二万円を寄付し、且つ大菩提会の組織に同意せざる所以なり云々。

墓地問題市会に上る（明治33年6月18日　第六四八号）

吾人が屡々記載して読者の注意を促したる名古屋市共同墓地の問題は、愈々実行する事となり、去る十一日の市会に上りたり。其の理由とする所は左の如くにして、其の説明の上よりするも、将来は市内墓地の埋葬を禁ずるに至るが如き徴候あり。寺院の盛衰に影響を及ぼす者多き事件とす。左に其の全文を掲げん。

本市事業として共葬墓地三ケ所を設置す。而して此墓地に関する総ての会計は一般の歳入歳出と区分し、特別に之を整理す。

（説明）本市は維新以来、各寺院境域の変更と頻年戸口増殖の結果、墓地の状況頗る乱れて早晩整理を必要とするの実際あるにも拘はらず、一方に未だ共葬墓地の設備なきが故に、今日に於て直に之を如何ともなすべからず。之が為め四通発達街衢の間と雖も苟も墓地の名称あるときは、日に月に充塞して殆ど余地を余さざらんとし、飲料の井戸は将に卵塔と相接し、墓域呎

尺の間常に炊煙の昇るを見るの已むる得ざる有様を呈して、啻に衛生上有害なるのみならず、又風致上欠点たるを免れず。加之昨年七月改正条約実施の結果、外人の為にも墓地の必要あり。且内国の者と雖も神仏二教以外の宗教を奉ずる者の使用に供すべき墓地なきを以て、既に是迄と雖も種々紛紜を醸したる例なきにあらず。乃ち是等各種の点に考ふるに、此侭にして荏苒時日を経過するは、却て本市将来の為めに得策ならずと認むるが故に、本案の如く埋葬墓地を設置せんとす。然れども其位置及広狭に至りては、追て適当の地所を選択し、市会に諮問を為す。而して本市は逐年諸般の事業勃興と共に之に要する経費の支出も亦少なからず、財政頗る困難を免れざるの現状なりと雖も、本件は啻に目下緊要なるのみならず他の事業と同じからざる所あり。即ち其整備するに随ひ、漸次収入を得べきの見込ある事業なるを以て此際之を決行し、之に関する収支の会計は一般の歳入出と区分して特別に之を整理せんとするものなり。

第十六号議案

共葬墓地に関する特別会計規則を左の通規定す。

共葬墓地特別会計規則

第一条　本市共葬墓地新設経営の為め特別の会計を設置す。

第二条　共葬墓地特別会計は墓地使用料其他一切の収入を歳入とし、地所購買建物新築及墓地に関する設備維持其他一切の費用を歳出とす。

第三条　本市共葬墓地特別会計に属する収入金に不足を生ずるときは借入金を以て補ひ、剰余を生ずるときは該維持費或は拡張費に充用するものとす。

第四条　市参事会は毎年度共葬墓地特別会計の歳入歳出予算を調製し、歳入歳出の総予算と倶に市会に提出すべし。

第五条　市参事会は共葬墓地特別会計に於ける決算を、毎年度歳入歳出の総決算と倶に市会の認定に付すべし。

仏骨奉迎使を歓迎す（明治33年6月18日　第六四八号）

左の書面は、岩本千綱氏が暹羅に歴遊の際特に仏骨奉迎を委託され先発として同国に到着したる以後の状況を通信し来りたるものなり。日本の仏骨奉迎使に対し、如何に暹羅国王を始め国民が同情を表し居るかを窮知するに足るべし。

拝啓仕候諸兄筆硯益御壮健奉賀候、今日既に百度近き炎熱の中に苦悶する小生共に引換へ、墨堤緑陰の下に杜鵑を聞き東台光風の辺に明月を賞する諸兄の近況日夜想像して羨望に堪へ兼候。

仏骨奉迎の件に就き、東本願寺より委托相受候に付き、着暹後夫々準備交渉に取係候処、該件に関しては稲垣公使非常の尽力にて万事頗る好都合に相運ひ、只今は只管使節参着を待つ計りに相成候間、左様御安心被下度候今回仏骨奉迎使来暹の儀に就ては、当国政府各大臣は申すも更なり、国王殿下にも殊の外御満足にて叡感斜めならざる由、稲垣公使より屡々伝承仕候、孰れ使節着暹後は種々の佳報を伝へ可申様相成候事と存候、雲の上の事は測り兼候得共、唯今にては実に望外の好結果に有之候、委細は後便ゆ

る〳〵御報可仕先は右得貴意度草々頓首。

於暹羅国盤谷府湄南河畔　岩　本　千　綱

特別広告〔明治33年6月18日　第六四八号〕

毎月廿一日午後一時ヨリ

仏教演説并説教

本月弁士讃岐貫我居士等外

白　川　町　瑞　宝　寺

金城館の仏教演説〔明治33年6月18日　第六四八号〕

愛知仏教倶楽部員の会主にて、去る十四日開会せられ本紙付録の如く、三浦中将の仏教演説ありしが、当日は金城館前に仏教倶楽部の銘旗を掲げ、午後に至り来会者は何れも案内状を携て入場せり。重なるは青山少将、西川代議士、山内県会議員、富田市会議、其他名誉職員等三百余名にて、初めに宮本熊楠氏開会の主意を述べ、次に近藤疎賢、岩佐大道二氏の演説あり。午後三時四十分に至り、中将は羽織袴にて出場し、床間に安置したる丈余の山越弥陀仏に三拝し了て演壇に付き、椅子により付録の如き演説あり。五時に閉会を告げしが、尚ほ来会者の有志懇話会を催し、酒間に席上数番の演説ありたり。当日は青山少将も左の演説を為せり。

本日は何たる幸慶の日なるぞ。斯く多数の諸君と共に一堂に会し、三浦中将閣下の演説を聞きたり。予も仏教の事には従来とても縁薄きに非ず、今日来席の八事山の和尚にも識ありて、是迄も高僧の説法をも度々聞きたり。今日三浦中将の話の如く道徳は仏教に非されば維持し難し、道徳は国家に最も必要なる者なれば、予も其の発達を最も希望す。予は仏教の事は充分に存ぜざれども、将来は研究を致すべきなり。今日は一言を以て盛会を祝すると共に、予の希望を述べたる次第なり。

晩景に至り充分の歓を尽して散会せしが、各団体員は孰れも奔走尽力せられて満足なる盛会なりき。因に同中将は十三日来名、訪問者は大島師団長を始めとして来客多く、中将には更に他出せず。十四日金城館の閉会後、大島師団長に招かれて同邸を訪はれ、翌朝の汽車にて東帰されたり。

●三浦中将の来名

六日の菖蒲……過ぎし昔を語るも益なき事ながら同将軍の来名に付て、頗る珍談あり事を赤地に洗ひ出すも、多少の憚もあれば隔靴掻痒の感なき能はざれども、聊か記して読者に報せんに、元来同中将の旅行は伏見の役の戦死者を弔ふが為に、西京に赴れ鳥尾中将と共に同法要に臨まれたるは事実なり。爰に天機は漏す可らざるも、一怪物の伏するあり。……中将は去る十二日を以て当市に来られんとす。之れを迎へて仏教の法話を乞はんとしたるを愛知仏教倶楽部員とす。其の日既に迫るに及びて、他に同中将を迎へんとする者あるを聞ける倶楽部員は凝議を為し、他に迎ふる者ありて後ちに之れに随伴するは面目の関する所もあれば、宜しく謝絶すべしと。殊に中将を西京に訪ひ確約を為し、他の招聘には

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（九・完）

応せざる事となしたり。然るに図らずも、着名の際に当りて停車場付近に迎へんとするの数組あり。殊に脂粉の群を混ぜるなど奇態を現じたるも、先は旅館丸文に無事に迎へたり。……電話は中将の来会を催すあり。之れを耳にせるは倶楽部員なり。……何条黙すべき詰問は中将の頭上に落ちたり。……其の電話こそ彼の一種異様の信仰を抱ける○○会員の発したる者とは、……中将は理否を漸くに解したり。出席は断られたり。其の夜は晩餐会を○○に開き、中将を招き以て図らんとする所ありたるなり。中将は出席を謝したり。弐円の料理五十人分は○○会員の寄合と喰なり果てたり、越中褌の喩に非ずして、全くの仕組は皆自己の手前より脱れたりと托言つも笑止。

尾張大谷派賛衆撰挙の競争〔明治33年6月18日　第六四八号〕

屢々能仁に報せし如く、大谷派本山に於ては従来の賛衆（代議員）撰挙法を改正し、各教区内の寺院より候補の人名を投票撰挙せしめ、其の当撰者より賛衆を互撰とする事と本年より改正されしが、尾張にては候補者は廿一名にて、既に去る一日に左の人々当撰したり。

佐々木賢淳
黒田知泉
本多顕赫
溝口大円
高木義答
香川大岸
金田賢堂
河野文随
鈴木宝良
尾中　泰
服部現嶺
矢留霊雄
野呂東溟
竹田智山
佐竹法輪
堀田鳳遵
佐藤琢成
山田俊栄
木全圭順
本多善明
筧　慈円

以上廿一名の候補は愈々決定せしが、之れより三名の賛衆の互撰挙を、来る七月一日に為すべしとの事に斗らずも、東京なる桜新聞は左の報導を伝へたり。

○尾張の賛衆競争　真宗大谷派の同地賛衆の競争は中々非常の由にて、候補者二十一名は互に火花を散らして運動し、昨今一票十円より五円にて買収し居れりとの噂あり。

吾人は、マサカ斯る鄙劣の行為は尾張の僧侶には無かる可しと推

量するも、兎に角撰挙競争の激しく、某の如きは底頭平身日夜に奔走しつゝありと〇〇〇人は語りぬ。

広告（明治33年6月18日　第六四八号）

例月十日、廿日の両日午後七時より

観　音　普　門　品

　受持講師　水　野　道　秀　師

永　平　家　訓

　受持講師　早　川　見　竜　師

　　会場は宝町　禅　芳　寺

仏骨奉迎使の携へたる各宗派管長の書簡（明治33年6月25日　第六四九号）

左記二通の書簡は、盤谷府到着の上同国外務大臣稲垣本邦公使へ贈る筈にて奉迎使一行の齎らしゝ所のものなり。

未接紫眉候へども、呈小書候蒼海万里雲山遥に隔つ、伏して惟るに閣下興居健全賛画精勤被為在不堪翹望之至に存候、爰に貴邦国王陛下の叡慮に依り、我教主釈迦大覚世尊の遺形を我大日本帝国某等の仏教者に御頒与被下候との恩召を承け、貴邦に駐在せる我大日本帝国公使稲垣満次郎君は懇切なる書面某等に寄せ、貴邦国王陛下の優渥なる叡慮と閣下が其間に於て斡旋の労を取られし深厚なる款情とを報ぜり。依て今般真宗大谷派法主大谷光演を奉迎正使とし、真宗本願寺派藤島了穏、臨済宗妙心寺派前田誠節、曹洞宗日置黙仙の三名を奉迎使とし我大日本帝国仏教各宗派を代表せしめ貴邦に派遣し候間、彼等貴邦に至るの日、閣下の御指導に依り貴邦国王陛下の叡慮の所在に従がひ遺形奉受為致度候。抑も貴邦国王陛下を始め閣下の御厚意に依り、我教主大覚世尊の遺形を澆季の今日に親しく拝受し得るの幸福何物か之に如かんや。之を内にしては仏陀の光明に依りて同朋相慶するの端を啓き、之を外にしては東洋の平和を維持保続することを得んこと、是れ某等の切祷する所に候。某等は奉迎正使及奉迎使に寄託し詳細に拝陳することあらしめ、奉謝の微悃を表明せしむべく候間、閣下幸に御傾聴被下度候、楮余乾湿愜いす気候序せざることあらん。為国御自愛専要に奉存候。

誠恐謹言

　　　　各宗派管長連名

　暹羅国外務大臣宛

本年二月御寄贈の懇書某等各自に之を領す。伏して惟るに台候清寧殊域に在りて国事御精務被成候条奉大賀候、爰に某等は御懇書に基づき各自一堂に相会し、交互微意の所在を披陳候処、何れも閣下の御懇篤なる芳志を感激仕候外無之、早速協議の末我帝国仏教各宗派を代表し、釈尊御遺形を奉迎せんことに相決し、真宗大谷派法嗣大谷光演を奉迎正使に、真宗本願寺派藤島了穏、臨済宗妙心寺派前田誠節、曹洞宗日置黙仙を奉迎使に撰任し、今般暹羅へ派遣可致儀に相成候。

抑も御懇書に相見へ候通り、従来一仏教弘通の方土と雖も南北相隔離し交通融会するの運なく空しく偏見を墨守致候。如は方今開明の世不可有事態にして我仏教の為め遺憾とする所に有之候。図らずも仏陀の毫光忽ち三千年後の末世に現ず、億万の衆生をして一致の信仰を発揮し、殊に信教上の同胞をして一層懇款を通ぜしむるの機会を得せしむべきに至りたるは、一に暹羅国王陛下御仁旨の厚きに因ると雖も、抑も又閣下の我国に忠誠なる我仏教同胞を愛護せらるゝの切なるに非れば不能事と存候、奉迎正使等盤谷府へ到着致候はゞ、万事閣下の御指導を煩はし度候、且又御懇書中に列国仏教徒は空前の盛式を以て御遺形奉迎に従がひ候由なれども、某等は形式の美観に拘泥するを欲せず、只管一団の誠信を以て之を我国に奉迎し以て、我　今上皇帝陛下の聖寿万歳を祝し奉り、兼て国土の平安を祷らんと欲する精神に有之候。此旨暹羅国王陛下へ御執奏願上候、尚又御遺形奉迎後永遠護持可致儀に対しては暹羅国王陛下の叡慮に背き奉り、或は閣下の御芳志を空うするが如き儀は、誓て致不申候間、此儀別て御含置被下度候。而して奉迎正使及奉迎使等は某等の付与せし信任状を携帯致居、諸般都て委任致置候間、万一臨時御稟議申上候儀も有之候はゞ、御示教被下度某等は、我大慈父たる釈迦大覚世尊御遺形の万里恙なく本邦に来嚮し給ふの期を屈指して相待候より無他候。時下極暑将に人を苦めんとす。殊絶の地台候、折角御保墻専要に奉存候恐惶謹言。

各宗派管長連名

稲　垣　公　使　宛

仏舎利奉迎使帰朝期〔明治33年6月25日　第六四九号〕

同一行は印度へ廻り仏陀伽耶を拝し親告式を挙行すべきとのことを曽て掲載せしが、同地は時下極暑の折りからにもあり、且ペスト其の他の悪疫流行せるを以て暹羅より直ちに帰朝することに決したれば、多分七月下旬か八月上旬には帰朝せらるべしといふ。

尼僧の研学〔明治33年6月25日　第六四九号〕

当市袋町禅芳寺に毎朝曹洞宗の尼僧が集合し、早川見竜氏に請ふて宗乗の研究を為し居らる感ずべきなり。

竜桑巓氏〔明治33年6月25日　第六四九号〕

大光院住には胃病療養として豆州熱海に。

永昌院の江湖〔明治33年6月25日　第六四九号〕

矢場の永昌院にては授戒に引き続き江湖中にて、雲衲の為には山田祖学氏が仏典の講義を営まる。

市の墓地問題〔明治33年6月25日　第六四九号〕

市会に上る僧侶の傍聴者を見受く。

島地氏の来名〔明治33年6月25日　第六四九号〕

予報の如く来名、西別院に於て法話ありたり。

広告〔明治33年6月25日　第六四九号〕

謝近火御見舞

皆戸町　長徳寺

広告〔明治33年6月25日　第六四九号〕

近火の節は早速御見舞被下有難、乍略儀新報を以て厚く御礼申上候也。

真宗寺

特別広告〔明治33年6月25日　第六四九号〕

仏骨奉迎事務所にては、奉迎使一行既に帰途につきたるを以て各宗委員事務所に出頭して奉迎、その他に関する諸般の打合せをなしたるが、日蓮宗委員田村豊亮氏は東京方面における準備のため東上したりと。

仏骨奉迎使消息〔明治33年6月25日　第六四九号〕

仏骨奉迎使の一行は、去る十三日無事暹羅国盤谷府に着し、十四日参内国王陛下に謁見し、其翌十五日釈尊霊骨を拝受したり。依て一行は去十九日盤谷府を出発し、来月五日頃長崎に帰着の予定なれば、其京都に着するは来月十二、三日頃なるべし。又一行中本派本願寺の藤島了穏師は既記の如く、来る九月仏国巴里に開く万国宗教大会へ出席の為め、一行に別れて仏国に渡航するならんと云。

仏骨奉迎使帰朝電報〔明治33年6月25日　第六四九号〕

去る廿日、大谷派本願寺へ向け十九日暹羅出発す。遅くも七月十三日に長崎着との電報ありたり。

船中の奉迎使一行〔明治33年6月25日　第六四九号〕

去月廿八日は真宗開祖見真大師并に曹洞宗開祖承陽大師の忌日なりしを以て、船中の人々は殊更十二人前の精進料理を注文し、大谷派の新法主以下は精進を為し、尚ほ曹洞の日置、真宗の南条両氏は船中にて演説を為したり。其の聴衆は船員、船客を併せて四十余名なりしと。

西派の仏骨奉迎反対の真相〔明治33年6月25日　第六四九号〕

吾人は其の真偽を判ずるに苦しめども、臨済宗妙心寺派の正法輪が報ずる所によれば、西派が仏骨奉迎に反対したる事由といふに、真に区々の感情的の上よりの事なり。左に其の次第を摘記せんに、

始め奉迎使中正使を置かんとの議あるや、直に反対したるは同派なり。其内情は正使は必ず大谷派法嗣に落札すべし。是れ彼の欲せざる所、自派は之と競争せんにも老門主は病気なり。新

門主は洋行中なり。幾ど詮方なくされ ばとて、其競争者たる大谷派に正使の尊称を取らるゝを欲せず。極力反対せしが、遂に奉迎使中の協議に任すと云ふ調和策にて漸く通過したり。次で奉迎使の姓名順は従来各宗立宗開教順に認むる慣例なりしに、同派は強て自派の奉迎使を正使の次に記すべしと主張せしが、幸に臨済、曹洞二宗の人々は斯る些事を眼中に置かず、快く譲歩せしを以て先づ無事に出発するに至りしも、之が為め前後七、八日を徒消せり。

京都日出新聞の仏骨奉迎論〔明治33年6月25日　第六四九号〕

左に掲くるは、同新聞紙中仏教の将来なる論中の一節なるが、仏骨奉迎に関しては最も吾人の同意を表する者なり。仍て爰に転記す。

公認教運動に次で、仏教徒聯合の事業として世人の注目を惹けるは仏骨奉迎なり。暹羅国皇帝近時発掘せられたる仏骨を我国に分たんとの意を致さる好意謝するに堪へたり。釈迦の弟子たるもの須らく礼を尽して之を受くべし。之を奉安する為に荘厳美麗を極むる堂宇を建築するも亦可なり。世往々仏骨奉迎を以て仏教徒が自己の懐中を暖めんと計る事業なりといふものあり。余輩は之を読者の言なりと信ぜんと欲す。但仏教徒中、仏骨の我に分たれたるを以て仏教の興隆の徴となし、仏骨さへあれば仏教大に盛なるべしとの迷想を抱くものあるに至つては真に噴飯すべし。法は人に依つて伝はる此故に最も多く崇敬を受くるものなり。真宗の本尊は阿弥陀如来なり。而も本願寺に於ける阿弥陀堂は親鸞上人を祀れる堂宇よりも小なるに非ずや、真言宗に於て最も多くの崇敬を受くるは弘法大師なり。日蓮宗に於て最も多くの崇敬を受くるは日蓮上人なり。其他各宗然らざるはなし。殊に禅宗は不立文字といふ区々仏骨の如き何かあらん。知るべし仏骨奉迎に依つて信者の数を増加し、大に仏教を盛らしめれとするの愚なるを、若し仏骨を以て真に仏教を盛ならしめ得べきものならば、印度及び其付近に於て仏教衰ふるの理万々なきなり。然るに釈迦滅後幾何もならずして、仏教は安南波羅門教の為に印度より放逐せられたるに非ずや、仏教は安南暹羅等に於てよりも我に於て盛なるに非や、弘法、親鸞、日蓮等が其宗派を盛ならしめたるは、教法の為め艱難辛苦を嘗めたるに因るものにして、其今早猶世の崇敬を受くるは決して偶然に非ざるなり。自家の品格を高めて世の崇敬を受け以て教法を維持し、仏教を隆盛ならしめるに思到らず、仏骨奉迎を以て仏教大に盛なるべしと為し、安逸を貪る如きは豈宗祖の罪人なる無からんや。

広告〔明治33年6月25日　第六四九号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観　音　普　門　品

　　受持講師　水　野　道　秀　師

永　平　家　訓

受持講師　早　川　見　竜　師
会場は宝町　禅　芳　寺

広告（明治33年6月25日　第六四九号）

毎月廿一日午後一時ヨリ
仏教演説并説教
本月弁士讃岐貫我居士等外
白　川　町　瑞　宝　寺

広告（明治33年6月25日　第六四九号）

亡母四十三回忌追善の為め
明治三十三年七月十三日　市内東田町乾徳寺に於て
午前十時法要挙行
午後二時演説公会
演題及弁士左に
四恩之説　会　主　鈴木黙菴居士
世間出世間之解　仝　人
演題未定　住　職　平　野　大　仙
禅門之妙法　会　主　鈴木黙菴居士

毎月第一日曜日
市内撞木町四十番戸に於て
仏　教　演　説　会
弁士　鈴木黙菴居士独立演説質問は所望なれども、秩序的礼譲の道を失はざることを要す。

資料

名古屋の寺院に関する木版資料について（十三）

川口高風

一、尾州松登山円福寺霊宝略縁起・宝物目録

寛永八年（一六三一）七月十五日に、十五世教順が記した円福寺（西区新福寺町）の寺伝と霊宝の略縁起、宝物目録である。親鸞聖人の御真筆と御所持の五種の霊宝の縁起をあげている。

二、毘沙門護世之天尊略縁起

文化十二年（一八一五）三月に、法応寺（千種区青柳町）九世勝空嶺超が記した法応寺に安置している毘沙門天の略縁起である。この毘沙門天は多聞天王で、弘法大師の彫刻といわれ、法応寺が清洲にあった南岳院の時代、織田信長公に信仰され、出陣すると勝利したといわれ、信長公は尊像をいつも持っていたといわれる。

三、毘沙門天王於御宝前開運福引

毎年正月十五日に行われる法応寺（千種区青柳町）の毘沙門天王の開運福引の広告で、惣あたり二〇〇本福引の鬮であった。

四、日蓮聖人涅槃図

日蓮聖人の涅槃図で、日蓮門下や帰依者などが嘆き悲しんでいる様子を描いている。本遠寺（熱田区白鳥）に所蔵する涅槃図を木版刷したものであるが、刊行年次は不詳である。

五、日親大聖人御難之図

日親聖人（一四〇八―一四八八）は、厳格な法華信仰者であったため投獄され刑罰を受けた。受刑の時の御難の図で、聖人の剃髪得度から示寂までの間の御難や功績などが描かれている。真柳寺（東区東桜）から木版刷で出されたものであるが、刊行年次は不詳。

六、蓮如上人御木像縁起

毎年三月二十四日より二十六日までは、拝礼のできる光円寺（中川区万場）に安置されている蓮如上人木像の縁起である。常陸国真家の郷の明円寺に安置されていた木像が浄光寺、枕石寺、光円寺へと譲り請けてきたことのわかる一枚刷の縁起書である。

七、尾州名古屋白川町法蔵寺釜出地蔵菩薩略縁記

法蔵寺（千種区春岡通）の地蔵堂に安置されていた釜出の地蔵尊の略縁起である。釜出地蔵は木像の立像で、矢場地蔵、宝積地蔵とともに尾張三地蔵の一つである。法蔵寺からは親鸞聖人の持仏といわれ、俗に指折の尊像と称された指折尊像の略縁起も木版刷で刊行されている。

八、奉擬日本西方四十八願所名古屋御城下巡拝

西方四十八願所に擬して、名古屋御城下三十七ヵ寺と熱田寺院十一ヵ寺を巡拝するための一枚刷名簿で、現在の案内図にあたる。「阿弥陀如来四十八願所」（本連載（四）所収）と同じであるが、五番貞祖院と四十四番亀井山が反対になっている。

九、五百羅漢供養簿

大竜寺（千種区城山新町）では、春秋の彼岸ごとに安置している五百羅漢の名号を唱え、礼拝供養する。そこで、各方面から戒名などを記して、両彼岸に永代供養する供養簿の序文である。

十、小野篁卿御作延命地蔵大菩薩略縁起

芳珠寺（千種区今池）に安置する小野篁作の延命地蔵菩薩の略縁起である。京都六道の辻、伊予松山の篁寺、それに当寺の尊像の三体は、小野篁が尾張に来た時から彫刻したもので、霊験あらたかなるものである。

十一、神社仏閣諸宗旧跡安置百万遍大念珠建立

神社仏閣及び諸宗の旧跡、霊場に百万遍の大念珠を安置したならば、参詣の功徳の縁を結ぶことができる。そのため大念珠の内に施主名や先祖の法名を記して、百万遍の功徳を得んことを願った文の序である。栄国寺（中区橘）より刊行されている。

十二、尾府矢場地蔵尊縁起

清浄寺（中区大須）に安置する地蔵菩薩の縁起で、「矢場地蔵菩薩縁起」（本連載（一）所収）とは文が異なり、それより古く江戸期に刷られたものであろう。諸国を行脚する善入という念仏者が、越中立山に登らんとして麓に止宿した夜、夢中に高僧が出現して、善入に告げたのは獄苦の衆生を済度する地蔵であった。初め濃州可児郡御嵩村に安置し、その後、当国に移った。そこで、別堂を建立して尊像を移している。

十三、敬円寺相続講

敬円寺（中区松原）の相続講の講元世話人名や相続講の懸金、鬮引についての仕法書をあげている木版刷である。

十四、四宝山珉光院円通寺略縁起

珉光院（名東区平和が丘）は源義近の開基で、義近は父義朝が

逆心により殺害されたところから出家して建立した寺である。天台宗の古刹で伊勢国桑名郡長島にあったが、海東郡萱津へ易地した。親鸞聖人が関東より帰郷の途次に宿泊したため、時の住持は勧化を受けて弟子となり、真宗大谷派に改宗して名古屋に移った。寺の略縁起と聖徳太子尊像の霊像なることを述べている。

十五、鯱名物

「鯱名物」は、天保初年（一八三〇－四〇）に板行された尾張・名古屋地方における特産品の番付である。世話人として八事山（興正寺）の五重塔、大須（観音）の五重塔、長寿寺の楓、総見寺の霧島、長栄寺の芍薬があげられている。

十六、古今尾州味噌見立相撲

天保七年（一八三六）に板行された尾張・名古屋地方の名物番付で、宮重大根などの特産品の他に、歴史的人物なども紹介されている。「前頭」に古書籍の日本一として大須観音の真福寺文庫、比丘尼の日本一として誓願寺があげられている。なお、「古物の頭取」として七寺の経唐櫃、笠寺の釣鐘、「絶景の世話人」として龍泉寺の仏坂をあげている。

十七、金毘羅大権現勧化帳

熱田旗屋町にあった延命院の金毘羅権現の本堂が大破したため、万人講を結び、安政四年（一八五七）二月に勧化を願った勧化帳の序文である。なお、金毘羅宮境内略図は（本連載（六）所収）で紹介されている。

十八、安斎院梵鐘勧化文

明治二十六年二月に、安斎院（東区東桜）より梵鐘を鋳造するための勧募金を願った勧化文。

十九、慶栄寺本堂再建上棟式遷仏供養大会

慶栄寺（西区那古野）は永正元年（一五〇四）に善正の創建で、三世寿玄が名古屋皆戸町へ移し、さらに七世哲休が、狭地のため現在地に移転して本堂を再建した。大正八年には不慮の火災に罹り、檀信徒の勧進によって同十二年五月に工事が成り、上棟式、遷仏供養を行った。法会の式次第や差定、「太子堂記」などの紀念帖が、同年五月二十八日に慶栄寺再建係より発行されている。

二十、沢観音略縁記

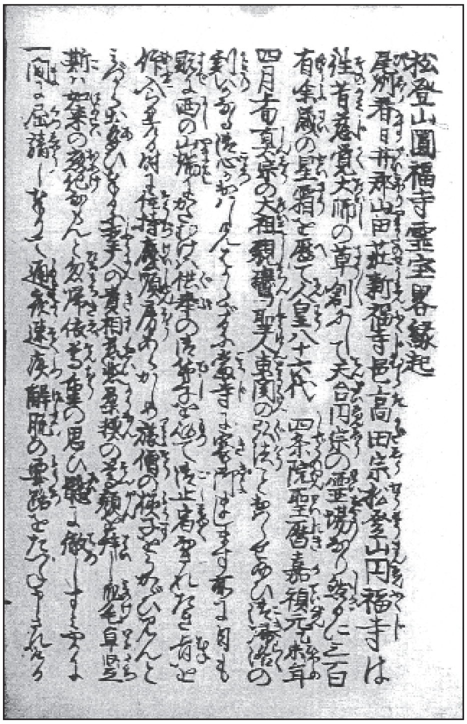
妙安寺（熱田区新尾頭）境内に祀られている沢観音の略縁記である。開基の織田久左衛門正直は、深く弘法大師を信仰し西国の霊場を巡拝していた。ある時、大師が老翁に身をかえて正直に、西国浄土は道遠く難路のため巡拝し難い。そこで自からの邸に、西国三十三所の七観音を集め安置したものである。沢観

音を信仰すれば、西国の浄土を巡礼するのと同じ功徳があるという。戦前の昭和初期に発行されたものと思われる。

二十一、道祖金勢大神霊略縁起

妙安寺（熱田区新尾頭）に安置する道祖神霊の略縁起で、良縁を求める人、妊を欲する人、悪病になやむ人が祈願すると霊験が著しいという。「沢観音略縁起」と同時期に成立し発行されたものであろう。

一、尾州松登山円福寺霊宝略縁起・宝物目録


松登山圓福寺霊宝略縁起

尾州松登山円福寺霊宝略縁起

松登山円福寺霊宝略縁起

尾州春日井郡山田荘新福寺邑高田宗松登山円福寺は、往昔慈覚大師の草創にして、天台円宗の霊場なり。然るに三百有余歳の星霜を歴て、人皇八十六代四条院聖暦嘉禎元乙未年四月上旬、真宗の大祖親鸞聖人東関の弘法へとおはらせ給ひ、御帰洛の刻いかなる御心かおはしけん。はからざるに、當寺に寄御まします所に、日も既に西の山端にかたむけは、供奉の御弟子を以て御止宿なされたき旨を仰入られける時に、住持慶順房あらかしめ旅僧の様子をうかがひ見んとみづから出逢ひ奉るに、聖人の貴相慈悲柔軟の尊顔を拝し身毛卓竪、斯は如来の応化ならんと、忽帰依尊重の思ひ髄に徹し、すみやかに一間に屈請し奉りて、通夜速疾解脱の要路をたづね申されける。かくて聖人示してのたまはゝ、真言止観の法門、是その教ひれ共、澆季濁乱の凡愚は智恵浅短にして、難解難入なり。浄土門のこころはしからず、十方衆生の本誓万機普益の法門なれば、仏願に託すれば五乗ひとしく廻入し念仏往生と深信すれば、薄地の凡夫も一念に仏智に冥合して、生仏不二の覚位に登る。ゆめ〳〵かたがふ事なかれと。最懇に教誨したまへは、慶順房はじめて弥陀弘願の深旨、凡夫直入の要法を聴受し、立地に自力起行の執情を離れ、他力不思議の真心を成就せり。永く難行聖道の仮門を出、適しく易行浄土の真門に帰入して則御弟子となれり。聖人當寺にましますこと二日なり。慶順房帰依渇仰の余り御別をおしみあはれ、しばら

く御滞留をと御袂にすがり、紅涙に咽はれければ、聖人もその志の深厚なる事を感じたまひ、御なみだにくれさせたまひける□命られてのたまはゝ、予は教勧にいとまなく殊に帰洛もいそくことなれば、再会を京都にて相期へし。さりなから無常転変の境界なれば、互に明日を期しかたし。且は別れての形見、且は念仏往生の証拠とて、御真筆の紺地金泥十字名号、御自尽の連坐の御影、十祖の御影、上宮太子十六歳真向の御影（并）釈尊の御舎利、笈の内より取出し手づからみづから是を授与し給ひぬ。慶順房この時面授親伝の附属を得て、歓喜身に余り感涙肝に銘して恭しく頂戴して渇仰崇敬せられけり。翌年二月上京して聖人を問拝し、数日滞留して、御教化に浴す。同年八月朔日卯の刻より巳の刻まで、誦経念仏して仏前を退かす。午の刻に至りて、嘗て病悩の苦なく端坐合掌して仏号を唱寐るごとく、往生の素懐を遂け□れぬ。慶順房より円順、慶円、証順と相続して既に十二世を歴たり。十三世崇順に至りて回禄の災にあへりころは、永禄四（辛酉）年十一月十一日の夜四更に及ぶころ、忽然と焔おこれり。時にあたりて風猛しく熾然として火煙諸堂にめぐる。近里遠郷の衆徒群り集り、おの〳〵捨命のはげみを成とも、敢て近づくことを得ず。唯本尊及び霊宝什物旧記のみ出し奉る。ここに奇異あり。聖人の御真筆十字名号箱の内に見へたまわす。人〳〵驚疑怪する事限りなし。此彼と尋ね求るに、かの名号焔の裏よりをのづから顕れ出たまひ、境内の高木松の枝上に登りとどまらせたまひ、光明赫然として焼難を遁させたまふ。見聞の道俗信伏感歎せずといふことなし。今現に、（御光右の方に少し焼失の所あり）。尤不思議の端なり。因玆件の名号を火災遁の名号と伝称して、霊験世に類なし。又山号をも此時より松登山と改るとかや。しかのみならず、それより五十余回の春秋を過て、慶長十九年（甲寅）孟秋水難にあへり。（蓋當寺并村共に、慶長十九年までは勝川筋堤より北にありしが、洪水にて堤きれ、村々寺社民家等あまた流損せり。當寺は其一也。同年九月易地す。）嗚呼慶哉。すでに回禄白波の患難にあふて、若干の什物旧記等こと〳〵く散失するといへども、件の遺宝におゐては聊も紛失せしむる事なく、連綿附属して相伝ふる所なり。然れば今聖人の法流を汲て、霊宝拝見の人におゐては在世面拝の思ひに住し、知恩報徳の念をいだき、憶念称名敢て懈怠る事なかれといふのみ。

松登山円福寺十五世

寛永第八辛未歳七月十五日　教順書

松登山円福寺宝物目録

一紺地金泥十字名号　親鸞聖人御真筆

此名号を火災遁れの名号と称号する事由あり。縁起のことし。

一連座御影御銘共　同御真筆

一十祖御影御銘共　同御真筆

一上宮太子十六歳真向御影　同御真筆

一釈尊舎利　同御所持

伝ニ曰ク。聖徳太子十七歳の時、西天より十余粒の舎利を贈進せしに、その内をわかちて蘇我大□へ附与し給ふ。後に思を転じて聖人の御手に入恭敬渇仰し給ふ云々。別に来縁の記是ありしか。幼稚の時紛失して今はなし。

右五種の霊宝は聖人御形見として、當寺開山御弟子慶順房へ与へ賜ふ所なり。

一親鸞聖人御自刻九十歳尊像

抑此尊像は、祖師聖人九十歳弘長二壬戌年洛陽三条坊門富の小路善法院尋有僧都の御許に移りましま す時、みづから彫刻遊ばし御男子印信和尚を召てのたまはゝ、畢命の期知りがたしといへども、予がごときは、今年かならず安養に往ん。浮世永別の期近きにあり。夢の世の名残と影をうつしをく。予がなきあとの形見ともどもと詠吟まし〳〵て、御落涙とともに御影を授与し給ひぬ。時に印信和尚も悲嘆の涙に咽ながら敬て、拝受し給ひ一形の間在か如く供給の至誠を尽し給ふと也。印信和尚御遷化の後は、常随の御弟子善観房護持いたされけるか。終焉にのぞみて當寺三世慶円に授て曰、此真影は鸞師御自刻まし〳〵て、則予か師範印信和尚へ賜ふ尊像也。師の滅後、我是を伝持渇仰せしむる所也。曽て聞足下は聖人の法孫郷寺も昔錫を寄給ふ霊跡なりと。我是をたふとむが故に、今又此御影を汝に附与すべし。渇仰崇敬いささかも等閑ありてなく、永く澆季の至宝にそなへ給ふへしと云ひおはりて、即安然として寂す。于時永仁三乙未年五月十九日なり。蓋慶円は、幼若の時より洛に登り顕密を学する事多年、善観房と断金の親友にして、且同室のよしみ。尤深き故を以てなり。慶円今はからざるに、祖師の真影を感得して身心悦予す

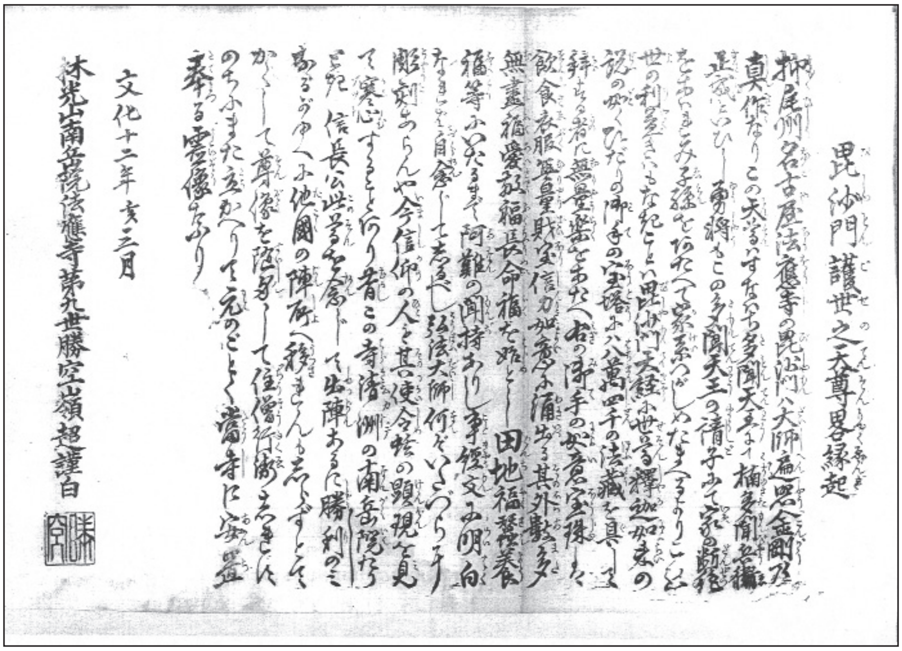
る事孩児の悲母にあへるがごとし。則袈裟につゝみて箱におさめ、みづから負奉り、速に国に帰て當山に安置す。自于以来歴代相伝へて當寺重宝と仰奉るものなり。

右の外、歴代の住持より伝来の至宝数多、これ有といへとも略してこゝにのせず。

松登山円福寺十五世

寛永第八辛未歳七月十五日　教順書

二、毘沙門護世之天尊略縁起


毘沙門護世之天尊略縁起

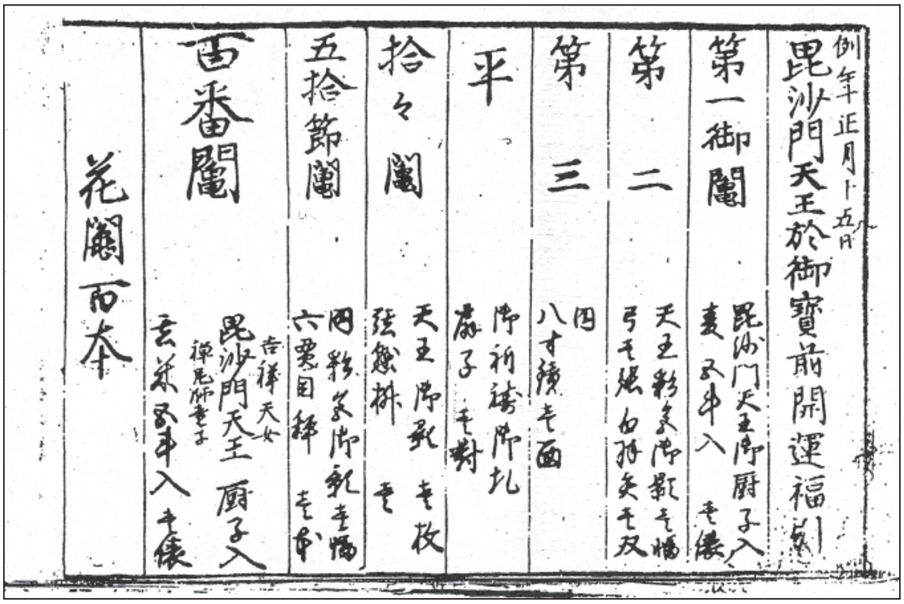
文化十二年亥三月

毘沙門護世之天尊略縁起

抑尾州名古屋法応寺の毘沙門は、大師遍照金剛乃真作なり。この天尊はすなはち多聞天王にて、楠多聞兵衛正成といひし勇将も、この多聞天王の請子にて、家の断絶をあはれみ、子孫をあたへて家系つがしめたまへるより、この世の利益きはもなきことは、毘沙門天経に世尊釈迦如来の説の如く、ひだりの御手の宝塔には八万四千の法蔵を具して拝する者に、無量楽をあたへ、右の御手の如意宝珠は飲食衣服無量財宝信力如意に涌出る。其外数多無尽福愛敬福長命福を始とし、田地福蚕養福等にいたるまで、阿難の聞持ありし事経文に明白なれば、自念じてしるべし。弘法大師何ぞいたづらに彫刻あらんや。今信仰の人も其使令蚿の顕現を見て寒心することあり。昔この寺清洲の南岳院たりとき、信長公此尊を念じて出陣あるに、勝利のみなるがゆへに、他国の陣所へ移れんもしらずとて、かくして尊像を随身して住僧行衛しれず。のちにまた立かへりて、元のごとく當寺に安置奉る霊像なり。

文化十二年亥三月

林光山南岳院法応寺第九世勝空嶺超謹白　印


例年正月十五日
毘沙門天王於御寶前開運福引
第一御鬮
第二
第三
平
拾々鬮
五拾節鬮
西番鬮
花鬮百本

三、毘沙門天王於御宝前開運福引

（例年正月十五日）毘沙門天王於御宝前開運福引

第一御鬮　毘沙門天王御厨子入
　　　　　麦五斗入　壱俵
第　二　　天王彩色御影壱幅
　　　　　弓壱張　白羽矢壱双
第　三　　同
　　　　　八寸鏡壱面
平　　　　御祈祷御礼
　　　　　扇子　壱対
拾々鬮　　天王御影　壱枚
　　　　　弦懸枡　壱
五拾節鬮　同　彩色御影壱幅
　　　　　六貫目秤　壱本
百番鬮　　吉祥天女
　　　　　毘沙門天王厨子入
　　　　　禅尼師童子
　　　　　玄米五斗入　壱俵

花鬮百本

第　一　　天王開運御守
　　　　　八寸釜　壱口
第　二　　同
　　　　　さんとめ綾　壱反
第　三　　同
　　　　　銭箱　壱
平　　　　同
　　　　　火打金　壱
拾々節　　同
　　　　　算盤　壱面
五拾節　　同
　　　　　大豆　壱斗俵
百番鬮　　同
　　　　　小豆　壱斗俵

惣当り弐百本、右之品々加持祈祷救座有之候間、其旨御心得可被成候。尤木札ニ名所御記し被成、御初穂拾弐銅ツ、御添。十五日正四カ時迄ニ御差出し可被下候。

尾州名古屋　法応寺
円満講中

四、日蓮聖人涅槃図

道妙禅門
阿□□日満
妙林日貞
日頂上人
日像上人
日住禅門
日常上人
朗慶上人
妙了尼
日家上人
寂蓮坊
日昭上人
日向上人
日持上人
妙法尼
日奥上人
日朗上人
妙一尼

持妙尼
三□入道
中奥入道
一谷近藤小次郎入道
宿谷入道光則
高橋入道
小早川図書頭
上野五郎左衛門尉
弁殿
平賀忠晴
千日尼御前
九郎令郎妻
栈敷女房
本間九郎左衛門重連
下山四郎
□□弥三郎伜弥三郎

九良太郎
形部左衛門尉
大久保新八郎
石川右衛門尉義弘
六郎次郎
南条兵衛
曽谷入道教信
弥源太入道
星名五郎
日安御前
日妙御前
椎池四郎
新池左衛門尉
進士太良
大井荘司人
熊王丸
四条金吾妻
金吾倅 久次郎

秋元政重
四条金吾頼基
貫名藤平重友
貫名藤太重政
荏原義宗
比企大学三良能本
亀王丸
池上右ェ門大夫
池上右ェ門大夫妻
池上左ェ門大夫
池上左ェ門大夫妻
池上兵ェ志
波木井六郎実長
藻原殿
乙御前
経王御前
南部三郎
南条平七郎

松野六郎左ェ門
太田禅門乗明
内房女房
田中孫四郎
熱田法華堂 妙光山本遠寺什宝

五、日親大聖人御難之図

日親大聖人御難之図

薙染得道第一

抑、御父は埴谷左近将監、御母は藤原氏也。応永十五年丁亥四月八日御誕生、御幼名寅菊丸と申奉る。御年十四才にして、正中山に登り、日せん上人を師として御剃髪遊し日親と改玉ふ。

発誓感瑞第二

応永卅三年御年廿才にして誓を起給ひて、其年の秋より冬迄かけ、正中山の墓所へ一百夜篭らせ、強盛の御誦経遊されけるに、百夜満日に三宝諸天高祖大士の御告をこふむらせ給ふ。

試忍力第三

此時御年廿一才なり。是より広大の御弘通を思召立給ひける。然るにさまぐの横なん来る事深く考合ありて、いくばくの大難たりとも忍ん事を、試のため一日に一ツの指の爪をはなし、十日に十指の爪をぬき、其爪の□へことごとく針をたて、にへ湯に入させ給ふ。

上洛弘法第四

応永卅四年未正月、正中山を御立あり。同二月八日、京都へ登らせ一条戻り、橋の辺りにて念仏無間折伏の辻説法し給ふに、刀杖瓦石の難を受給ふ。是御難の最初也。

火責難第五

永享十一年、立正安国論にならべ二巻をつづり治国論と名づけ、将ぐん義教公のもとへ遣し、天長地久なる事をいさめ給へども用ひ給ひず。あまつさへ上人三十四才の時、二月六日にして縄をかけ、獄屋へ禁めたり。或時火せめにしけると、煙の中にただ誦経の御声のみなり。

打擲難第六

□霜のすさましきに、上人を引出しはだかにして梅の木にしばり、夜もすがら数人集り打たたき、弥陀を頼と念仏を唱ふべしとせめまいらせければ、仏法を得て永々劫の間八寒地獄の苦しみを受る事思へば、芥子粒を以て□□を□如しと上人御答遊されける。

浴室難第七

風呂をこしらへ上人を入まいらせ、戸をとぢて湯たく事三時余り、然るに唱音もなかりしゆへ戸をひらきみるに、上人いささか御かはらせなく、大火所焼時、我此土安穏と只一心に御誦経あり。

水責難第八

獄屋の天井より尺にあまれる大釘を数本打ければ、居住立せ給ふ事ならず。或時は引出し、強勢の木責になしけれども、格別の御苦労にも思召さず、金言を守らせ給ふなり。

焼鍬難第九

将軍義教公立出給ひ、上人憮満ふくならん。水の出る口を明て呉んと竹の串を持て、陰物を強くなやまし、なを又冷候わんとてくれないのごとくやきたるくわを両脇へ抱せまいらせける。

焼鍋難第十

種々に手品をかへ責なやますといへども、上人少しも御頓着なければ、将軍なを〳〵にくませ、此うへは仕方なく火のごとく鍋をやきいただきにかぶらせしめたり。是より鍋冠日親上人とぞ時世の人々申奉るなり。

舌切難第十一

嘉吉元年の春、将軍家へ上人過言遊ばし、行者をなやませし現罰今日より百日の間に顕れんと仰られければ、義教公立抜めされ。上人の舌を切らせまいらす。夫より九十九日目に赤松が為に義教公むなしくなり給ふ也。

獄屋難第十二

本阿弥右門三郎と申人、将軍をいさめ奉るに、御意をそむき上人と同く牢へ入し故、昼夜御教化に預り、無二の信者となり五百三日め上人と同時に赦免あつてより本阿弥三郎利益をかふむる事おびたゞし。

播州横難第十三

諸国御弘通遊ばし播磨の国にいたり。諸宗無得道の義理を示し給へば、権門のやから数百人来り害せんとしけるに、上人泉州堺までのかれさせ給ふとかや。

本山建立第十四

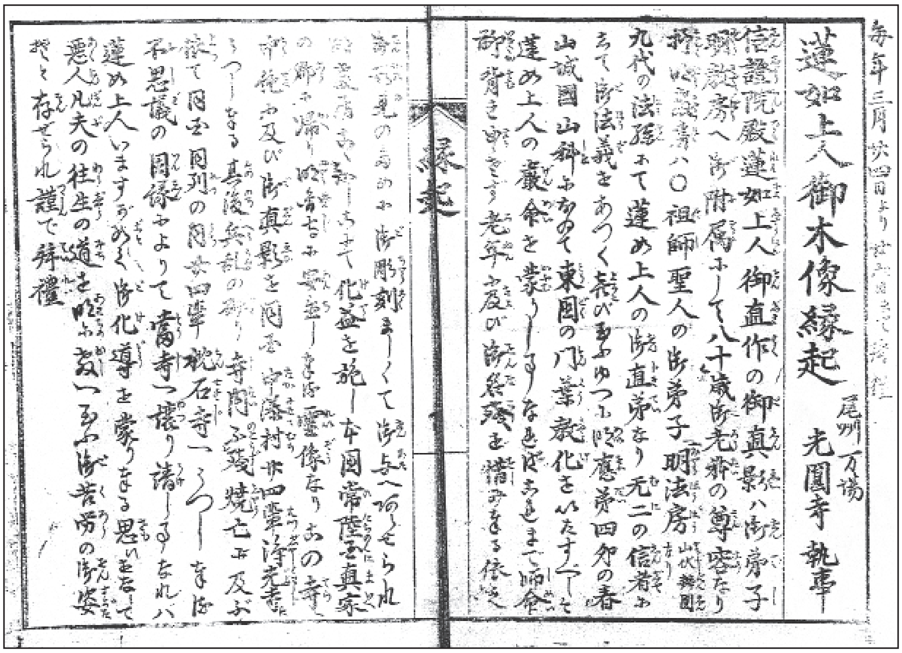
数年来の御心願に付、大難八度小難数知らず御かんなん遊ばし。文明八年上人七十才にして、京都叡昌山本法寺を成就し給へり。則大地也。

示寂第十五

長享二年九月十七日御入滅也。御建立の寺院三十六ケ寺御弟子衆にあたへられ、本法寺にして頭北面西、御寿八十二才也。

尾州恵眼山真柳寺

六、蓮如上人御木像縁起

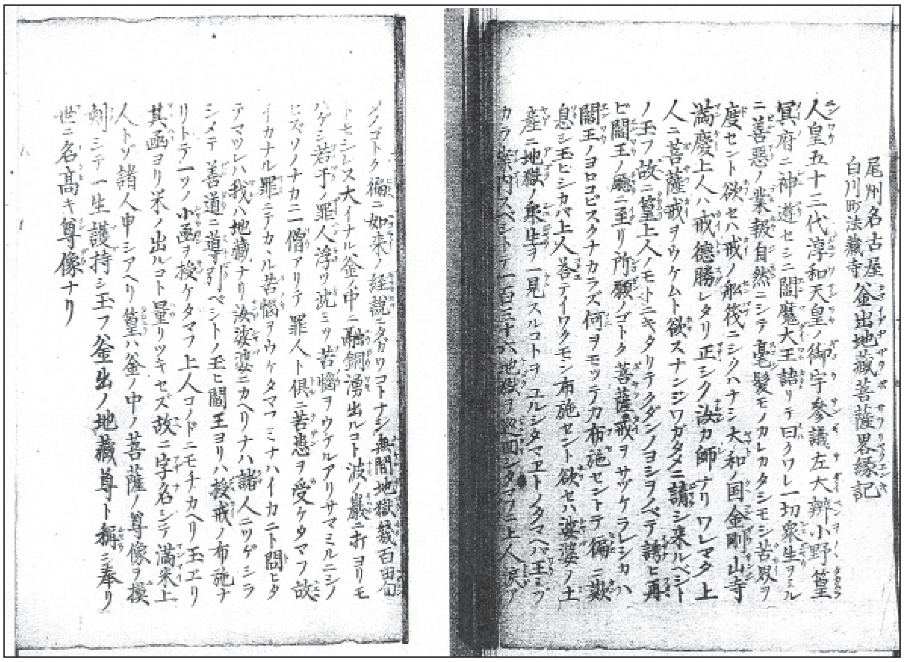


毎年三月廿四日より廿六日まで

蓮如上人御木像縁起　　尾州万場 光円寺　執事

信証院殿蓮如上人御直作の御真影は、御弟子明教房へ御附属にして八十歳御老躰の尊容なり。抑、明教房は○祖師聖人の御弟子明法房（山伏弁円なり）。九代の法孫にて蓮如上人の御直弟なり。無二の信者にして御法義をあつく喜び玉ふゆへに、明応第四卯の春、山城国山科において東国の門葉教化をいたすべしと蓮如上人の厳命を蒙りし事なれば、これまで師命聊背き申さず。老年に及び御名残を惜み奉る。依之御形見のために御彫刻まし〳〵て御与へあらせられ、明教房こゝかしこにて化益を施し、本国常陸国真家の郷に帰り、明円寺に安置し奉る霊像なり。この寺中絶に及び、御真影を同国中湊村廿四輩浄光寺えうつし奉る。其後兵乱の砌り、寺内不残焼亡に及ぶ。依て同国同列の内、廿四輩枕石寺へうつし奉る不思議の因縁によりて、當寺へ譲り請し事なれば、蓮如上人いますが如く御化導を蒙り奉る思いをなして、悪人凡夫の往生の道を明示教へ玉ふ御苦労の御姿□と存ぜられ、謹で拝礼。

七、尾州名古屋白川町法蔵寺 釜出地蔵菩薩略縁記

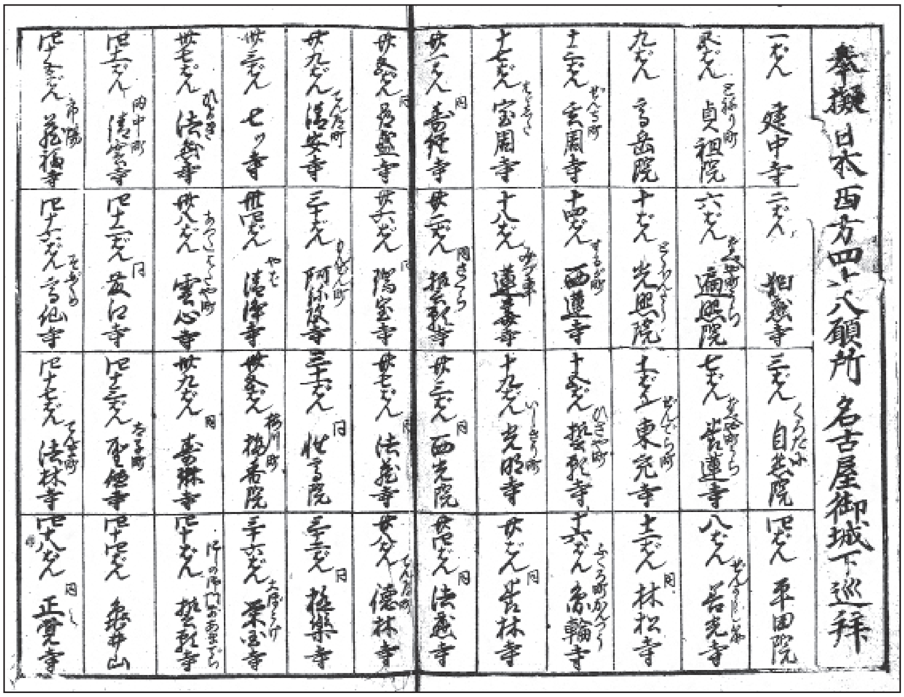

尾州名古屋白川町法蔵寺釜出地蔵菩薩畧縁記
人皇五十三代淳和天皇ノ御宇參議左大辨小野篁冥府ニ神遊セシニ閻魔大王語リテ曰クワレ一切衆生ヲミルニ善悪ノ業報自然ニシテ毫髪モノガレカタシモシ苦界ヲ度セント欲セハ戒ノ船筏ニシクハナシ大和ノ国金剛山寺満慶上人ハ戒徳勝レタリ正シク汝ガ師ナリワレマタ上人ニ菩薩戒ヲウケムト欲スナンジワガタメニ請シ来ルベシトノ玉フ故ニ篁上人ノモトニキタリテクダンノヨシヲノベテ誘ヒ再ビ閻王ノ庁ニ至リ所願ノゴトク菩薩戒ヲサヅケラレシカハ閻王ノヨロコビスクナカラズ何ヲモツテカ布施セントテ偏ニ歎息シ玉ヒシカバ上人答テイワク若布施セント欲セハ娑婆ノ土産ニ地獄ノ衆生ヲ一見スルコトヲユルシタマエトノタマヘバ王ミヅカラ案内スベシトテ一百三十六地獄ヲ巡回シタマフニ上人涙アメノゴトク偏ニ如来ノ経説ニタガウコトナシ無間地獄幾百由旬トモシレヌ大イナル釜ノ中ニ融銅湧出ルコト波ノ巌ニ打ヨリモハゲシ若干ノ罪人浮ツ沈ミツ苦悩ヲウケルアリサマミルニシノビズソノナカニ一僧アリテ罪人ト倶ニ苦患ヲ受ケタマフ故イカナル罪ニテカヽル苦悩ヲウケタマフミナハイカニト問ヒタテマツレハ我ハ地蔵ナリ汝娑婆ニカヘリナハ諸人ニツゲシラシメテ善道ニ導引ベシトノ玉ヒ閻王ヨリハ授戒ノ布施ナリトテ一ツノ小函ヲ授ケタマフ上人コレヲモチカヘリ玉エリ其函ヨリ米ノ出ルコト量リツキセズ故ニ字名シテ満米上人トゾ諸人申シアヘリ篁ハ釜ノ中ノ菩薩ノ尊像ヲ模刻シテ一生護持シ玉フ釜出ノ地蔵尊ト称シ奉リ世ニ名高キ尊像ナリ

尾州名古屋白川町法蔵寺 釜出地蔵菩薩略縁記

人皇五十三代淳和天皇ノ御宇、参議左大弁小野篁、冥府ニ神遊セシニ閻魔大王語リテ曰ク、ワレ一切衆生ヲミルニ、善悪ノ業報自然ニシテ毫髪モノガレカタシ。モシ苦界ヲ度セント欲セハ戒ノ船筏ニシクハナシ。大和ノ国金剛山寺満慶上人ハ戒徳勝レタリ。正シク汝ガ師ナリ。ワレマタ上人ニ菩薩戒ヲウケムト欲ス。ナンジワガタメニ請シ来ルベシトノ玉フ故ニ、篁上人ノモトニキタリテクダンノヨシヲノベテ誘ヒ、再ビ閻王ノ庁ニ至リ、所願ノゴトク菩薩戒ヲサヅケラレシカハ閻王ノヨロコビスクナカラズ。何ヲモツテカ布施セントテ、偏ニ歎息シ玉ヒシカバ上人答テイワク、モシ布施セント欲セバ、娑婆ノ土産ニ地獄ノ衆生ヲ一見スルコトヲユルシタマヱトノタマヘバ、王ミヅカラ案内スベシトテ、一百三十六地獄ヲ巡回シタマフニ、上人涙アメノゴトク偏ニ如来ノ経説ニタガウコトナシ。無間地獄幾百由旬トモシレヌ大イナル釜ノ中ニ、融銅湧出ルコト波ノ巌ニ打ヨリモハゲシ。若干ノ罪人浮ツ沈ミツ苦悩ヲウケルアリサマミルニシノビズ。ソノナカニ一僧アリテ、罪人ト倶ニ苦患ヲ受ケタマフ。故イカナル罪ニ

テカヽル苦悩ヲウケタマフ。ミナハイカニト問ヒタテマツレバ、我ハ地蔵ナリ。汝娑婆ニカヘリナバ、諸人ニツゲシラシメテ善道ニ導引ベシトノ玉ヒ、閻王ヨリハ授戒ノ布施ナリトテ、一ツノ小函ヲ授ケタマフ。上人コノドニモチカヘリ玉エリ。其函ヨリ米ノ出ルコト量リツキセズ。故ニ字名シテ満米上人トゾ諸人申シアヘリ。篁ハ釜ノ中ノ菩薩ノ尊像ヲ模刻シテ一生護持シ玉フ。釜出ノ地蔵尊ト称シ奉リ世ニ名高キ尊像ナリ。

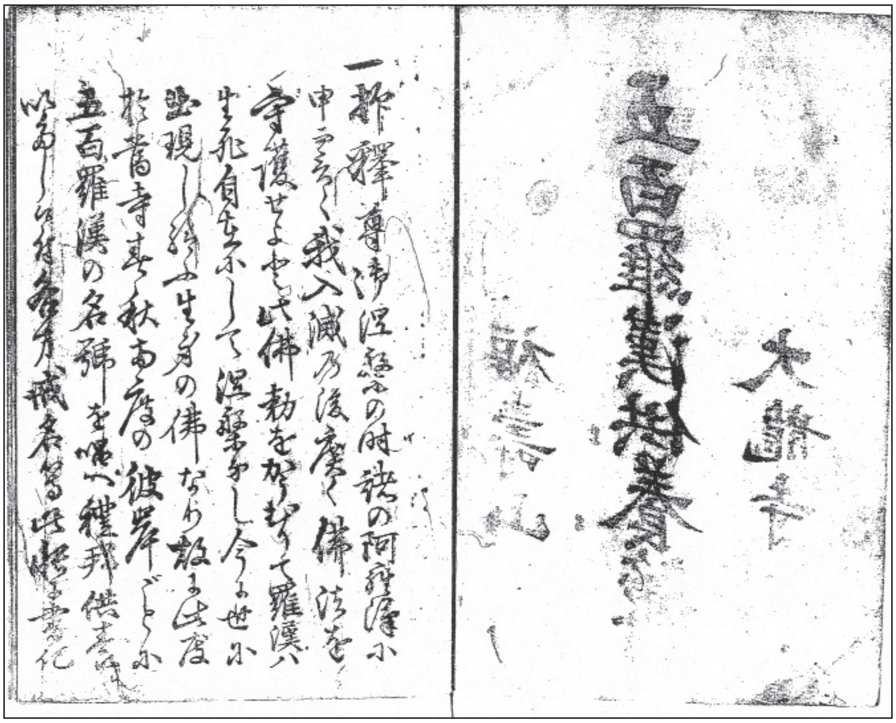
八、奉擬日本西方四十八願所名古屋御城下巡拝



奉擬日本西方四十八願所　名古屋御城下巡拝

一ばん　建中寺	二ばん　相応寺	三ばん　くろたに 自然院	四ばん　平田院
五ばん　とねり町 貞祖院	六ばん　なべや町うら 遍照院	七ばん　なべや町うら 養蓮寺	八ばん　ぜんのうじ筋 善光寺
九ばん　高岳院	十ばん　とくほんちう 光照院	十一ばん　ぜんでら町 東充寺	十二ばん　同 林松寺
十三ばん　ぜん寺町 玄周寺	十四ばん　するが町 西蓮寺	十五ばん　ひさや町 誓願寺	十六ばん　ふくろ町かんつう 円輪寺
十七ばん　はゞした 宝周寺	十八ばん　みづ車 蓮華寺	十九ばん　いしきり町 光明寺	廿ばん　同 養林寺
廿一ばん　同 寿経寺	廿二ばん　同さくら 誓願寺	廿三ばん　同 西光院	廿四ばん　同 法応寺
廿五ばん　同 尋盛寺	廿六ばん　同 瑞宝寺	廿七ばん　同 法蔵寺	廿八ばん　てん道町 徳林寺
廿九ばん　てん道町 清安寺	三十ばん　もんぜん町 阿弥陀寺	三十一ばん　同 性高院	三十二ばん　同 極楽寺
卅三ばん　七ツ寺	卅四ばん　やば 清浄寺	卅五ばん　梅川町 梅香院	三十六ばん　大ぼとけ 栄国寺
卅七ばん　ひよき 法然寺	卅八ばん　あつたはたや町 雲心寺	卅九ばん　同 寿琳寺	四十ばん　□の御門前あまでら 誓願寺
四十一ばん　田中町 清雲寺	四十二ばん　同 藤江寺	四十三ばん　太子町 聖徳寺	四十四ばん　亀井山
四十五ばん　市場 蔵福寺	四十六ばん　そぶくめ 高仙寺	四十七ばん　てんま町 法林寺	四十八ばん　同 正覚寺

九、五百羅漢供養簿



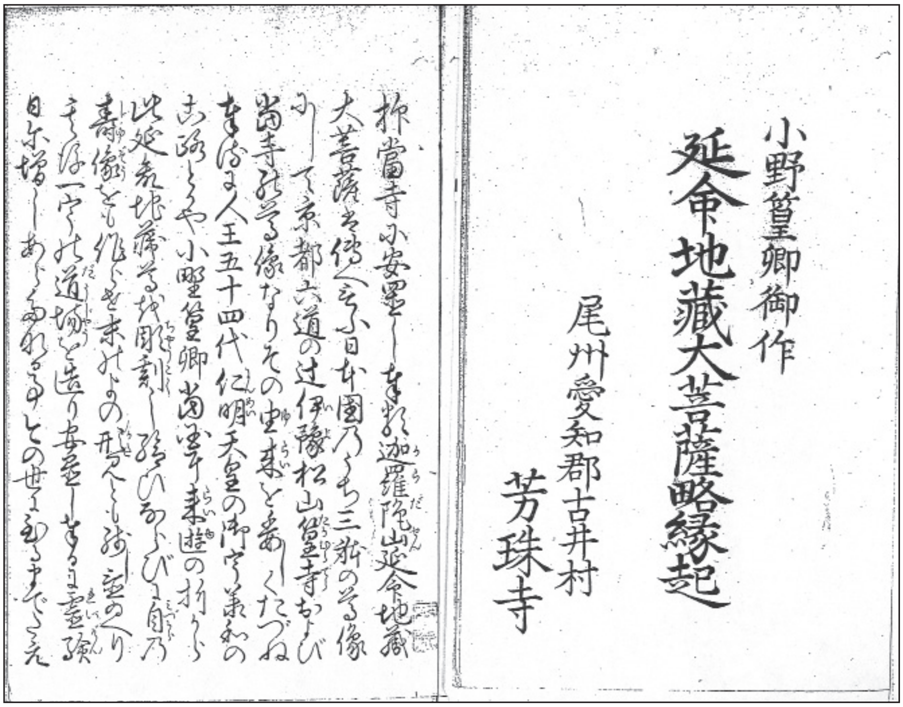
五百羅漢供養簿　福寿山大竜寺

一抑釈尊御涅槃の時、諸の阿羅漢に申て言く、我入滅の後、広く仏法を守護せよと。此仏勅をかうむりて、羅漢は生死自在にして涅槃なし。今に世に出現し給ふ生身の仏なり。故に此度、於當寺、春秋両度の彼岸ごとに、五百羅漢の名号を唱へ礼拝供養いたし候付、各方戒名等、此帳に書記可被成候。則位牌に書写し、永代両度の彼岸に無惚慢回向いたし候。就ては、先祖為菩提は勿論、現世には子孫繁栄、病難災難除、後生には成仏うたがひなし。依之十方檀信、此志を集者也。

但し戒名一霊に付、永代供養料

銀壱匁づゝに御座候間、御志御施入可被下候。

十、小野篁卿御作延命地蔵大菩薩略縁起


小野篁卿御作
延命地藏大菩薩略縁起
尾州愛知郡古井村
芳珠寺

小野篁卿御作

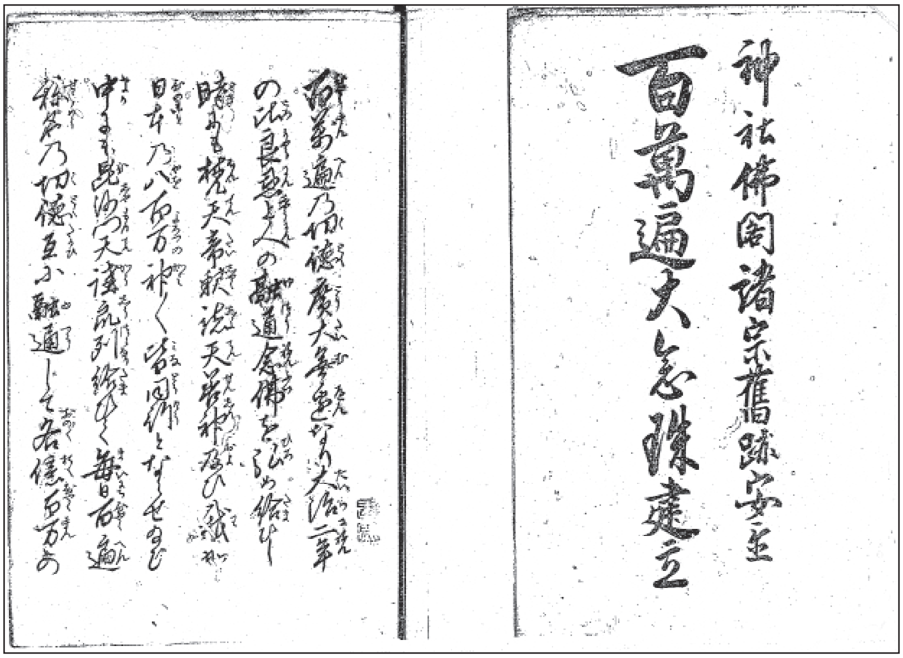
延命地蔵大菩薩略縁起

尾州愛知郡古井村　芳珠寺

抑當寺に安置し奉る迦羅陀山延命地蔵大菩薩は、伝へ言ふ日本国のうち三躰の尊像にして、京都六道の辻、伊予松山篁寺および當寺の尊像なり。その由来を委しくたづね奉るに、人王五十四代仁明天皇の御宇、承和のころとかや、小野篁卿當国に来遊の折から、此延命地蔵尊を彫刻し給ひ、ならびに自の寿像をも作らせ、末のよの形見とも残し置給へり。其後一宇の道場を造り安置し奉るに、霊験日に増し、あらたなる事今の世に至るまでたえせぬことになりにける。夫地蔵菩薩と申奉るは、六道の能化として、大悲もて一切衆生の苦しみに代り給ふ。御誓願ましまして、釈迦牟尼如来忉利天宮におゐて御説法のちなみ、地蔵菩薩を召て告給ふは、汝二仏中間の導師として、一切衆生の身を守り、三悪道におとさしめず、当来ひょうぶつ弥勒仏の出世に至りなば、残りなく成仏なさしめよとの給ふとき、地蔵菩薩は仏勅に背かじと有しこと地蔵本願経に説玉ふがごとし。しかれば

一たび結縁せし輩は、地獄におとさじと日ごとに地獄に至り。もしや縁にふれしものありぬれば、自身を分て其苦に代り給ふ事、延命地蔵経に明らかなり。昔小野篁、矢多寺の満慶上人を伴ひ、閻魔王をして受戒せしめたまふことあり。其時閻魔王宮へ通ひ給ひし処を、京六波羅のほとり、今に六道の辻といふこれなり。満慶上人地獄におゐて地蔵菩薩にま見え、正しく苦に代り給ふみすがたを見まゐらせし事、上人の伝に委しく載たり。また篁卿は、神変不思議は化人にして、昼は日本の天子に仕え奉り、夜は幽冥界にあそび五道の冥官の闕たるを補ひたまひし事篁の伝に見えたり。かゝる聖者の御作なれば、此尊を深く信心帰依し奉れば、現世に苦をまぬかるはさらなり。後生は菩薩にいさなはれて成仏得脱せむこと経説をなうたがひ給ひそと。あらましをしるしぬ。

十一、神社仏閣諸宗旧跡安置百万遍大念珠建立



神社仏閣諸宗旧跡安置　百万遍大念珠建立

百万遍の功徳広大無辺なり。大治二年の比、良忍上人の融通念仏を弘め給ひし時にも、梵天、帝釈、諸天、善神及ひ我が日本の八百万神々、皆同所とならせ給し、中にも毘沙門天講衆列給ひて毎日百遍称名の功徳互に融通して、各億百万の功徳を得んと侑め給へり。猶融通念仏の縁起に審なり。善光寺如来并閻魔大王功徳日百万遍を勧給ふに、月も日も功徳も□□もひとしく違ふことなく、難有御告なりと。八事山諦忍和上随喜して、功徳日百万遍修行し玉ふ。爰に徳本行者日本六十余州霊仏、霊社、女人禁制の霊場迄、百万遍の数珠の内に安置せば、参詣の功徳を結縁すべし。別して女人は禁制の霊仏、霊場居ながら拝し奉るなりと難有勧誘なり。今般其大念珠弘通に付、第二転を造り猶更諸人結縁し、罪障消滅せんと予か志願也。仰願は信心之輩、志所之仏神を数珠之内安置し玉ひ、其施主名前、先祖の法名相記、永世結縁せは、現世安穏後生極楽億百万の功徳を得ん事無量無辺なりと尓（歟）云。

月　日

橘町　栄国寺

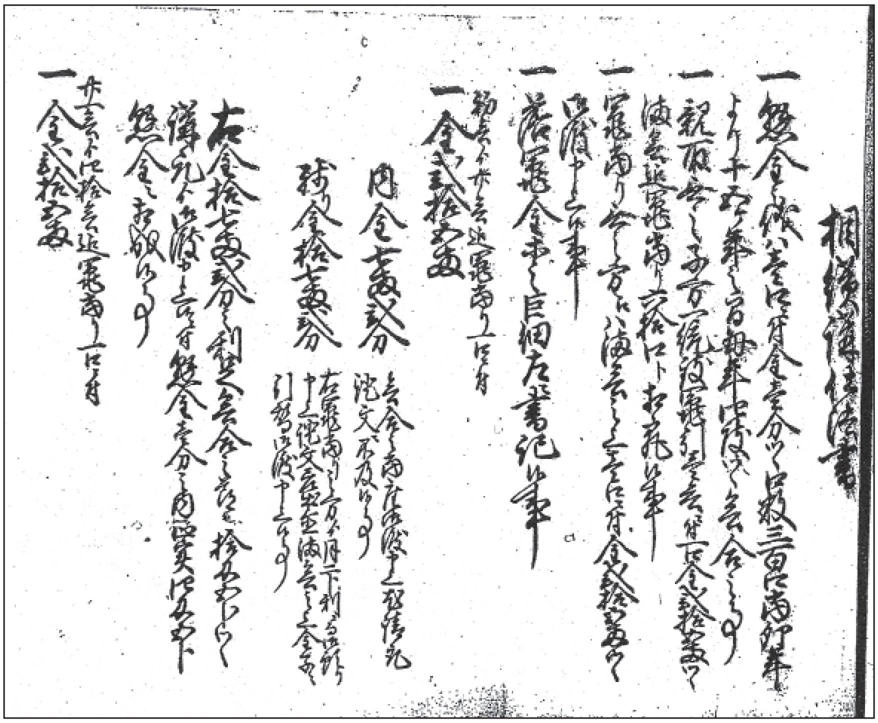
知事

十二、尾府矢場地蔵尊縁起

夫當寺地蔵菩薩は
国君尊名を蒙り奉り、永く當山に附して預り守らしむ。此尊像出現の濫觴は、諸国行脚する善入と云念仏者、或時越中の立山に登らんと欲して、其麓に止宿す。其夜夢中に高僧現して善入に告たまはく、我は此山の地獄谷に久しく春秋を送りて獄苦の衆生を済度する地蔵なり。我を汝か古郷に誘引せば、我悉く其国を引導せんと面見て夢醒ぬ。善入奇異の思ひをなし、同し行脚の者に語り、翌朝ともに雲霧を侵し、山に登り剣難の道を経て地獄谷と称する所、次第に遍覧するに、焦熱地獄となん名る谷有て地上より火燃、岩下より湯沸出る事胆を冷し魂を消す。其傍に一点の光を放ち髣髴たるものあり。善入同朋と共に近く寄て見れは、前夜の夢に入給ひし地蔵尊像なり。善入夢中に感する所、是に応せりと歓喜抑躍して、別當の山僧に告、本国に奉持せん事を願得て、則笈に納め国に帰り、暫濃州可児郡御嵩村に安置し、其後當国に移し奉る。それ諸仏菩薩は平等の大悲にして、いつれも利益限りなしとはいへとも、わきて地蔵菩薩は別願の子細有て、末世の衆生をうけかい給ひ、悉度し尽むと誓給ひにしかは、衆生順逆ひとしく結縁し奉れば、利益を蒙り霊瑞有事もとより世の知る所なり。當寺に弥陀如来御安置のゝち別堂を建て、諸人結縁の為に安置すへき旨、此尊命を蒙り一字を修営し、尊像を移せり。　猶来由縁起に委

清浄寺

十三、敬円寺相続講



相続講　　敬円寺

講元世話方人

日置村旦方

定日　八日　惣代　孫右衛門

二月　五月　同断　孫　蔵

八月　十一月　旦方惣代

京姥屋　善　六

同断

米沢屋　彦兵衛

同断

若狭屋　小兵衛

同断

福島屋　喜　助

同断

加み屋　庄　蔵

同断

いさば屋　源兵衛

㊞□月　㊞□月　㊞□月
壱匁　弐匁　三匁

相続講仕法書

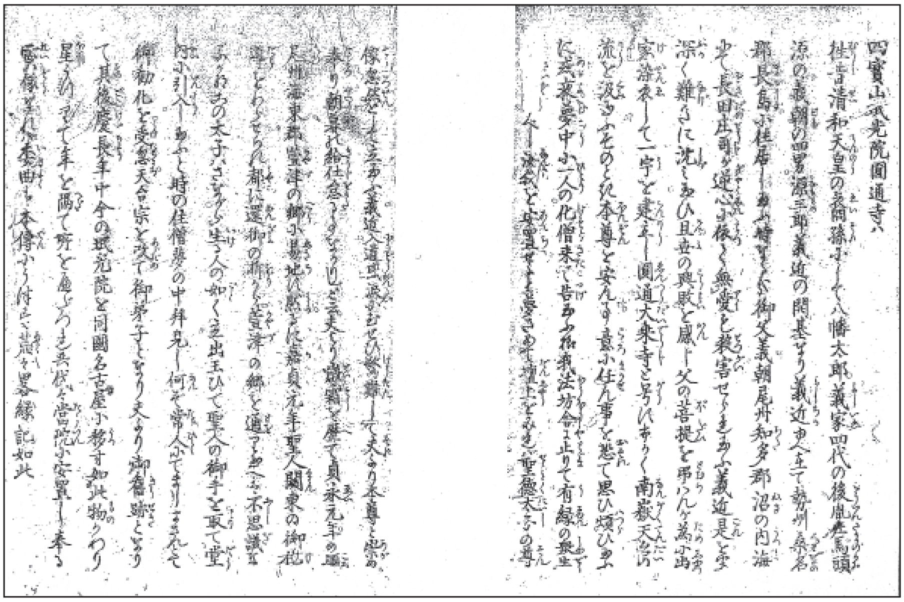
一懸金之儀は壱口ニ付金壱分つ、、口数三百口、當卯年より
十五ケ年之間、毎年四度つ、会合の事
一親取無之子方一統致鬮引、壱会に付、一口金弐拾五両
つ、、満会迄鬮当り六拾口と相究候事
一鬮当り無之片ぇは満会之上、壱口に付金弐拾五両つ、、御渡
申上候事
一落鬮金等之巨細左に書記候事
初会より廿会迄鬮当り一口に付
一金弐拾五両
内金七両弐分　会合之當座御渡申上、尤請取
証文不及候事
残り金拾七両弐分　右鬮当り之方より月弐分利にて御預
り申上証文差出置、満会之上金子に
引替御渡申上候事

右金拾七両弐分之利足会合之節に拾匁五分つ、、
講元より御渡申上候に付、懸金壱分之内、正実四匁五分懸
金に相成候事
廿一会より四拾会迄鬮当り一口に付
一金弐拾五両
内金八両三分　前条同断
残り金拾六両一分　同
右金拾六両壱分之利足会合之節に九匁七分五厘
つ、、講元より御渡申上候付、懸金壱分之内、正実五匁弐分
五厘つ、、之懸金に相成候事
四拾一会より満会迄鬮当り一口に付
一金弐拾五両
内金拾両　同断
残り金拾五両　同
右金拾五両之利足会合之節に九匁つ、、講元より
御渡申上、懸金壱分之内、正実六匁つ、、之懸金に相成候事
一初会より会合之節々寄金之内、落鬮金御渡申上、
残金并預り金共不残加入之御方ぇ金壱両に付

一ケ月五分五厘之利賃物引當貸渡、会合之節に
利銀計り請取、元金之儀は満会之上講元より
御渡申上候金子を以差継訳立之事

卯十一月

十四、四宝山珉光院円通寺略縁起



四宝山珉光院円通寺は、往昔清和天皇の裔孫にして八幡太郎義家四代の後胤左馬頭源の義朝の四男　源　三郎義近の開基なり。義近ゆへ在て勢州桑名郡長島に住居し玉ふ。時なる哉御父義朝、尾州知多郡沼の内海にて、長田庄司が逆心に依て無レ愛も殺害せられ玉ふ。義近是を聞、深く難きに沈み玉ひ、且世の興敗を感じ、父の菩提を弔はんが為に出家染衣して一宇を建立し、円通大乗寺と号す。ふかく南嶽天台の流を汲玉ふ。そのとき本尊を安ん事意に任ん事を恐て思ひ煩ひ玉ふに、或夜夢中に一人の化僧来て告玉ふ様、我法坊舎に止りて、有縁の衆生済度すべし。汝我を安置せると夢さめて壇上をみれば、聖徳太子の尊像忽然として立玉ふ。義近入道感涙にむせび驚難して、夫より本尊を崇め奉り、朝暮の給仕怠る事なかりしと云。夫より歳霜を歴て貞永元年の頃、尾州海東郡萱津の郷に易地す。然るに嘉禎元年、聖人関東の御化導をわらせられ都に還御の折から、萱津の郷を通り玉へは不思議なるかな、この太子はさながら生る人の如く立出玉ひて、聖人の御手を取て堂内に引入し玉ふと。時の住僧夢の中拝見し、何ぞ常人にてましまさんとて御勧化を受、忽天台宗を改て御弟子となり、夫より御旧跡となりて、其後慶長年中、今の珉光院を同国名古屋に移す。如レ此物かわり、星うつりて年を隔て所をへだつれ共、代々當院に安置し奉る霊像なれば、委曲は本伝にうつりて荒々略縁起如レ此。

十五、鯱名物

此外名物数多雖有之一紙限あれハ略之

鯱名物

次第不須

行司

宮魚市
一ノ宮万物市
熱田宮
津島朝市
枇杷島青物市

頭取

入鹿杁
中市繰綿
七里渡

天神植木祭
御神祭
津島祭
六月天王祭

宮馬之塔
同大山祭
熱田御的
国府宮祭
犬山祭
甚目寺馬ノ塔

堀川桜
馬島景清
白木鎧
桟留縞
熱田鯖尾琴
天道山躑躅

勧進本

桧材

差添人　御種人参

大関　瀬戸本薬新製
関脇　馬島眼科
小結　東かけ所堂
前頭　鳴海絞り
前頭　きんこ
前頭　津しま赤だ
前頭　小あぶ凧
前頭　内津茶

前頭　わり干大こん
同　名和干うどん
同　津島うちわ
同　赤津松たけ
同　保命酒
同　妙光寺牛房
同　知多米
同　犬山こんにやく
同　白うを
同　矢田鉄炮打場

同　知多郡万歳
同　しのじまひじき
同　瀬部いかき
同　緒川干海老
同　塩浜納豆
同　一ノ宮ろくろ
同　上ミ郡織屋
同　末もり西瓜
同　ぬり楊枝
同　朝日柿
同　日光川大しゞミ
同　大野汐湯治

同　持遊びお宮
同　上ミ宿木綿
同　宮築出シ雁かも
同　御深井じゆんさい
同　白雪粔
同　一色はまぐり
同　大脇はしご獅子
同　七寺茶めし
同　さゝしまやき物
同　三国一甘さけ
同　高くらかぶら
同　牧の竈土
同　宮唐だん子
同　古渡つけ木
同　今村生姜
同　木曽川堤

同　あつた大石灯籠
同　押切そうめん
同　熊胆丸
同　お舟倉青のり
同　東びわしま紙たばこ入
同　四ツやうどん
同　ぼた大舟
同　酔雪楼
同　新田がまほ
同　七間丁仏だん
同　さくらやある平
同　大もりわらじ
同　天王崎肥土
同　小牧山竹の子
同　勝川瑪瑙
同　富田ほたる
同　佐屋海道
同　広小路かごつり
同　山田川原揚火
同　裏町日雇方

総後見

桜田鶴
松風里
夜寒里
呼続浜
粟手森香ノ物
反魂香塚
二むら山
小牧やま
玉野川橋ケ瀬
岩崎滝
長久手古戦場
桶狭間古戦場

大関　宮重大根
関脇　浅井骨接
小結　とゞいつぶし
前頭　赤味噌たまり
前頭　綿ゆふき縞
前頭　常滑陶
前頭　大井このわた
前頭　ぜんご多葉粉

前頭　かに江うなぎ
同　小田井畳表
同　大野一口香
同　小網いな
同　忍冬酒
同　大高菜
同　萩原もち米
同　つしま麸
同　木曽川鱒
同　片端合羽干バ

同　寺本陰陽師
同　大の蛎
同　矢わせ杉苗
同　南のしほ
同　糀味噌
同　門右エ門つも
同　亀崎酒造家
同　上条うり
同　おふけやき物
同　こしづねぎ
同　善太川名吉
同　宮飯盛女

同　はり子虎
同　もとゆひ
同　ほり川ふな
同　立田蓮こん
同　川口やあめ
同　五条川鯉
同　しの木郷棒のて
同　いづ三うどん
同　豊助やきん
同　三右エ門おこし
同　下河原竹の子
同　ミがき砂
同　衣ケ浦月もち
同　正万寺丁戸障子
同　下一色もゝ
同　枇杷島はし

同　あつた裁断橋
同　ゑびやあんもち
同　鳥犀ゑん
同　天白堤青はち
同　南方毛ぬき
同　山ぢやそば
同　日置四ツのり
同　はしの寮
同　岩塚ほくち
同　橋丁獅子矢形
同　若ばや白玉
同　小いへ村葭てづ
同　安田赤土
同　かち川竹皮
同　定光寺山水晶
同　声坪鳶
同　き田なハて
同　前津三匁女
同　清須花火祭
同　知多郡黒鍬

世話人

秤座
鐘鋳師
八事山五重塔
大須五重塔
中根山萩
森津藤
長寿寺楓
総見寺霧島
長栄寺芍薬
高須賀菊
梅屋敷楳
上ミ郡駒桑立
おハり富士

蒼竜園戯作

十六、古今尾州味噌見立相撲

天保七申年新板

古今尾州味噌見立相撲

みそとハ自(ジ)賛(サン)の俗(ゾク)語

東方

大関　豊饒(フネウ)の日本一　宗室(ソウシツ)の封国(ホフコク)
関脇　立身(リッシン)の、、、　豊(トヨ)臣(トミ)太閤(タイコウ)
小結　大名の、、、　前太(マヘタ)大(タイ)納言(ナゴン)
前頭　重閣(チウカク)の、、、　楼上(ロウゼウ)の金鱗(キンリン)
前頭　伶人(レイジン)の、、、　尾張連(ムラシ)浜主(ハマヌシ)
前頭　外科(ゲクワ)の、、、　浅井の骨継(ホネツキ)
前頭　磁器(ジキ)の、、、　瀬戸の陶竈(スヱモノカマ)
前頭　武名の三国一　鬼上官(オニシヤウカン)清正

前　甘□の日本一　宮重大根
同　力僧の、、、　道場法師
同　漬(ツケ)物の、、、　薮(ヤブ)香(カウノ)物(モノ)
同　桧(ヒノキ)材の、、、　堀川材木
同　不義(フギ)人の、、、　長(オサ)田(タノ)荘(シヤウ)司(ジ)
同　走(ハシ)り馬の、、、　熱田端午(タンゴノ)祭(マツリ)
同　快戦の、、、　長(ナカ)湫(クテ)の戦場(センゼウ)
同　閫枢(イリカラクリ)の、、、　入鹿大池
同　美男の、、、　名古屋山三
同　職(シヨク)人の、、、　瀬戸唐(トウ)四郎

同　懸所の日本一　東本坊
同　玉の輿の同　高台寺政所
同　勇将の同　柴田勝家
同　念仏者の同　空也上人
同　素焼の同　常(トコ)滑(ナメ)大瓶(カメ)
同　砂糖作の同　寺中村原田氏
同　寛文通矢の同　保志野氏
同　海上通用の同　船印の扇の紋
同　精製の同　犬山蒟(コン)蒻(ニヤク)
同　坏(ハイ)土(ド)の同　祖(ソ)母(ボ)懐(クワイ)
同　比丘尼の同　誓願寺
同　指(シ)揮(キ)の同　鰯網(イハシアミ)の村君

同　血ノ池の日本一　柿並大坊
同　清潔(ケツ)の同　蓴(ジユン)菜(サイ)
同　行粧の同　卯月御祭礼
同　怪虫の同　長田蟹
同　古写(シヤ)本の同　大須の瑚玉集
同　揚ケ方の同　納屋裏雇脚
同　祭車の同　雷の車
同　古証文の同　妙興寺ノ文書
同　鑷(ケヌキ)の同　古渡の南坊
同　大粒の同　赤小豆
同　紺屋の同　小坂井氏
同　竹画の同　宮(キウ)筠(イン)圃(ボ)
同　長流の同　尾越川
同　疑(ギ)念(ネン)の同　信心同行

同　傀儡(クヽツ)の同　萱津ノ古駅(エキ)
同　同行の同　中島門徒
同　古硯の同　猿頭(エントウ)硯(ケン)
同　強盗(ゴウトウ)の同　日本左衛門
古(コ)物(ブツ)の頭取
熱田楽(ラク)太(タイ)鼓(コ)
七寺経(キヨウ)唐(カラ)櫃(ビツ)
甚目寺縁(エン)起(ギ)
笠寺釣鐘
性海寺古文書
万徳寺覚(カク)禅(セン)抄(セフ)
享(キヨフ)禄(ロク)宮の図

西方

大関　関脇　小結　前頭　前頭　前頭　前頭　前頭
宝剣(ホウケン)の日本一　将軍(セウグン)の、、、　創業(ソウゲウ)の、、、　雨衣(アマキヌ)の、、、　強力(コウリキ)の、、、　目医師(メイシ)の、、、、　天王の、、、　能書(ノウシヨ)の、、、
草(クサ)薙(ナキノ)神(シン)剣(ケン)　右(ウ)大(ダイ)将(セウ)頼(ヨリ)朝(トモ)　織(ヲ)田(タ)右(ウ)大(ダイ)臣(シン)　作名(サクメイ)の武蔵坊(ムサシボウ)　中(ナカ)島(シマノ)太(タイ)領(シウガ)　妻(ツ)女(マ)　明眼院　津島神(ジン)祠(シ)　小(ヲ)野(ノノ)道(タウ)風(フウ)

前　同　同　同　同　同　同　同　同　同
随筆の日本一　諫死の、、、　早稲(ワセ)の、、、　古書籍(コシヨジヤク)の、、、　奢侈(オゴリ)の、、、　車楽船(ダンジリ)の、、、　強戦(ケウセン)の、、、　横布の、、、　小姓の、、、　来船(ライハク)人の、、、
塩尻(シホジリ)百巻　平手政秀　阿野六月米　真福寺文庫(コ)　秀次関白　津島祇(ギ)園(オン)祭　桶狭間(サマ)戦場　黒白の二筋引　不破万作　陳(チン)元(ケン)贇(ヒン)

同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同
佳(カ)肴の日本一　同おふくろの　同猛将の　同女たらしの　同擬南京の　同製法の　同深川矢数の　同炮術の　同長大の　同紋染の　同道世の　同放鷹の
前浜魚　天瑞(スイ)寺(ジ)大政所　福島正則　良(リヤウ)忍(ニン)法師　赤津染付　知多海鼠腸(コノワタ)　須(ス)義(ギ)立(タテ)氏　元祖九耀(クヤウ)ノ星(ホシ)　大高菜　有松木綿　副(ソフ)田(タ)隠(イン)斎(サイ)　祖父江竿(サオ)鷹(タカ)

同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同
修正の日本一　香味の同　花火の同　怪談(カイダン)の同　浄土画の同　呉服所の同　神主の同　古木面の同　目淩の同　食塩(シヨクエン)の同　鋳工(トウコウ)の同　俳文の同　古井戸の同　取持の同
儺(ナ)負(オヒ)祭　東山松茸　清須六月祭　二宮山姥　正覚寺曼陀羅(マンダラ)　茶屋　千秋大宮司　一宮の神宝　江松村の老女　南野の塩　水野氏　暮(ホ)水(スイ)翁(オウ)　玉の井　勤行同行

同　古墳(コフン)の同　楊(ヤウ)貴(キ)妃(ヒノ)五(ゴ)輪(リン)
同　黒鍬(クワ)の同　知多壮男
同　老狐の同　於(オ)小女郎
同　窃盗(セツトウ)の同　柿木島金助
絶景(ゼツケイ)の世話人
尾張富士の頂(イタダキ)
竜泉寺の仏(ブツ)坂(サカ)
片(カタ)草(クサ)ノ三(ミ)国(クニ)嶺(タフケ)
玉野川の山水
継(ツ)鹿(ガノ)尾(オ)座(ザ)禅(ゼン)石(セキ)
加家観音寺
赤津の竜渕

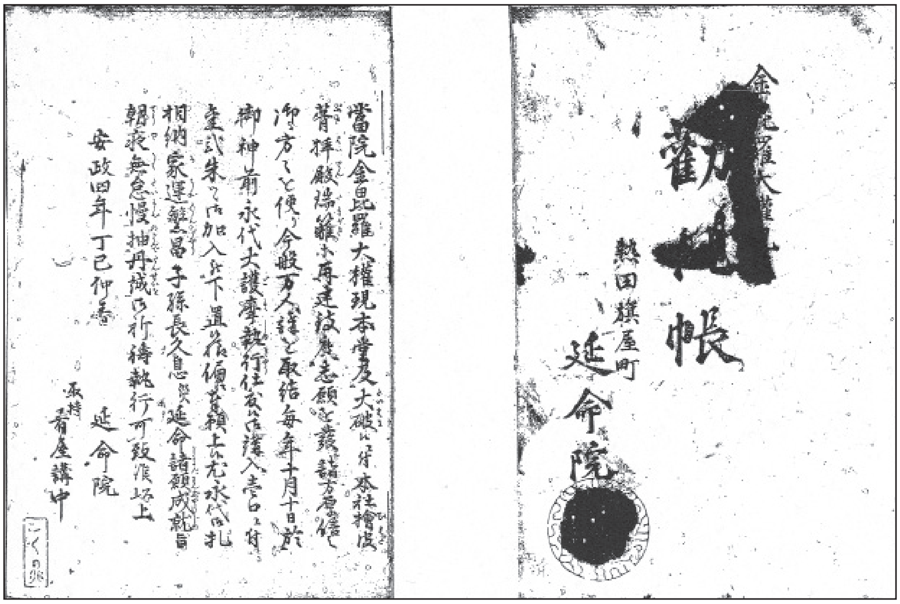
行司　尾張八丈（庭訓往来）

差添　尾張米（拾遺集）

差添　尾張粔（新猿楽記）

勧進元　延喜式　薬品四十六種

十七、金毘羅大権現勧化帳



金毘羅大権現

勧化帳

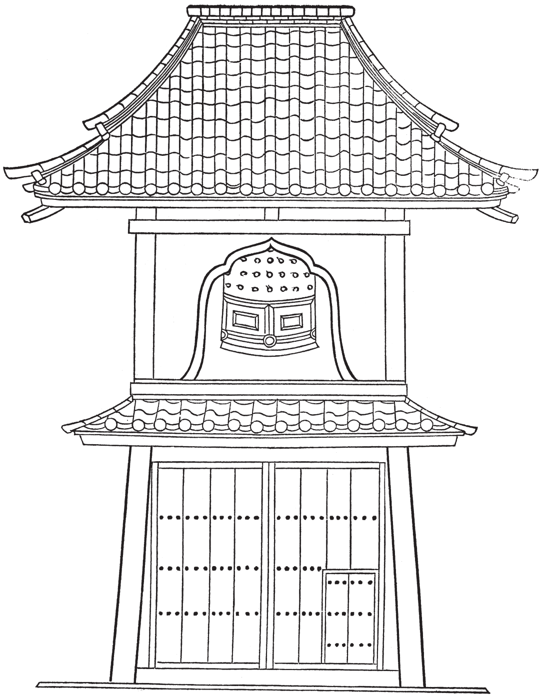
熱田旗屋町　延命院

當院金毘羅大権現本堂及二大破一候に付、本社桧皮葺拝殿・瑞籬等再建致度志願を発し、諸方厚信之御方々を便り、今般万人講を取結、毎年十月十日於二御神前一永代大護摩執行仕度候、御講入壱口に付、金弐朱つゝ御加入被二下置一候様、偏に奉願上候、尤永代御札相納、家運繁昌・子孫長久・息災延命・諸願成就旨、朝夜無二怠慢一抽二丹誠一御祈祷執行可レ致候、以上

安政四年丁巳仲春　延命院

取持　肴屋講中

十八、安斎院梵鐘勧化文



謹ミ惟レハ、本院ハ当職ヨリ已来篤信ナル各彦ノ助力ニ因テ寺格ヲシテ法幢地ニ昇進セシメ、加之ナラス庫院再建ノ大挙ヲ翼賛シ玉フノ厚意ヲ辱ス。因テ宗規ヲ遵奉シ、特ニ学林ヲ開設ス。故ニ平素ノ衆僧殆ト三拾名ニ降ラスシテ勉学ス。然ルニ昏苦ノ迷暗ヲ破却スル一大法器タル梵鐘未タ備ラス。因テ吾等新ニ鋳造セント欲スト雖トモ、綿力ノ及フ所ニアラス。尚冀クハ有信ナル諸彦一指ノ力ヲ協助シ玉ハンコトヲ。

當市松山町

明治二十六年二月　　安　斎　院

梵鐘発起者拝白

十九、慶栄寺本堂再建上棟式遷仏供養大会

慶栄寺本堂再建上棟式遷仏供養大会紀念帖

阿原山慶栄寺開基ハ、清和帝ノ曽孫六孫王源経基ノ三男頼信ノ後胤ニシテ、永正元年善正法師寺ヲ阿原村ニ創シ、慶安二年第三世寿玄舎ヲ府中勝蔓寺町（今ノ皆戸町）ニ移ス。第七世哲休狭地ノ為メ、再ビ今ノ処ニ移転シ本堂ヲ再建ス。爾来二百十有余年伝灯シ、現住職ニシテ第十二世ニ及ブ。然ルニ、大正八年八月中旬不慮ノ火災ニ罹リ、資ヲ内外ノ檀信徒ニ勧進シ匠ヲ名工ニ委ネ、大正九年十月十八日地鎮祭ヲ行ヒ、翌十年一月四日起工式ヲ挙行ス。十一年三月四日立柱式ヲ行ヒ、十二年五月工事作成シ、同月十二日上棟式ヲ挙行シ、同夜浄楽ヲ奏シ、儀列ヲ整ヒ僧網ヲ請ヒ四衆ヲ会シテ、恭シク、尊像ヲ新殿ニ安ズ。翌十三日遷仏供養ノ大会ヲ執行ス。然ルニ、両日共快晴ニシテ郡参堂宇ニ充満シ、境内悉ク人ヲ以テ埋ムト云フモ過言ニ非ザル大会ヲ厳修スルヲ得タルハ、一重ニ皇徳ノ余沢ト、仏祖ノ加護ト、檀信徒諸彦ノ熱誠ノ致ストコロナリ。依テソノ光景ノ一部ヲ撮影シ紀念トス。

五月十二日遷仏列次第

乞　鐘

先　駆　役僧々々式事従僧　伶人々々

先　駆　役僧々々式事従僧　伶人々々

僧網々々松火禅門持之　御櫃　檀家総代奉舁同同
僧網々々松火禅門持之　　　　檀家総代奉舁同同

山主　数衣筥従僧棒之　副住　従僧　檀頭　檀方
　　　香炉筥従僧棒之　　　　従僧　檀頭　檀方

檀方　同　信徒　同　同

檀方　同　信徒　同　同

遷仏式次第

乞鐘　午後八時

発楽

行列参進

入堂

僧網余間着座

金障子閉之

灯明立燭準備ノ事

僧網退出
鐘止
金障子開之
伶人出仕
外陣出仕
　先乱声
次　出仕
　下﨟為先
次　着座楽
数衣筥香炉筥座具配之
祖師前焼香礼盤ニ向
次　登高座
次　焼　香
次　総三礼
　三礼文同唱
次　如来唄
次　退出楽
次　下高座

御代前焼香
数衣筥香炉筥坐具撤之
次　退出楽
　上﨟為先
次　外陣退出
次　伶人退出

五月十三日列次第

先　駆　袮信徒　役僧　袮々々布衣
先　駆　袮信徒　役僧　袮々々布衣
布衣々々伶人々々童子々々々々外陣
布衣々々伶人々々童子々々々々外陣
持華篭
々々助音方々々入内衆々々童子（々々助音方々々入内衆々々童子）副住　童子（童子）
持華篭
童子々々数衣筥従僧（童子々々香炉筥従僧）住職　数衣筥従僧（香炉筥従僧）
袮々々後駆袮
袮々々後駆袮

大正十二年五月十三日

午　後　一　時

遷仏供養法会差定

先乱声

出仕

次　着座楽

万歳楽

次　総礼

次　伽陀啓首天人

次　登高座楽

皇麞急

登高座

次　敬白文

次　伽陀先請弥陀

次　無量寿経　上

次　伽陀万行倶廻

次　賦華篭楽林歌

賦　華　篭

次　阿弥陀経漢音

行道散華

次　撤華篭楽

傾盃楽

撤華篭

次　下高座楽

抜　頭

下高座

次　伽陀若聞此法

次　総礼

次　往生論偈

次　念仏讃

三首引

淘　十

初重　弥陀成仏

二重　七宝講堂

三重　如来大悲

位上曲

次　回向願以此功徳

次　総礼

次　退出

次　退出楽

長慶子

退出　　　以上

太　子　堂　記

推古天皇二年、南都元興寺ヲ聖徳太子御建立アリ。其五重ノ宝塔ヘ記念ノ為メ御自作尊像ヲ納メ玉フ。其後當寺九世義諦、同寺宝塔再建ニ尽力シ、其旧宝塔ノ古材ト同塔奉安ノ太子御自作ノ尊像トヲ元興寺ヨリ附属セラレ、此太子堂ヲ建設シ、聖徳太子尊像ヲ奉安スル処也

太子奉讃紀念碑

題字（照世間）　大谷派前御法主現如上人御筆

句　澆季有情蓑虫に似しも

その慈悲に　句仏㊞

大谷派當法主彰如上人　御筆

歌　さきの世ゆ能ちの世かけて明らけき

御法のみちはひらきましけむ

侯爵従一位　久我通久御筆

太子堂紀念碑

南無仏太子銅像ヲ碑上ニ奉安ス。文学博士南条文雄師碑文及當山現住職僧都滝義道現了碑文ヲ録シ、数千顆ヲ以テ三部妙典ヲ書シ、自ラ碑下ニ埋蔵ス。時ニ明治四十四年也。

大正十二年五月二十七日印刷（非売品）
大正十二年五月二十八日発行
名古屋市西区橋詰町
阿　原　山

慶栄寺再建係

名古屋市東区相生町二丁目

撮　影　　織田写真館

名古屋市西区仲之町一ノ十一

印　刷　　小坂井製版所

二十、沢観音略縁記

沢　観　音　略　縁　記

夫れ當寺に安置し奉る七躯の観音菩薩は、何れも千有余年を経たる国の宝とも謂つべき尊像にして、弘法大師、慈覚大師、恵心僧都等の御作なり。今を去る事二百五十年前、當寺開基正直公深く大士を信仰し、西国の霊場を巡拝して霊験に浴し、倍々尊崇せらる。或時大士老翁と身を化し、夢中に告げて宣はく。西国浄土は道遠く、山坂越ゆる難路ゆへ、老幼の身にては巡拝し難し。去りとて空しく過させんも、誠に哀れなり。依て西国浄土の観音を自が邸へ移し奉安し、庶人に参拝せしめなば、功徳広大無辺なりと。茲に於て正直、西国三十三所の七観音を一堂に聚め安置し奉り、御告を全せんと欲し霊躯を捜索すと雖も容易に得る事能はず。斎戒沐浴して三七日の間身を浄め、速に霊躯を授け給へと祈り奉る。正直の心願仏も感応まし〱て願期の満る夜、不思議や再び独りの老翁現はれて霊躯の

有所を教へ給ふ。正直大に喜び、教に従て洛陽に走り、灘波に馳せ、遂に希ふ所の大悲七躯の尊像を拝受し、財を投じ身を労し自が邸へ宝殿を建立して安置し奉る。即ち地獄道能化の千手観音、餓鬼道の教主聖観音、畜生道能化の馬頭観音、修羅道の教主十一面観音、人道の教主如意輪観音、不空羂索大士之なり。是れを称して沢の七観音と申奉る。西国三十三所の観音は此七躯なり。故に沢観音を信仰すれば、西国の浄土を巡礼すると斉しき功徳ある事疑ひなし。仰ぐべし沢観音尊むべし七観音。

南区新尾頭町一ノ鳥居

沢ノ観音　妙　安　寺

二十一、道祖金勢大神霊略縁起

道祖金勢大神霊略縁起

抑も當寺に安置する道祖神霊は、昔往仁和寺藤原兵衛兼家が難波の刑部左エ門国春の女明月姫と云美女に恋し、男女情けの和合も私ならず、始終の中の相生も神の結なりとし縁結び道祖神さちの神霊へ祈願する事数旬、遂に願望成就し姫を伴ひ乳母諸共東に行く途路、風光明美なる當処に休らひ、是れ清浄の霊地なり。斯る勝地へ道祖神霊を奉安せば、庶人を利益する事甚大なりとし、一は報恩の為異形の真体を安置すと云ふ。

道祖神霊とは幸のかみとて、縁を結び男女を幸す良縁を求め、幸福を求めんとする者、妊を欲する者、悪病になやむ者祈願して霊験著しと爾云。

熱田旧一ノ鳥居

富　春　山　妙　安　寺

執　筆　者　紹　介

堀　田　敏　幸（本学教授…………… フランス語）
HOTTA　Toshiyuki

文　　　嬉　　　眞（本学准教授 ………… 韓　国　語）
MOON　Hi Jin

金　　　美　　　淑（本学非常勤講師…… 韓　国　語）
KIM　Mi Sook

清　水　義　和（本学教授…………… 英　　　語）
SHIMIZU　Yoshikazu

Jane A. Lightburn（本学外国人教師…… 英　　　語）

川　口　高　風（本学教授…………… 宗　教　学）
KAWAGUCHI　Kōhū

教 養 教 育 研 究 会 委 員

（会長）福　山　　悟　　（副会長）山　野　明　男

（会計）高　田　正　義

石　川　雅　健　　※北　村　伊　都　子　　澤　田　真　由　美

清　水　義　和　　菅　さ　や　か　　清　　忠　師

中　村　　綾　　※文　　嬉　眞　　※安　富　眞　澄

山　口　拓　史

※本号編集委員

編 集 後 記

『教養部紀要』第62巻第３号が完成致しました。ご多忙の中、様々な分野の先生方に研究成果のご投稿をいただき、御礼申し上げます。

本号の編集締め切りが迫っていました昨年11月12日、教養部地理学教室の山野明男教授が急逝されました。山野先生には教養教育研究会の副会長も務めていただいておりました。教育・研究に熱心で、場を和ませるユーモアをお持ちであった山野先生の突然の訃報に深い悲しみを感じております。ご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。学問を愛し、教育・研究に真摯な姿勢で向き合われていた山野先生のことを忘れず、大学教員として努力して参りたいと思います。（北村記）

平成27年２月18日　印 刷
平成27年２月28日　発 行

（非売品）

愛知学院大学論叢
教養部紀要第62巻
第３号（通巻第183号）

編集責任者
福　山　悟

発行者　愛　知　学　院　大　学
教　養　教　育　研　究　会
〒470−0195
愛知県日進市岩崎町阿良池12
電　話〈0561〉(73) 1111（代表）

印刷所　株 式 会 社　あ　る　む
電　話〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.62 No.3
(Whole Number 183)

CONTENTS

Articles

Toshiyuki HOTTA：Beckett, tentative d'absence ········· (1)

Hi Jin MOON and Mi Sook KIM：Korean Language Learning in Japanese University
—Questionnaire Results and Analyses about Required Subject "Korean Language" in Aichi Gakuin University (2)— ········· (19)

Yoshikazu SHIMIZU：Labyrinth of Pre-Raphaelite Brotherhood by Soseki Natsume and Haruki Murakami's Translation of R. Chandler's "Long Good-By" ········· (45)

Jane LIGHTBURN：Hayao Miyazaki's *The Wind Rises*:
Oneiric Aspects of Character Development through Narrative Dream Sequence ········· (73)

Materials

Kōhū KAWAGUCHI：A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (13) ········· (168)

Kōhū KAWAGUCHI：Buddhism in Nagoya as Seen in the *Nounin Simpou* (9・Completed) ········· (130)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2015